波の間に間にうたごえを

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
波の間に間にうたごえを

【Ｎコード】
Ｎ２０９１Ｅ

【作者名】
ともみつ

【あらすじ】
俺の前に姫様がいた。レンズに恥じらい、その美しい姿は決して声を発しない。まるで歌うことを止めたカナリアのように。それでも彼女は教えてくれる。真心の思いやりと、家族への尽きぬ想いを。俺は、受け止められるだろうか？彼女がこの海に残した美しくも届かぬ禁忌を。

一枚目：海の声（前書き）

地元鹿児島を舞台にした小説を書いてみることにします。
実際にある場所が舞台なので、分からない場合は検索してください。見つかりますから。
サイトに写真があったりすれば、より臨場感があるんじゃないかなぁと思いながら書いていくつもりです。

一枚目：海の声

やばい、好きになりすぎた。

そして、また君と出会う。動き出したのは、未来でも過去でも現在でもない。動き出したのは想いだけ。

だから、凪ぐ波よ。海よ。今こそその静寂（しじま）を打ち払え。

あの歌声を響かせろ。俺の前に。約束と誓いの前に。

もう逃がさない。天吹（てんぷく）の心を奮わせる幽玄な音色を、逃がしはしない。

待っている先に何もなくても。

その意味を体が失っても。魂だけは、ここにいる。

だから、またあの日の空と海を二人でここから・・・・・・。

「あっつ」

どうして他人が他人のことを幸せだと言える？　どこにそんな資格がある？　本人が心から思ってることを否定する人間こそが幸せじゃない。

人の幸せは人としか分かち合えないなんてことはない。動物を飼う人が不幸か？　趣味に生きて物と暮らす人は不幸か？　それを否定して蔑む人間だけが不幸だろ。人を愛し、動物を愛し、物を愛す。共通することはお互いを大事に思い、心を通わせて、共にある。幸

せじゃないか。どうして幸せになんかなれないと思うのか、思わないといけないのか、俺には分からない。人の幸せを否定する人間は不幸。それで良いじゃないか。それが普通でそれだけなんだから。

だから、

人魚と人は不幸になったわけじゃない。

月の姫とおじいさんとおばあさんは不幸だったわけじゃない。

人は人の不幸を喜ぶのは違う。自分の幸せを慶んで欲しくて、人の幸せを歓んであげたいだけ。幸せになることはその人だけにしか、その定義がない。だから人はお互いの定義を掛け合わせて、溶け込ませて、一つの定義を作っていくだけ。

だから、

幸せになって良いんだ。

人と人魚も。

月のお姫様とおじいちゃんおばあちゃんも。

みんなみんな。

全部は無理でも、全部に近付く幸せに。

大人に成るとは、何を以ってそう定義付ける事が出来るのか？

大人に成りきれない子供は、強がるしかない。それしか方法を知らないから、それをすることで誇示しようとした。

それが強がりでしかなかった。離れようとしても断ち切ることが出来ない絆がそこにはあったから、求める先に求めてしまうしかなかった。

強がりで、情けない。でもそれが自立だと思って行動するしかなかった。そこに居場所がなかったから。そこに家族が居たから。

それは強がりの勘違い。気付こうと気付いていた手遅れの結路。

いつだってそこには、在った。なくなることなんかなかった。

真心の思いやり。それが確かに存在した。そしてそれを受け取るには、真心の想像力が必要だった。相手がどうして悩んでいるのか、どうして悲しんでいるのか、どうして苦しんでいるのか。それがど

うすれば救えるのかを求めるものなのかもしれない。
だからこそ、求めるものがあった。強がりが唯一つ求めて、辿り着く旅の先に見つけたものは、それしかないと言うことでしかなかった。

大学は知らないが、通う専門は授業毎に教室が変わる。大体は６０３と７０１の教室で学科の勉強。それ以外は写真資料室やネガ編集室、暗室、スタジオ、機材室、学生ホール、機材室、ロケとかばかり。同じ建物内に放送映画学科や音響芸術科、ミュージシャン学科、パフォーマンス学科が入っている上に、提携校のペット実習室やメイクルーム、デザイン、観光など様々な学科が入っているから、通う人間も綺麗で凛とした格好からパンクなド派手で近寄りがたい格好間で多種多様過ぎて、毎日登校するだけでも刺激がある。総合的に専門知識を学べる専門学校。入学して約五ヶ月。初めはこれから始まる好きなことだけを学べると言う期待に満ちていたのに、深く知るにつれて夢と現実の間に取り残されて、やる気をなくしていた。ただ撮るだけじゃない。それを経験で知っているクラスメイトの実力と己の過信との差異に打ちのめされた。負けず嫌いなのに、そのやる気さえ削がれた。だから夏休みに入ってからは合宿にも参加せずに、地元に帰ることを選んだ。休みたいと言うことしか頭にない。

次の日は少しだけ気分が高鳴っていた。早めに伊丹空港へ行き、家族への土産を買ってから、一服を交えつつ離着をする飛行機をカメラに収めていた。昔からカメラの他に飛行機が好きだった。休日に鹿児島空港に父さんに連れて行ってもらうのが、楽しみだった。何が良くて好きになったのか、今ではあの頃のような高揚はない。それでもレンズを向けると少しだけ興奮したりする。子供に戻れた気分かもしれない。何も考えず、何も知らず、ただ格好良くて空を飛ぶことが出来ることへの羨望から、パイロットになると笑顔でいられた無垢な時期が、シャッターを切る度に甦っては、現実に消え

た。
　それが地元に降り立ってからの初声。伊丹から鹿児島までは約一時間。積乱雲が陽の光にあまりにも真白に染まり、夏の空が彼方に思えた空の旅だった。空港内は冷房が効いていて涼しかったが、自動ドアを潜ると大阪とは何かが違う熱気が肺を焼く。見下ろしていたはずの積乱雲が入道雲として南国を彩り、空が見下ろしていた海よりも青かった。
　俺は地元に戻ってきたと言うのに、ため息しか出なかった。空港までは一時間の飛行だが、実家までは空港バスで二時間掛かる。なんとも利便の悪い空港だと、利用する度に嘆く。経営の悪化だとかでリムジンバスじゃなく、ただの路線バスが空港バスになったりするから、その時は殺してくれと思う乗り心地だ。家に帰るだけなのに、どうしてこんな試練に耐えないといけないんだか。
「久々の鹿児島っては悪くないな」
　海沿いを行き、遠くの対岸の薩摩がかすんで見える。海も陽光を反射して、ダイヤを散りばめたように輝いていて、早く海の匂いを嗅いでみたくなった。海なんてもう何年も行ってないないんだけど。
「友広。おかえり」
「ああ、うん、ただいま」
　気恥ずかしさが湧いた。大阪に出てから約五ヶ月。久しぶりに見た母さんは髪形が変わっていて、一瞬誰だか分からなかった。周りの親は四十代以上だったりするのに、俺の両親はまだ三十代をギリギリ保ってる。だから久しぶりに会うと変な感じがした。
「これ、土産」
「何買ってきたの？」
　海辺の町じゃない、田舎だと位置づけされている鹿児島の中でもそれなりに町をしている鹿屋。大隈地方の拠点都市。久々に帰ってくるとやっぱり俺の居場所は大阪なのかなと、実家なのにすぐに馴染めなかった。
「愛紀は学校？」

「来週まで夏課外よ」
幸せな家庭だと思う。特出したもののない平穏な家庭。家の中を見ても俺がいた頃よりもインテリアが変わっていたりして、戸惑いもあるが綺麗にされてる。俺を十八の時に生んだ両親にしては随分と良い親なんだな、と土産袋を開けては、美味しそうとか欲しかったのとか喜んでいる母さんを見るとそう思った。
「学校は大丈夫？　ちゃんと部屋の掃除と洗濯はしてる？」
「成績表なら届いてるでしょ。生活は問題ないって」
掃除は汚いと気付いてからしかしてないけど。
「その割には休んだ日が多いんじゃない？」
「それは、まぁ色々と」
「あんまり遊んでるとお父さんに叱られるわよ」
「勉強してるって。実習も理論も別に悪いわけじゃなかったはずだけど」
どうしてだろう？　母さんと話しているだけなのに、緊張してる。まるで友達の家に来て、その親と話しているような感覚。変わっていく家族から離れていくことは自立への一歩。いつまでも親は親ではいられない。必ずいつか死ぬ。そして子もいつかは死ぬ。いつまでも家族ではいられない。分かっているのに、それが今目の前にあるような気がして、実家なのに緊張が解けなかった。きっと、かつての光景が思い出に消えたからだろう。
「ご飯は食べたの？」
「空港で食ってきた」
それでも母さんは何かと俺を気遣う。久しぶりの我が子の帰宅に嬉しそうなのは、見ていて分かる。でもだからこそ、俺は自分自身における違和感を拭えなかった。家族なのに当たり障りのない返ししか出来ない自分が嫌だった。罪悪感と後悔が母さんを見ることを躊躇わせる。
「ただいまぁ」
妹の愛紀が通うのは俺の母校、鹿屋高校。地元では進学校として

少しは名の知れた高校だった。勉強漬けで朝は七時半から課外授業が始まり、三年にもなれば受験ともあって、放課後も午後六時まで放課後課外があり、勉強にうんざりして進学を専門に選んだ記憶がある。それでも体育祭と文化祭を合わせた三星祭など楽しいことも確かにあった。

「おかえり」

「あ、帰ってたんだ。お帰りお兄ぃ」

懐かしい制服。女子高生も田舎だと随分と純真に見えるから不思議だ。校則が厳しいせいなんだけど、清楚に見えるその不思議さはおかしかった。

「ねぇねぇ、お土産は？」

「早速かよ。テーブルと冷蔵庫の中」

わーい、と母さんが夕食の支度をしている隣に並ぶ。カウンターキッチンのせいで、二人の会話が嫌でも耳に入る。愛紀は家族なんだなと、俺とは違って課外が疲れたとか、折角の夏休みなのにとか明け透けと母さんと心を通わせている。見た目も若い方だからか、姉妹のように明るい二人を見ていると、もう俺の居場所はなくなったんだなと少し胸が痛かった。

「あのさ」

「うん？　何？」

二人がソファで寛ぐ俺を見る。さすがは親子。似ている。愛紀を呼んだんじゃなくて、母さんを呼んだつもりなんだけど。

「明日からさ、根占の方に行ってくる」

「学校の宿題？」

驚くことも無く、すぐに答えに結び付けられる。理解が早くて助かる。

「この辺りじゃ被写体もないし、あっちの方なら色々と使えそうだから」

「えー、お兄ぃ、またどっか行くの？」

「課題だ。その為に帰ってきたようなもんだぞ」

実家でゴロゴロとする夏休みもありだと思っていたが、今帰ってきて、それが出来ないと俺の中で答えが出た。数日も経てば慣れて昔のようになれるんだろうが、どうもそれまで家族の中で家族ではないと感じながら過ごすのは苦痛だった。見栄なのも知ってた。

「夜には戻って来なさいよ」

「いや、泊り込みのつもりなんだけど。しばらくは」

母さんと愛紀が驚いて、はっ？　と俺を見てる。その顔まで同じだ。根占までならそう遠くはない。日帰りも余裕で出来る距離だが、撮影するならじっくりと行きたい。何を撮るかは決めてはいないが、数日は必要だと踏んでる。それだけが理由じゃないけど。

「泊まりって、お金はどうするわけ？」

「バイト代があるから、一週間くらいは大丈夫」

「一週間も旅行行くの？　お兄ぃズルイ」

驚き方の内容まではさすがに似てないか。

「何を撮りに行くの？」

「いや、それはまだ決めてない」

呆れたと母親が失笑する。そりゃそうだろうが、今はこの家にいたくないんだ。何かを求めているのに、何を求めているのか分からない。無気力感が否めず、いつまで経ってもソファに身を委ねきることも出来ない。

「決めてないのに旅行行くの？　私もどっか行きたい。ねぇお母さん」

「愛紀は課外あるでしょうが。自分でお金出すなら何も言わないけど、お父さんにちゃんと言いなさい」

「分かってる」

深く聞いてこないと言うことは、単に課題のためだと思っているのか、それとも俺が一線を引いた応対をしていることに勘付いたかのどちらかだとは思うが、とりあえずはそこで話を区切り、少しずつ色褪せて赤みを帯びていく窓の外の雲に視線をずらした。耳には愛紀が旅行に行きたいと女子高生の割りに甘えん坊なのが抜けてい

ない駄々が聞こえていたが、口を挟む気にはなれない。仲の良い親子の枠の中に入ることが出来なくなっていた。いつの間にか俺から離れようと堪えているのが酷い苛立ちを感じた。

「ねぇねぇ、お兄ぃ、写真見せて」

夕食後、父さんに話しにいこうとしたら、愛紀が顔を出した。もう俺の部屋は昔の面影もなく、来客用なのか物置なのか分からない家具置き場を化し、俺は客間の畳の上に用意された布団しか居場所が無かった。明日の為に持ち帰ったパソコンで民宿の情報を探しながら、隣の部屋から漏れてくるテレビの音を聞いていた時だった。

「写真？　大したのは持って帰ってきてないぞ？」

「良いから良いから。将来カメラマンになるんでしょ？　どんな写真か見たいじゃん。アマチュアの実力拝見って感じ？」

枕元に置いていたパソコンを覗きこむように隣に倒れてくる。相変わらず変わってない人懐っこさ。高二だと言うのに、子供のように俺のパソコンを覗きこんでくる姿には、多少の困惑も感じる。嫌じゃないんだけど。

「こっちが風景で、そっちは人物、好きなの見てくれ」

いちいち説明するのも面倒で、パソコンをずらして愛紀の前に差し出す。へぇやら綺麗やら、一枚一枚に感想を言いながら見ている愛紀を隣に、俺はネットで探した民宿に予約を入れるために電話をかける。

「少しお聞きしたいんですが、明日から一週間ほど予約は出来ますか？」

電話に出たのはおじさんだった。値段も安く、海の近くだと書いてあったから連絡をしてみた。夏休み期間中だから空いてないだろうなと確認するから待ってくれと言われ、隣で写真を見ている愛紀の方に視線を向ける。

「ほんとに旅行行くんだ？　良いなぁ、お金と時間があると良いよねぇ。あたしも早く大人になりたいなぁ」

「旅行じゃない。根占だぞ？　一時間もない場所が旅行になるか？」

根占から鹿屋高校に通う生徒もいる。俺のクラスメイトにも居た。不思議なことじゃない。
「でもズルイぃ。一人だけ遊びに行くなんてさ。こっちは勉強漬けで頭おかしくなりそうなんだから」
「勉強に狂えば、良い大学行けるだろ」
「でもさぁ、結婚して家庭入ったらそんなの関係なくなるじゃん。女ってそーゆうのって何かもったいないよねぇ。あたし、そんなら遊んでたいけどなぁ」
頬を膨らませ、ぶう垂れているが、人生そう気楽なものじゃない。でも、家にいるよりは悪くないかもしれないと、口には出せないが早く泊まりに行きたい気分だった。
「あ、そうですか。ならお願いします。え？　ああ、はい、一人です」
もしもしと低い声が返ってくると、愛紀とは反対の壁を見ながら泊まれると言うので予約を入れた。待っているぞと言われ、苦笑で返して切った。
「空いてたの？　どこのホテル？」
「民宿だ。そんな金があるわけないだろ」
飛行機代に土産代、その他の交通費を合わせるとそんなに余裕はない。愛紀には少しくらい小遣いを渡そうとも思ったが、撮影が終わらないと残金がどれほど残るのか分からないから、言わないでおく。
「良いなぁ。私もどっか行きたいよぉ」
「課外があるだろ？　まぁ鹿屋のはきついもんな」
そうだよぉと不満を漏らし、うつ伏せから仰向けに転がる愛紀に、何故か笑いが零れた。
「来年は朝から放課後まで課外漬けだぞ、今なんか楽なもんだろ」
「それ言わないでよぉ。お兄ぃはよく耐えれたよね？」
担任次第らしいが、俺の担任は進学が決まるとセンターを受けなくても良いと言ってくれたから、九月には進学が決まった時点で俺

の学生生活における勉強は人知れずあっさりと終わった。それでも放課後一時間は他の受験者と同じように教室で自主学習か読書を強いられた。専門から課された課題を済ます時間にはちょうどで、なかなかに有意義に過ごさせてもらいもした。センター前と卒業までは合格者や就職、専門進学者は午前のみで終わるし、進学校に来た意味をやっと見失った瞬間でもあった。

「大学進学を目指さなかったからな」

近場で公立で安い。その上地元では名の知れた学校と来れば、それだけでも地元じゃなかなかのステータス。高卒の資格さえ手に入ればそれで良かったから、楽しいことよりも疲労した思い出が多い生活も悪くは無かった。愛紀にはそうなって欲しくはないけどな。

「お前は大学志望だろ？　夏もちゃんと勉強しろよ。帰宅部なんだし」

「まだ一年以上あるもん。それに大学にするかは決めてないの」

決めてない、ね。ちゃんと決めてから進学したつもりでも、迷い始めている俺が言えたことじゃないかもしれないが、

「大学に行けば専門と違って、時間がある。そっちの方が迷っていられる時間もある。とりあえずでも大学を選んどけって。損するもんはないぞ」

明日のためにもそろそろ切り上げようと、愛紀から取り上げてパソコンを閉じる。クーラーの送風音が静寂を与えんと意識しなければ耳に残らない音を俺の耳に響かせてくる。

「・・・・・・何だよ？」

「お兄ぃ、迷ってるの？」

墓穴を掘ったのか、俺は？　愛紀が真剣ではないようだが、今日帰ってきて明日出かける用意をする俺を怪訝そうに見る。

「別に。そう言う事があって専門を辞める奴もいるんだ。そうはならないように大学に行ってた方が良いだろ？」

「ふーん。もう誰か辞めちゃったの？」

「聞かされただけだけどな。そうはなりたくないだろ？」

きっと辞めた奴は、俺と同じような人間なんだろうとは想像がつく。意気込んでいた割りに、プライドが高く、教わることが嫌いで、素直に耳を傾けることが出来ない。分かっているのに体がついてこなくて行動出来ない。その理不尽さと力不足に耐えられなくなり辞める。そうはなるまいと思いながら、このままで良いのかも最近分からない。

「まっ、まだまだ時間あるし、平気平気。何とかなるって。ケセラセラってやつ？」

「後悔だけはするなよ」

父さんのところに行くと言い残して部屋を出る。まだ愛紀は何かを聞きたそうにしていたが、これ以上は余計なことを聞かれたくは無かった。

二枚目：仮面が外せない

父さんのところに行くと言い残して部屋を出る。まだ愛紀は何かを聞きたそうにしていたが、これ以上は余計なことを聞かれたくは無かった。

「今上がり？」

「ああ。どうかしたのか？　今日は疲れただろ？」

一階に降りてくると母さんは寝たのか姿はなく、テレビも消え、リビングには父さんが上半身裸で出てきた。

「まぁ。ってか、また太った？」

トランクスの上に腹が乗ってた。若く見えはするが、家の中ではただのおっさんだ。

「お前は痩せたろ？　ちゃんと食ってるのか？　母さんが心配してたぞ」

そう言いながら冷蔵庫からビールを持ってくる。いるか？　と差し出されるが、まだ十九。法的には飲めないが、そんなもの歓迎会やらでは関係ない。だから知った。

「いい。強くないし、明日の事もあるから、早めに休むつもり」

扇風機を自分に向けながらビールを煽る父親の姿は、風呂上りだからしょうがないのかもしれないが、もう少し着飾るくらいはしてもらいたい気分だった。若さと態度が一致しないのは少々呆れもするが、家族だから遠慮はしないってことなんだろうな。俺は遠慮して欲しいのに。

「根占だったか？」

「自分の金で行くし、そのつもりで帰ってきただけだから」

どうやら母さんか愛紀に話は聞いてるようで、話は早い。

「別に構わないが、足りるのか？　バイト代だけじゃきついだろ？」

反対はない。父さんは高校時代に父親になった。母さんは中退した。そんな家庭環境だからか、厳しく言われることがあまりない。

それでもその当時のことは聞かされることもあまりない。色々と問題があったはずだから、俺も聞きはしない。ただ、そんな時に出来た子供が俺で、今まで育ててもらっている以上は、生きないといけないんだなと言われてはないが、感じずにはいられない。ある意味重荷だ。失敗出来ないからこそ、専門に行った。それが根底では大きな理由かもしれない。そのせいで愛紀が大学進学と言うことに関してどこか楽観的なのに、まともに意見出来ない俺が居た。長男として、俺は期待に応えられていないかもしれないと思うと、足が竦みそうになる。こんな息子で良かったのかと自問自答しても答えが出てこない。実に情けなくて悔しかった。

「・・・・・・いいの？」

「課題の為だ。良い写真を撮って来い」

腰を上げて、電話台においていた財布から取り出した三万円。それをぶっきらぼうに差し出してくる。すぐには受け取れなかった。バイト代で全てを賄えるくらいは貯めてた。残りは少ないかもしれないが、それでも戻ってからバイトをすれば取り返すのは時間の掛からない程度の金額はある。

「・・・・・・ありがとう」

意外な施しに、困惑しながらも受け取らせてもらった。あって困るものじゃない。代わりに父さんの財布が大丈夫だろうかと言う疑問が消えない。

「その代わり、撮った写真は見せろ。一度も見せようとしないだろ、お前は。たまには専門生の力作くらい送ってこい」

そう甘い話はないと言うことらしい。分かってたけど。

「学校の方はどうだ？」

時間があるならもう少し付き合え。テレビに向いてビールを煽る背中が、そう見えてソファに腰を下ろした。父さんと面と向かって会話なんか何年ぶりか覚えてないから、居心地が悪かった。

「まぁぼちぼち。特に問題はない、かも」

「友達は出来たか？」

「一応は。結構変な奴が多いけど」
柄がそうだから普通の専門に比べると校風はかなり自由すぎる気もする。教員でさえプロとして働いている分、教員らしい格好をしているのは事務室の人や学園長とかくらいだ。
「バイトとの両立もあるんだろ？　楽しめてるのか？」
意外なことを聞いてくるなと思う。勉強は出来ているのかとか、ちゃんと行っているのかとかそう言うことじゃない。
「楽しいっちゃ楽しいよ。好きでやってるわけだし」
そうか、とまたビールを流し込んだ。その言葉に痛みを感じた。
「好きでやっているなら、それで良い。ただ、自分で決めたことだろ？　やり遂げるところまではしっかりやるんだぞ」
「・・・・・分かってる」
即答は出来なかった。嫌いなことじゃない。高校生活までに比べると自由で楽しいと思う。でも好きなのかと聞かれると、どうなのだろうと自問が答えを導き出せていない。それを聞いてこないことは幸いなことだった。高卒と同時に働き出したからこそ、俺には色々と訊きたい事があるんじゃないかって、予想とその回答は用意してたのに、無駄な気がしてきた。
「俺は良いが、母さんと愛紀はお前が帰って来てから一度くらいは霧島に行きたいって言ってたぞ」
霧島は温泉街。昔から夏休みは家族旅行に行っていた思い出がある。高校以来は霧島神宮に正月に何度か足を運んだくらいだったと思う。
「ソフトクリームが食べたいって言ってるからなぁ」
「高千穂牧場の？」
味が濃厚で俺は好きじゃないんだけど、霧島に行くと必ず立ち寄っていた観光地。今思えば霧島でも良い写真が撮れる気がする。でもそうすると家族旅行になりそうで、今はそんな気分じゃない。一人が良い。
「長くはいないんだろ？　帰ってきたら一度くらいは旅行行くか？」

「時間があれば。やること多いから多分時間取れないかも」
嘘をついた。夏休みは長く、時間もある。でも俺の口はそれを躊躇うこと無く発した。だからそれで話が終わった。厳密には終わらせた。そろそろ寝るよ、と立ち上がるとああ、と短い返事が背中同士の間を漂った。父親なのに、やはり遠慮と距離を感じた。それはきっと俺が発した空気を父さんがむやみに破ろうとしなかっただけだ。分かってる。だからこそ、俺は歩み寄ることが出来なかった。これが距離だと思った。今の俺が気付いた家族との。その後は、長年暮らした家なのに、客として通されたような布団の皺に体を横たえた。隣からはまだ起きているんだろう。愛紀がテレビを見ている音が先ほどと変わらずに少しだけ響いていた。
「居心地悪いよな、お互いに」
食事中も当たり障りのない、面白みのないやりとりをした。風呂とトイレとこの部屋だけが居心地が良かった。喧嘩はしてない。仲が悪いわけじゃない。初めての一人暮らしをする息子を心配する親と、家族が揃ったことに喜ぶ妹。それだけだってのに、歩み寄ることを俺の心が許さなかった。早く帰りたいと思いながら帰郷して、帰郷したら早く家を出たいと半日で息詰まりを感じた。いや、感じさせたんだろう。俺のせいで。
「帰りはそのまま大阪帰ろうかな」
ここに戻ってこれば、今日のような気まずさが必ず出てくる。故郷なのに大阪の方が心が安定していた。クーラーを切り、扇風機に切り替えてからじんわりと部屋の中に夜でも冷めない熱気が篭り始めて、息苦しさがやたらとうるさいクツワムシか何かの音色が苛立ちを加速させた。
「分かんねぇ」
俺が悪いことは知ってるのに、それをどうしても家族に当てつけようとしている自分が惨めで、家族に申し訳ないと思っているのに素直になれない。色々と話そうと思っていたことだってあったのに、父さんや母さんを前にするとその気持ちが悔しさのような苛立ちに

変わって、一人になりたいと強く思うしか俺には出来なかった。
拒絶しているのは家族。俺じゃない。悪いのは俺じゃない。俺は好きで選んだ道を進んだ。なのに世界は広くて、遠い。慰めが欲しいのか、哀れみが欲しいのか、蔑みが欲しいのか、全てが欲しくて全てが欲しくなかった。優しいから拒絶して、温かいから離れる。でも求めている。帰ってきてからわけが分からなくなってきている。
「寝ようにも寝れねぇな、これじゃあ」
電気を消し、再び横になる。虫音と扇風機の音がムカつく。久しぶりの家だと言うのに、何も面白くも嬉しくもなくなっている。早く帰りたい。一人で気楽で気ままに気の向くままに居られる部屋に。でも課題のことも頭を離れないのは確か。定まらない写真集制作のテーマ。向こうにいる時は愛しさのあった田舎にテーマを求めていた。それが今はない。だからかな、この当てつけで過ごした数時間を今更悔やんでいるのに、自責ではないと納得しようとしているのは。握り締めた拳を自分の太ももに打ちつけた。たまった八つ当たりは乾いた音と痛みを俺にだけ響かせた。
翌朝は誰よりも早く目が覚めた。少しだけ静けさと涼しさに締まる空気の家の中は、やはり居場所がないんだと内装を見て思うしかなかった。昨日と何も感じることが違わない事実は、折角の朝の気持ち良さをまるで感じさせてはくれなかった。根占まではバス。まだ免許を取ってないから、自由登校の間に取りに行っておけば良かったと今更ながら後悔したりする。
六時を少し過ぎた頃、そろそろ出ようと一旦部屋に荷物を取りに上がった。階段の軋む音がしないように歩いたが、結局軋んだ。
「あれ？　もう起きてたの？」
愛紀がラフな格好で目覚めてきた。寝癖で髪にウェーブがかっている。男に見せられるものじゃないかもな。実際、妹と言いつつも女を感じはしない。家の中だからこそ、愛紀のだらしなさは変わらない。人前で繕っていようが、俺の知る妹の姿には顔洗えとしか言葉が出てこなかった。

「今日も課外だったな。朝飯くらい作ってやろうか？」
「ううん。朝はお腹減らないから食べないの」
大口開けて恥も知らないように欠伸をしながら、背伸びと妙な喘ぎを出しながら階段ですれ違う。肩をすかしながら出てくる苦笑を飲み込んで部屋に置いていた黒バッグ一つしかない、この家の中での俺の荷物を肩にかけて部屋を出る。名残惜しさすら感じなくなった実家と言うものは、何かが欠落しているようにしか思えず、悲観も湧かなかった。変わらないのは無いと言う事実に対する虚無の感情。昨日感じた悲観も今日は昨日ほどはない。どちらかと言うと、課題を終わらせるために一人旅に行くことに対する興奮が心底で沸き立ち始めていた。
「あら、友広、もう起きてたの？」
洗面所からは愛紀が身だしなみを整えているのか、水道水の流れる音が聞こえている。リビングに戻ってきてみると、今度は母さんも起きてた。うちの家族は誰一人としてパジャマを来ていない。父さんはトランクス一丁だし、母さんと愛紀はTシャツ短パン。俺も寝る時は上半身裸だったりする。冬場もパジャマを着ている家族を見たことがない。この家にパジャマはあるのだろうかと、見だしを整える前にコーヒーを淹れる支度をしている母さんを見ていて思った。既に朝陽が室内の置くまでそれほど温もりのない光をもたらして静かで穏やかな一日の始まりを告げている。
「もしかしてもう出るの？」
俺の格好を見て、母さんが寝惚け眼なのか怪訝そうなのか判断が微妙な表情で首を傾げる。根占までなんてそう遠くはない。バスだと一時間ちょっとだろうけど、何しろ田舎で一本逃すと次がなかなか来ないのが現状。大阪なら十分に一本は来るのに、都会と地方の格差の大きさを戻ってくると痛感する。
「家に居てもすることないし」
少し嘘をついた。俺は正直者じゃない。嘘つきと言えば嘘で固められた皮を被っているようなものだが、俺もその類だ。今まで家族

相手にまともに思っていることを直接言葉にしたことなんかない。長男だからこそ耐えないといけない。愛紀には余計な事を気にしてもらいたくないから、その分俺が早く自立しなければならないと自負していたから、嘘をついたことの方が本音を話したことよりも格段に多い。

「朝ごはんは食べていきなさい」

「いや、別に腹へってないし、バスセンターのとこにコンビニとか開いてる店があるでしょ？」

家から根占方面の大隈半島の南に向かう時は、大抵のバスがバスセンターに集まってから出発する。最も、昔はバスターミナルがあったが、今回帰ってきてからは、ドラッグストアの裏に駐車場とも呼べないような狭い空間がバスセンターとしてバスがやってきたが、そこには何の建物もなく、工事現場に在る簡易トイレが設置してあるだけの、名ばかりのバスセンターで、田舎の財政難を臭わずにはいられない状況かもしれない。

「あの辺りって、コンビニあったかしら？」

コポポポポとコーヒーの香りがコーヒーメーカーの抽出音と共にリビングダイニングを包み込んでいく。それでも次第に気温が高く鳴っているから、爽やかさが薄い。

「ローソンとファミマがあるよぉ」

水道の音が今度はドライヤーの音に変わり、少しばかり騒々しい音の中に愛紀が応えてくれた。

家のある鹿屋市寿。田舎の中では比較的街として大きい。寂れた商店街も西洋風に立て替えられたが、それでも宣伝が薄いせいで、シャッターの開かない店が多かったりもする再生が上手く言っていない町。自衛隊基地もあり、昔は神風特攻隊も出陣していた歴史もある基地で、春にはブルーインパルスも来る航空ショーのエアーメモリアルｉｎかのやが開催されたり、バラ園や龍神祭り、大隈半島最大のかのや夏祭り、二千人の浴衣姿が踊る総踊り、風物詩の納涼花火大会、映画祭などと大きな祭りから、小学生がタライに乗って

川下りをするタライアスロンや音楽パレードなどの大小様々で良いイベントが色々あるってのに、航空ショーと花火大会、かのや夏祭り以外は思いっきり地元の祭りすぎて、少しばかり寂れている。大々的に宣伝し、大隈にも人を呼ばないと薩摩には遠く及ばない。種子屋久方面も大隈地方で、全国唯一のロケット基地がある地方だってのに、鹿児島を訪れる人間の大半は行って桜島辺りが良い所で、ほとんどが都市化していく薩摩半島に取られている。

「なら買ってから行くよ。そろそろ時間だろうし」

この時間帯なら根占などから登校する生徒のために、学校側が朝課外用にバス運行の時間を調整するように申請して、戻っていくバスの本数が唯一多い時間。八時を過ぎればほとんど一時間一本とかなって困る。

「なら送ってってあげる。荷物重いでしょ？」

カメラバッグもＰＣも旅行カバンに入れてる。それ以外は着替えとレポート用の資料が入ってる程度。写真学科と言っても、入学時に購入を言われたカメラもコンパクトタイプの一眼レフだからそれほど重くない。望遠レンズなどを買おうにも気軽に手が出せるものではないから、来年までに買えれば良い方。欲しいけど、金がない。

「別に良いよ。父さんも起きてくる頃だったら、朝ごはん作ってなよ」

「パンが無いの。買いに行くついでに送ってあげる」

そう言えばテーブルの上にはマグカップはあるのに、主食が無い。朝の主食は昔からパンだ。朝からご飯は休日でないと食べられない。腹持ちが良いと巷で言われている米は間違い。実際はパンの方が油や脂肪分が含まれているから吸収が遅く腹持ちが良い。食べたと言う実感は時間のかかる米なんだけど。

「あー待って待って。私も送ってって」

着替えてくると奥の部屋に行った母さんと入れ替わりに、愛紀が髪を梳きながら顔を出してくる。

「まだ早いだろ。夏課外は八時過ぎじゃなかったか？」

まだ時間は七時を越えていない。この時間に登校してもすることがないだろう。早く登校しても自販機でジュースかって駄弁るくらいしかすることはないだろう。

「良いの。今日テストあるから勉強するの」

意外な言葉を残して愛紀が階段を駆け上がっていく。

「勉強はしてたのか・・・・・・」

鹿屋に入った以上は勉強することが当然。普通科しかない高校なのだから、商業や工業、女子高とは違ってあらゆるものをバランスよく履修する。だからこそ、進学しない人間にとっては就職には少々不利な現状がある。手に職がない。留年する奴もいたし、辞めた奴も知ってる。鹿屋で落ちこぼれても工業や商業などに転校すれば、勉学に関しては問題ないと思うんだが、愛紀には無用なことらしい。俺が迷うことすら考えたこともなく怠惰な日々を過ごしていた高二との頃とは違うように思えて、恐らく愛紀も俺と同じような日々を女子高生としての楽しみを交えて過ごしている。長女としての思いではなく、末っ子で妹だという、制約のない空を自由に飛ぶ翼を持つ者のように、たゆたう波の中を無限に泳ぐひれを持った者のように、自由で楽しい学生生活を謳歌している。だから、安心した。

「愛紀は、大丈夫なんだろうな」

意欲的でいられているなら、それが今は遊びだろうと構わないさ。背負わせることはしたくないからな。俺が背負えば良いのに背負えないのは自分が腹立たしかった。

着替えと言っても近所のパン屋かコンビニに行くだけだろうに、無駄にいつも通りに着ている。そこまで飾る必要のある町じゃないんだけど。恐らくは見送るつもりなんだろうな。昔から俺と愛紀は自分で言うのも何だが、溺愛されて育てられた。新婚でもあるまいに、母さんは俺たちが登校する時は玄関先の門まで来て、俺たちが角を曲がるまで見送りに来たり、帰ってきても玄関まで着たりした。正直俺には恥ずかしいことこの上ないが、愛紀はそうでもないようで、そこは男と女の違いだな。過保護は鬱陶しいと思う。それでも

帰ってきてしまうのは、孤独よりも過保護の方が何倍も良いと感じてしまっているからだろう。甘えん坊に育ってしまったもんだ。恥ずかしい。行動と心が伴わないな、俺は。

「愛紀、良いの？　あんたはまだ早いでしょうが」

「良いの良いの」

父さんはセレナ、母さんはムーヴ。この年にしてはちょくちょく車が変わっている。それでも今の所は一番長く乗っているかもしれない。燃費がどうとか父さんは言っていたから、次に帰ってきた時には新車になっていそうだ。父さんの車に乗った記憶はもう一年以上ない。

「でもお兄ぃは良いよねぇ。夏休み長いし、一人旅なんてさ」

まだ人通りも車通りも少ない。夏休みだから子供たちがいないのは当然だが、やはり田舎なんだと思う静けさだ。夜も八時を過ぎればほとんど車が通らない。助手席から愛紀がルームミラー越しに俺を見てくる。まだ俺が帰郷早々に旅行に行くことを恨めしいと思っているようだ。

「お前も進学でもすれば休みは多いぞ」

専門でさえ休みは意外と多い。大学なら尚のことだろう。自分でスケジュールを組むわけなんだから。

「愛紀は進路はどうするの？」

母さんがこれ幸いに愛紀の話に食いつく。俺は見慣れていたくせに、どこか久しぶりに見る景観の流れを後部座席から眺めた。大阪と違って緑と青の比率が高い。自然物が人工物を上回ってる。

「お兄ぃはカメラマンになるんでしょ？　私はどうしようっかなぁ」

確定されたように言われると、燻っている疑問が小さく発火したように胸の中にざわめきをもたらす。人の心はそう簡単には一つのことに定まらない。明らかな“利”が生まれると、人は今を捨てそっちに流れる傾向がある。だからこそ流行が存在し、その流行をコピーする。それが継続した夢や目標になるのであれば、それで良いのだろう。コピーだからとそこから生まれるものがないわけじゃな

い。模範があるからこそ、そこから新たな発生もある。進めば良いだけ。進まないといずれはあっさりと終わる命でしかないんだ。だから子供が羨ましくなる。無垢で無知で夢を抱いて、笑ってられるんだ。どうして子供の頃は焦って大人の真似事をしていたのかと、子供の頃は大人に焦がれたくせに今は子供に焦がれてしまう。

「なれるかは分からないっての。目指す人間は多いんだよ」

「お兄ぃなら大丈夫だよ。昔から何だって出来てたじゃん」

「そうね。友広は要領が良いものね。お父さんとは正反対よ」

軽い口調で家族びいきなんだろうが、物凄く嫌な感情が湧いた。要領が良いわけじゃない。やるしかなかった。愛紀がいるから手本となるべき道を行かなければならなかった。だからこそ、取り組んだ。色々なものを犠牲にして俺を育ててくれた父さんと母さんの苦労を知らないわけじゃない。

「世界は広いんだよ。上には上がいるんだから、多分無理」

「またまたぁ。そんな卑屈になるから、そうなっちゃうんだよ」

「そうよ。もっと力を抜いていくことも大事。でも愛紀はちょっと気を抜きすぎるのが悪いとこね」

もぉ、と愛紀が頬を膨らませ、母さんが小さく笑う。仲の良い親子だ。それを見ていて素直に思う。だからこそ、素直に思ってしまう。

「やっぱり・・・・・・」

居場所がない。家賃もまだ親に任せているのに、自立なんて到底出来てないのに、それでも一人でいられた大阪の部屋の方が居場所だと思ってしまう。管理下にあるのに。車は好きじゃないかもしれない。外部と遮断され、籠の鳥の気分になる。それなのに車窓から見えるものは全てが流れていく。飛べない鳥が地を張って走らされているような気がして息苦しい。飛べない鳥は、飛びたいと思うのだろうか？　そんなことを考えているうちに、懐かしい校門が目に止まった。

「じゃあ行ってきます。お兄ぃ、お土産忘れないでよ」

「友達に買ってきてもらう方が早いだろ」
愛紀が校門の前にあるコンビニの駐車場で降りると、窓を見ていた俺の前で手を振ってから、校門に小走っていく。それを見送ってから母さんが車をバスセンターに走らせる。
「昨日帰ってきたのに、すぐ出て行くなんて」
「課題の為なんだから、しょうがないし」
会話数が減る。俺から特に話すこともなく、すぐに着くから意識はバス代とバスがあるかに向いてる。早い登校をする後輩たちがちらほらと流れていく。俺が流れてるだけなのに、やはり向こうに押し付けてた。
「折角の夏休みなんだから、もっとゆっくりすれば良いじゃない」
「そっちも仕事あるだろ？　留守番だけなら退屈だし、帰って来ないって」
長いことを嘘をついていると、それを本音だと信じる相手にはそれが本音だと思ってしまうが、嘘をつく側にしてみれば、嘘はとっさにでも出てくるのに本音を話そうとすると、急に言葉が出てこなくなる。嘘で固めてしまった喉元は真実を漏らさないように塞いでしまう。だから苦笑が一緒に空気を埋めるように出てしまう。
「友は昔からそうなのよね。心配なのよ？　みんな」
ため息混じりに言われてしまう。顔を合わせないように窓で髪を直す仕草をするフリをしながら対向車が横切るのを見ていた。
「着いたわよ」
「ここまでで良いよ。父さんもう起きてる頃じゃないの？」
まだパンを買ってない。しかもそろそろ七時。いい加減仕事で起きてるだろう父さんは、誰もいない家を見て何を思うだろうか。
「じゃあ、連絡はしなさいよ」
「すぐそこじゃんか」
「それでも。大阪行ってからこっちからしないと連絡しないでしょ、あんた。寂しいんだからね。折角楽しみにしてたのに」
する連絡がないのに、連絡をする必要がどこにあるんだろうかと

思いながらも、電話が来ると意外に話し込んでたなと思い返しながらバッグを肩に掛けて車を降りる。まだバスは着てないから少し待ちそうだ。
「友宏」
ドアを閉めようとすると助手席の窓が開いて、呼ばれた。
「いらないって。十分足りてるから」
「良いから持ってなさい。あんたは無理しがちなんだから、何があるか分からないの」
身を乗り出して渡される二万円を遠慮しながらも強引に渡されて受け取る。無理しがちと言われると、上手く返せずにありがと、と礼が精一杯だ。
「それから」
もう良いだろうかと思った時に、また呼ばれる。バスが入ってきて鹿屋高生が続々と降りてくる。男子は寝癖がついたままで眠そうだってのに、女子は会話を弾ませていたりと静かな場が急に沸き立つ。始発バスで遠い所からわざわざ大学進学を目指して登校してくる姿は、今見ても感心する。
「好きにしていいんだから、夢を叶えなさい。それがお父さんとお母さんの夢でもあるんだから。ないならゆっくりで良いから見つけなさい。いつでも帰ってきて良いんだから」
ざわめきの中で、その声だけが静寂を呼び起こした。待ってもいない言葉に、視界が少しだけ大きく開いた。
「何も気にしなくて良いから、思ったことを思ったようにしなさい」
何だろう、この感覚は。痛みは感じない。ただ落ちるような感覚がある。空から落ちる夢を見ているような、掴むものがない焦燥のような変な感覚。
「それから少しは相談して。お母さんじゃ無理かもしれないけど、お父さんなら少しは役に立つんだから」
「その言い方はどうかと思うよ」
そうやって話にオチをつけてくれるおかげで、こっちの止まった

言葉が戻ってくる。それでも焦っていた。電話をするようにと念を受けると、母さんは他の車の交通の邪魔にならないうちに、来た道を戻っていく。年が若いせいか、赤いムーヴがその姿を角の向こうに消えた。その曲がって行った残像を求めるように、俺は母さんの言葉が頭の中を駆け巡っていたことに、良い意味ではない胸の高鳴りを感じた。

「気付かれてるのか、もしかして」

どうして自分たちのことよりも、子供を優先するのか。それをすることを俺は望んでない。むしろその期待をしないで欲しいくらいだ。少しは犠牲にしてきた分を取り戻そうとして欲しいくらいなんだけどな。愛紀のことに関しては、俺が早く仕事に就いて援助はしてやりたいと思ってる。

「好きにって言われるのが、一番困るけどな」

しばらくベンチで待っていると根占・佐多方面に向かうバスがやってきて、俺だけが誰も乗っていないバスの乗客としてドアが閉まった。バスに一人だけの乗客は寂しいもんだ。

鹿屋市内を抜けると、バスは海沿いを走り始め、朝陽に昨日とは違う海の目覚めを迎えさせる優しい光が煌めいていた。他に誰もいないバスは、途中のバス停でもほとんど止まることなく、走り続ける。エンジン音と振動が窓枠に肘を突いていると、直に感じる。天井から吹く冷気も乗客が俺一人ならエネルギーの無駄遣いじゃないかと思ってしまうが、運転手が何も言わないから、涼むことに集中して狭い座席から窓の外を見る。大阪の内陸部に住んでいるから、海を見ることがほとんどなかった。川を見ることはほぼ毎日だった。

「南国って感じだな」

地元なんだけど、海水浴なんて中学以来行ってないし、海に触れたこともない。折角桜島を囲むように鹿児島は海に恵まれた町だって言うのに、海との触れ合いは幼少だけだったんだと、少しばかり寂しさを海に感じた。

三枚目：蜃気楼なキミ

七月後半ともなれば、鹿児島は夏真っ盛りに突入する。梅雨明けの乾いた暑さが空色をより一層引き立て、桜島が入道雲との見事なコントラストを海と奏でる。それなのに、バスには俺しかいない。観光する場所はあるのに、観光地になりきれてないんだとカメラを取り出す気にもならない。

根占なんて昔、薩摩半島にある温泉地である指宿に行く際にフェリー乗り場があるため立ち寄った記憶しかなかったが、どうやら昔感じた時間の流れとは違って、一時間も掛からずに錦江湾沿いの小さな港町に着いた。

「もう暑いのかよ」

時間にしてまだ八時を少し過ぎたくらい。なのに既に三十度近くありそうで、バッグを背負っているせいか汗が少し歩くだけで滲んできた。

「さすがにまだ早すぎたか」

着いてから後悔する。ここでも悪い癖が出た。分かっていたことなのに、家に居場所がないからと朝早くから出てきてしまい、結果が行く当てのない迷路に辿り着いた気分だ。

「旅の終わりは迷路か。嫌な到着の仕方だなぁ」

海沿いにあるバス停で下りてから、民宿の親父さんには到着したら電話してくれと言われたが、こんな時間に来られても迷惑だろう。しばらくは暑さの中で次第に重くなっていくバッグと共にロケハンでもするしかない。

早朝の爽やかさは既に払拭され、残るのは次第に増す熱気。東の空を見上げると、真白な光が眼底を焼く勢いで突き刺さる。黄緑のような残光が視線を逸らした後もしばらく焼きついて、空の青さと雲の白さが良く分からない。でも確実に感じる大阪にはなかったようなものがあった。漁港町だからと言うわけではないが、幾つ者漁

船が係留されていて、波の間に間に漂うように上下している姿が堤防の上から覗いて見える。それだけじゃない。川から流れ込んでくる淡水と混ざり合って汽水から海水へと移ろう潮の香りが鼻腔いっぱいに広がる。白浜のような白さではないが、朝陽に岩影を染めている砂浜も見える。港町と言うよりも、海町なんだろうな。

「にしても、ゴーストタウンか、ここは」

本音が漏れる。時々乗用車が通り、二台に漁具を載せた軽トラが追い越して行くのに、人の気配をまるで感じられない。野良猫一匹の姿すら見えない。風も凪いでいるせいか海の匂いも臭いくらいに潮で満ちている。何年ぶりかに嗅いだ海の匂いは、懐かしさもなければ愛しさも感じない。することも行く当てもないとなると、これほどまでに過疎らしい町は初めてだから興味が湧いた。路肩にバッグを置き、カメラバッグを取り出す。

「荷物邪魔すぎ」

一人だと素でいられる。誰も言葉を聞く事はないし、発することもない。だから気にすることもなく、実家で感じていた感情も今は薄れ、カメラ本隊とレンズを取り出しセットする。電池の予備は結構買って帰ってきたから、それが一番重いけど、データ分は撮影する必要が在るから、とりあえず目的がない今は、これだけ閑静な町を大阪ではなかなか目にすることは出来ない。漠然としたテーマとして撮影すればその中から、大阪に戻ってからでも十分に纏めることも出来るだろう。夏休み前に企画書を提出する授業もあったのに、結局部屋に置いてきた。プレビューしてみると、写真としての価値は旅行写真の一枚ほどにしかないものでしか捉えられない。商売になんか使えない。すぐに削除した。

「企画、考えとくべきだったな」

後悔とは後にする悔い。事前準備さえしていればどんなに能天気な奴でも、企画通りに事を進めれば終わること。けど、俺はその準備がなってない。だから能天気で真剣にやっているのかも分からない奴よりも、良い写真を撮ることが出来ない。半袖でも暑い日差し

に喉が乾いてくる。こんな時間からタンクトップになるわけにもいかないから、シャッターの閉まっている年期を感じる店先の影でジュースを買って先に休憩を取る。

「金だけはあるんだよな」

財布の中には、帰りに引き下ろしてきた土産代の残りと昨日今日で両親に貰った五万を合わせると、七万入ってた。大阪にいると色々と欲しいものがあってつい財布の紐が緩み、あっという間に使い果たしそうなんだが、この町を見ると、使い切る自信の方がない不思議な感覚を覚える。予定は一週間。その間に企画を纏め、撮影し、レポートも平行して終わらせるつもり。その後は早めに、出来れば直接大阪に帰る。飛行機のチケットは予算の関係上帰りはまだ取ってない。平日なら大丈夫だろうから、帰るなら平日を考えているから、若干の猶予はある。時間は切迫なんかしていない。その余裕が今だけは気持ちを開放的に導いてくれた。

「どこ行くかな」

行く当てのない旅は旅行と言うものではない、旅というものに相応らしく思える。旅番組は旅じゃないだろう。決められたルートの紹介をして宿を持ち上げて、観光地を巡る。それはただの旅行だ。けど今は旅行であって旅だ。下調べもない地で道に迷うことにも気付かないほどに、何をするべきか考えなければならない。着いた時から耳を劈く蝉時雨が、滲む汗を引かせようとしない。ヒグラシの音は好きだが、ミンミンゼミやクマゼミは七月上旬の暑さの中で既に聞き飽きた。ヒグラシだけは冷涼な環境でないと聞くことが出来ないから、霧島に場所を絞っておいても良かったかもしれない。

「海、だよな、やっぱ」

小波の音は聞こえてこない。砂浜付近じゃないから蝉の音で掻き消されている。海って案外静かなものなんだと今更ながら気付いたが、カメラを手に取ることはなかった。カメラマンを志すから進学した。半年もないが勉強もしてきた。だからこそ、半端な写真を撮るわけにもいかなかった。写真集とすることは、人の目に触れると

言うこと。それこそが価値になるものであり、授業の一環として制作肯定の勉強でもあるが、同時に発表の場でもある。だからこそ、より秀でたものを。そうしなければ恥を掻くのは自身。そして、打ち砕かれる。初めての自身による作品の発表。それはこれからの道を往くことになるのであれば処女作品となり、始まりの標。となれば、クラスメイトが持ち込む作品はどれも鋭意に満ちた渾身のもののはず。ただでさえやる気をなくしている今は、無理にでも奮い立たせなければ、撮ることは出来ない。

「行くだけ行こう」

言い聞かせながらバッグを背負い、カメラを手に暑さで汗が自然と噴出す中を歩くしかなかった。

「久しぶりだな、ここ」

懐かしいと思う感覚はある。でも、いつのことをそこに投影しているのか細かいことは覚えていない。覚えているのは、根占と薩摩半島の温泉地の指宿に繋がる山川を結ぶフェリーがある。一時は需要不足により撤退下と思っていたが、どうやら復活したのか緑の客船が引き波を残して遠く離れた対岸へ白波を纏って進んでいた。

「フェリーのうどん、食いてぇな」

鹿児島には地方を結ぶ幾つもの航路がある。県本土の人間が良く利用するのは桜島フェリーと鴨池・垂水フェリー。そしてこの山川・根占フェリーにはそれぞれ船内にうどん屋がある。俺はこのフェリーのうどんが好きだ。ぷりぷりの歯ごたえのある麺と少し濃いかつおだしの鼻に香りいつまでも鼻腔に残る強い香りと、それを甲板で食べる時に混じる潮風のマッチがたまらなく美味い。シンプルな作りでも、フェリーでしか味わうことが出来ない出汁の濃さと麺の絡み合いは飽きが来ない。俺的にはこのうどんは鹿児島の名物と思ってるくらいだし。背中を向けて波を掻き分けていくフェリーの姿を見ていると、うどんの匂いが潮風に乗っているんじゃないかと鼻を少しだけ高くしてみた。

燦燦と煌めく波の反射と直射日光が熱気を高める。フェリー乗り

場付近にはまともに日差しを遮るものが無い。暑い。熱気を運び去る風も風自体が熱を帯びていてあまり意味を成していない。
「暑い。重い」
荷物が邪魔で仕方が無い。時間もまだ九時を少し過ぎた程度。まだまだ動き出す時間が始まったばかり。本当にすることが無かった。
「この辺の景色でも撮っとくか」
被写体になりそうなものは多い。海は綺麗だし、漁船の姿も小波を引き起こして鏡のように陽光を白く映し出している。夕日の方が漁船が映えるんだが、それまでここで待っていると、焼き魚にも劣らないこんがり焼けた人間が出来上がりそうだ。
「蝉ってこんなにうるさかったか？」
カメラを手に、眩い日光を絞りで程よく絞り、焦点を合わせ時を待つ。堤防があるから海が広く見渡せない。
「開聞岳じゃん。今日は綺麗に見えてるな」
どんどんと引き波を白く両脇に広げていくフェリーの奥に、薩摩富士と謳われる開聞岳が見事な三角をレンズの中に映し出した。鹿児島には薩摩に薩摩富士、大隅に吾平富士と二つの富士の別称を持つ山がある。富士の名を持つだけに、その成形は遠目でも美しいの一言に尽きる。桜島だけじゃないとシャッターを切るレンズの脇に漁船を見守る開聞岳を切り取った。
「ん？　釣り人、か？」
俺はそこまで視力が良いわけじゃない。だから肉眼では視界がぼやけて気付かなかったが、堤防に人の姿らしい背中があった。今日は平日なのに朝から釣りとは、定年後の趣味なのかは分からないが、この暑さの増す中、日陰なしでよくやれるなと、その後姿を煌めく波に佇む寡黙な背中として風景に溶け込ませて、またシャッターを切った。
「見に行ってみるかな」
この辺りの魚はどんなものが獲れるのか、興味がないわけじゃない。肩に掛けるだけで汗が噴出す暑さ。陽炎こそ立ち上ってはない

が、もう爽やかさの欠片も何もない。蝉時雨が森をざわめかせ、真白な光が朝から立ち湧く積乱雲と青空を鮮やかに二分している。遠くの海は潮目で藍と青緑に輝いているのに、俺が歩く堤防に遊んでと言いたげな小波は海底色を映し出す透明。夏の鮮明な色があちこちに目を細めたくなる眩しさと夏の自然に囲まれた優しい匂いがカメラの中に収まっていく。

「あれ？　さっきはこの辺りにいたような気がしたんだけどな」

堤防の端には小さな灯台があった。入れないようで、入り口はロープで塞がれている。十メートルもないくらいの赤い灯台。潮風と台風の高波を受けたのか、視線近くは錆びたように赤みが茶に変色している。役目は果たしているんだろうが、もう少し補修しないと倒壊しそうな気もする。にしても、さっきは間違いなくこの辺りに誰かいたはずなんだが、誰もいない。気のせいだったのかと先ほど収めた写真データを見る。

「映ってるんだよな」

望遠レンズがないから、標準の三倍だから拡大しても少しぼやけて見えるが、間違いなく人工物ではない人の背中。

「釣り人じゃないな。女か？」

よく見れば釣り姿でもなく、後姿に服ではない黒色がぶれて写ってる。髪だ。腰辺りまで覆っているから服かと思ったが、体から不自然にはみ出してる。釣り人ではないとしたら、この辺りの人かもしれないが、その姿は俺が堤防に着いた頃には影すら残っていなかった。飛び込み自殺の線も過ぎったが、海を見ても人の姿もないし、海底は透けている。

振り返れば長い堤防。堤防の端まで来てしまい、得られたものは灯台が赤く古いと言うことだけ。何の成果もない無駄足に終わってしまった。反射が眩しい波と、ほぼ白に近い灰色の堤防の照り返しに、来た道を戻る気になれなかった。熱さにやられ始めたのか、次第に重みを増しているように感じるバッグを灯台の三段あまりの階段に置いて、灯台の細い影の中に腰を下ろす。少しだけ日光熱から

逃れて、頬が冷たくなった気がした。
「写真集、か」
とりあえず数枚は撮った。写真としては成り立つと思うが、何をテーマとしたものなのかが伝わってこない。何も企画を纏められていない証の虚無の現実の切取。それでも、後姿を捉えた一枚だけは、何かを感じた。恐らくここに誰もいないのに、そこに写りこんだ幻影が不可解に思っているだけかもしれないが。両脇の堤防に寄ってくる波には音がない。時々隙間に入ったのかチャンポンと石を投げ入れたような音が聞こえるくらいで、蝉の音も静かに聞こえる空間が俺の前にあった。
「フジツボか？　密集してるな」
側壁に波を受けて紅白の富士山のような貝が温めあうように寄り添っていた。家族が集って笑い合うように、そこに打ち寄せる小波がサワサワと囁く。その下にはいつ捨てられたのか、小魚の住処に果てた空き缶が幾つも沈んで錆びている。綺麗なものの傍には汚いものが必ずあるんだろうか。その対極する二つを、少しばかり海に上体を身を投げてカメラを構えた。何を撮りたいのかも分からないのに、ただ撮ることしか出来なくて、それに縋っているようで情けないと思う俺がいながら、出てくる答えは絞りとレンズを絞って構えることだけだった。

――過ぎる季節の中に、微かにたゆたう歌声がある。
――誰を想い、思いをその儚く美しい声に乗せるのか。
――人に伝わるものがあり、人に伝わらないものがある。
――それを伝えるために謳う言ノ葉は、唯一つ。
――命を掛けて謳う、純粋すぎる唯一の言葉は。
――如何なる想いを打ち消し。
――如何なる障碍を打ち破り。
――如何なる言の葉よりも美しく、ただひたすらに一途に響く。
――生涯を以って謳うその想いは、同時に終焉を侵す禁であっ

た。

「よっ・・・・・・・と？」

背筋運動をするように、体を起こした瞬間だった。日差しのないはずの堤防で、俺の体を包み込むような影が俺の影に一つになって大きく染めた。

「ん？　・・・・・・・あ」

テーマと言うものは練りに練って浮かぶものじゃない。例えば、そう、振り返った時に、俺を見下ろす女の子が潮風から髪を守るように少し首を傾けながら、手で髪を押さえ、地に伏した愚かな人間を不思議そうにじっと見つめる天使との出会い。綺麗な、本当に綺麗と言う言葉が相応しい。一度目にしてしまえば、他の女の子を選ぶ際の基準になってしまうような。この出会いが運命なのか偶然なのか、後悔することはないと思考を停止させ、考えを捻り出す暇すら与えない、直感の発生と感覚の略奪。

唯一つ、それだけで幾枚の景色を切り取り、人物を切り取ろうと敵わない、たった一で全てを越えて伝わるテーマを見つけたのかもしれない。

それに気付いたのは随分後になることにも気づけなかったが。

四枚目：白紙の少女

と、思ったのは束の間。視線を一定に傾げ、起き上がる俺を凝視してくる。何を考えているのかまるで掴めない無表情。無垢と言う言葉が瞬間的に脳裏を過ぎったが、見た目の年齢からしてそれは違うと目が否定した。

「・・・・・・大丈夫？」

声を掛けたのは俺。何を映し出しているのか感じ取れない不思議そうな視線に立ち上がることも出来ず、俺はその瞳を見返す。風が少しだけ収まり、女の子の髪が推力のないシャワー水のようにサラサラリと頬の横に垂れた。返事はない。ただ俺を見下ろしてる。人形のようなガラス玉を嵌めこまれただけで、感情を含めないような瞳で。胸には両手でＣＲＯＱＵＩＳと書かれたクロッキーブックを抱いている。

「もしかして、ここ、君の場所だった？」

俺を見下ろしているのではなく、俺が座っているここが、この子にとっては絵描きのポイントで、無言の抗議をしてきているのだろうか。そう思うと、その無感情な瞳が物凄く怒っているように思えてきてしまう。芸術家のことを全て理解しているわけじゃないが、大抵の芸術家は変に拘りがある。この子にとってその拘りが、この場所で絵を描くことなのかもしれない。よく見れば着ている服が俺が撮影した写真の子と同じだった。

「ご、ごめん。勝手に場所取ってたんだ。すぐ退く」

暑さを忘れた。ただ潮風を受け続ける女の子に、一瞬ばかりの時を奪われてしまった。その時だけは風景も気温も気候も全てが五感をもってしても感じ取れなかった。必要がなかった。

「あの、どうかしたのかな？」

見た目は明らかに俺よりも幼い。愛紀と同じくらいかそれより下だろうか。やはり髪が長い。健康的に焼けているということもなく、

色白でこの日差しの下で日傘もなしに大丈夫なのだろうかと思わせてくれる。
　そんな俺を他所に、女の子は俺が退いた場所ではなくその視線を俺に固定したように顔だけを俺から逸らそうとしない。何がしたいのかさっぱり分からない。不思議な子と言うか、変な子じゃないだろうかと思った。
　困った時は相手の言葉を待つ。お互いに知らないことは確か。持ち出す話題など浮かんでこない。だから待つ。だが、一向に女の子は喋ろうとはせず、俺を見下ろしている。その背中から照り降る日の光が後光のように俺の視界を細くさせる。
　――――これは、あなたのですか？
　不意に俺から視線を外し、灯台の階段に置いていた俺のバッグに視線を向け、また俺に視線を戻してくる女の子がそう聞いているような気がした。
「それは俺のだけど、邪魔だった、かな？」
　感情のなかった女の子に、初めて感情が芽生えた。そんなことはあり得ないが、首を振り、髪が揺れる動きにはそう見えてしまった。掴み所が分からない女の子は、俺とカバンに視線をまた行き来し、今度はクロッキーブックを捲り始めた。絵を描くのかと思ったが、クロッキーブック一冊だけしか持ち物が見当たらない。裏表紙の所にノック式の赤いボディのボールペンがあって、カチッと音がしたと思ったから、女の子は立ったままクロッキーブックに何かを書き始めた。まさかボールペンで絵を描くんだろうか？　と言うよりもクロッキーブックはスケッチブックと違って用紙が薄く、ラフ画用のノートブックのはずだからスケッチには少々不向きだったりすると思うんだけどな。
「ご旅行ですか？」
　何かを書き終えた女の子が、クロッキーブックを俺に向ける。子供に紙芝居を見せてあげるようなゆっくりとした流れで見せる画面を、俺は音読した。真白でまっさらな一ページに、女の子らしい丸

い字でそう書かれていた。どうしていちいちそんなことを書いて訊くんだか、理解に苦しむ。そんな俺のことなど知らん顔で、女の子がまたペンを走らせていく。この日差しの下だと目に悪いくらいに白いノート。女の子もそれに気付いたのか、一度俺に振り返り、どこか恥ずかしそうに苦笑して、太陽に背を向けて作り出した影の下でペンを走らせることを再開する。どこか抜けているのだろうかと、その苦笑した小さな笑みにつられて、俺も笑ってしまった。

「指宿に行くんですか？　いや、違うよ。ここが目的地」

音読してから答える。そしてここが終着だと人差し指を足元にちょんちょんと差す。すると意外そうに女の子の目が少しだけ大きく開く。平日に訪れるような人が少ないのか、釣り人がいくらか竿を空高くに掲げて浮きをたゆたわせているが、人は少ないし静かだ。自然の方が圧倒的に存在感を醸し出している。

「ん？　これ？　カメラだよ。写真を撮りに来たんだ」

俺の横腹に揺れるカメラを見つけ、それは？　と聞きたげな眼差しに答えて持ち上げる。

――――何を撮りに来たんですか？

相変わらずの不思議そうな表情が視線を辿ると何となく読み取れる。正解かは不明だが、何も言い返してこないと言うことはそれで良いのだと思って話を進めた。

「この辺りを撮りに来たんだけど、少し事情が変わったかもしれない」

俺の言葉は分からないだろう。女の子が首を傾げてくる。プライベートならこんなことは言えない。でも、これはあくまで課題。纏まらなかった企画の中に突然舞い降りてきた被写体。一瞬とは言え、魅せられた。これを逃す手はないだろう。他に撮る対象が纏まっていないんだから。

「俺さ、大阪の専門学校で写真を勉強してるんだけど、それでこの町を撮りに来たんだ。地元は鹿屋なんだ」

白い肌に映える小さく薄い桃色の唇。それが口笛を吹くような形

で驚きを表現していた。少し乾いている唇は綺麗な形をしている。その表情も写真に収めたかったが、授業で習った最低限の礼儀を忘れるわけにはいかなかった。人は物とは違うから。

「それでいきなりになっちゃうんだけど、もし良ければモデルになってくれないかな？　もちろんモデル代は支払うよ」

いきなりこんな申し出は失礼に値する。名刺代わりに財布に入れていた学生証を見せて、怪しい者じゃないとアピールするが、それどころじゃない様な驚きを見せていた。

「大丈夫。風景と一緒に撮るつもりなだけで、ヌードとかそう言う写真じゃないから」

さすがにまだそこまでの技術は習ってない。だが、それは後悔に繋がってしまった。ヌードと言う言葉に反応してしまった女の子が顔を日焼けしたように赤く染めながら、俺から距離を取った。そこまで強く反応されると困ってしまう。

無理に撮るつもりはない。そう教えられたから。でも、これを逃すと企画する被写体がなくなり、振り出しに戻る。心のどこかではそれを避けるべきだと何かが呟いている。だが、俺の顔は謝りながら気にしないでくれと苦笑を浮かべていた。

「じゃあ、ロケハンがあるから、邪魔したね。ごめん、変なこと言って」

カメラをカメラバッグに仕舞い、それをバッグに入れて肩にかける。少し休憩をしたからか重みもそれほど感じず、代わりに日差しが強く空と海から照り付けてきて、すぐに汗が額を滲ませてきた。惜しい気持ちに後ろ髪を引かれるが無理にそうすることは出来ない。表情に出てしまうから、ありのままを撮りたいという昔からの俺の中での理念だけは犯すつもりはない。それでも未練がましく女の子の横を通り過ぎる時に、女の子を見る。どう捉えたら相応なのか分からない表情をしている。それでも恥ずかしかったようで、まだ顔は赤みを帯びていた。その表情すら可愛いもんなだなと思ってしまう辺り、俺はダメな奴だと自嘲した。

「さて、どこを撮りに行くかな」
ポケットから携帯を取り出すと、時間を見る。色々と海辺をうろうろしていたせいで、十一時を過ぎていた。思った以上に時間が経っていて驚いた。ここまで時間が経つのが早いと思ったのは久しぶり。それだけ写真を撮っていた間は企画など考えてなかったのに楽しんでいたのかもしれない。
「民宿は、まだ早いよな」
ホテルは大体三時以降にチェックインだが、民宿は泊まったことがない。夏休みに入ったばかりで、合宿に行く連中は民宿に泊まるらしいけど、俺には関係ない。けど民宿のことは無知なのは事実。
「道、聞いておけば良かったな」
連絡してくれと言われても、時間帯の指定は受けていない。それほど大きな町にも見えないから、歩いていけそうな気がする。さっきの女の子に場所くらい聞いておけば良かったかもと振り返る。
「あれ？　・・・・・・えっと？」
足が止まった。それにつられてもう二本の足も止まる。先ほどの所に女の子はいない。赤く小さな灯台が夜を待っているだけ。その傍におじさんが釣りをしているくらいの閑静な風景。だが、俺のすぐ後に女の子がいた。電車ごっこでもしてるように、すぐ俺の後にいた。振り返った瞬間、思わずのけぞりそうになった。脈動が大きくなったが、俺の足を注視している女の子の頭頂部を今度は見下ろした。
女の子が顔を上げる。見下ろしていた時は影が堀を形成してちょっとばかし恐い感想があった。でも今度は俺が少し下を見下ろしているから、女の子の顔が陽光に照らされ明るく無表情だったが、恐くはなかった。
「ん？　何々？　どこに行くんですか？　って？　それはまだ決まってないんだけど。あ、そうだ。ちょっと聞きたいんだけど、この辺りに民宿で竜宮荘って知ってるかな？」
携帯にメモした住所は根占港にいる場所からは一キロもないと思

うんだけど、如何せんこの辺りは素人。知っている人間がいるならそれに越したことはない。この暑い中を延々と彷徨えば、バスで降りた時に見つけたミミズの干物の二の舞になるだろう。

「・・・・・・知らないかな？」

女の子が俺の顔をじっと見上げたまま動かない。蝉の音と潮騒が沈黙にさせまいと騒ぎ立てる。女の子は生きているのかどうか怪しいくらいに微動だにしない。思わず鼻の下に手を当てて吐息を確認しようとしたら、つぶらで少し茶色の瞳が俺を映し出している中で、恥らうように瞼が下りる。

そして、ちょっと待ってと掌を俺に見せると、またクロッキーブックを左手に抱え、右手でボールペンをカチッとさせる。ブックの持ち方とペンの走らせ方が男と違って、女の子なんだなぁと少し愛らしさを覚える仕草に見つめて待った。

―――竜宮荘は、ウチです。私の家のことです。

そう書かれていた。単調な文でも愛らしさのある文字が温かみをもたらす。几帳面なのか、クロッキーブックの左上から言葉で埋めていく。

この子の家が民宿だったのか。何の因果か探す手間そのものが省けてしまって、何だか力が抜けた。

―――もしかして、加納友広さん、ですか？

続けて女の子がクロッキーブックを自分の方に向けて、何かを書き足して俺の前に示す。そこには俺の名前が書かれていた。

「そうだけど、親御さんに聞いてた？」

小さく頭を縦に振る。話が通っているなら早い。早速案内してもらって、荷物だけは置かせてもらおう。ロケハンはそれからでも良いだろう。その前に昼食も済ませておきたいし。結局コンビニで買う前にバスに乗ったから、朝食も抜いていい加減空腹でもある。

―――今は、まだ帰れないんです。

案内を頼んだ俺の言葉に女の子はそう書いて答えた。

「どういうこと？」

どこか不思議な感覚のあるせいか、それともこの陽気のせいか、緊張もなくこの子と接することが出来た。不可解さは増すばかりだが。

———お父さんの帰りを待っているので、一緒に待ちませんか？

お父さん。それは昨夜俺が電話した時に出た親父さんのことだろう。どうして待つのかは知らないが、今は帰ることが出来ないと言うなら、俺はどうすることも出来ない。道を知らないし、一人で向かってもこの子がここにいると言うことは民宿には誰もいないかもしれない。そうなれば無駄足も良い所だ。そこまで無駄なことを俺はしたくない。

「それは別に構わないけど、親父さんはどこに？」

俺の言葉を聞き終えてから必ずペンを走らせる。聞いてる間は聞くことに集中しているように顔を見てくるから、それは少しだけ恥ずかしい。愛紀で慣れているとは言え、愛紀とは対照的に見えるこの子と向き合うと羞恥とは違う恥ずかしさがあったりなかったりだ。

———漁師です。もうすぐ戻ってくると思います。

今度はその文字の隣に、船と魚の絵が即席で書かれていた。絵心もあるんだな、と短時間で掻き揚げる可愛らしい絵に笑みが漏れてしまう。

「漁師なんだ？　じゃあ食事に出たりするのかな？」

今日初めて心がドキッとした。無表情が基本だと思っていたんだけど、この子、ちゃんと笑えるんだな。俺の問いに対する笑顔の頷きに素直に可愛い子なのだと認識した。

宿の場所を知る子に出会ったことで、色々と考えていたもののいくつかは安心に変わった。女の子がこっちで待ちましょうと俺を連れて行く。連れて行くと言うよりも来た道を戻って、先ほど別れを告げた赤い灯台と再開するだけだった。

「ここで待つの？」

うん、と頷かれる。この暑い中で直射日光しかないのに、親父さんが漁から戻ってくるまでいつも待っているのだろうか？　よく白

い肌でいられるもんだ。日焼け止めクリームを塗っているんだろうけど。
「そういえば、一つ聞いて良いかな？」
二人して南天に上り詰める日の光で、ほとんど陰のない灯台の影に腰を下ろす。暑いし喉も乾いてくる。良い場所とは到底思えないけど、漁なら早朝に出ても昼前に間終わるはずだから、そろそろこの子の親父さんも帰ってくる頃だろうと言い聞かせて、耐える。
「君の名前を、聞かせてもらえるかな？」
俺の名前は知っているようだけど、俺はこの子を呼ぶのに気を使わないといけない。せめて名前くらいは聞かせてもらえると嬉しいんだけど。
そして、俺はクロッキーブックを見て、感嘆のため息をつかないではいられなかった。
――――姫宮琉璃、です。
誠なる美人には、それ相応の名前が付けられることが義務であり、当然であるような錯覚すら覚える。最近は語呂が良いから、可愛いから、格好良いからと将来子供がその名前で生きていかないといけないのに、子供の頃にしか相応ではない名前が多い気がする中で、この子は実に恵まれた名前じゃないかと、神がいるならこの出会いには感謝するしかないだろう。
「綺麗な名前だね。竜宮のお姫様みたいかも」
先ほどよりも赤らんだ顔。今度は首から赤くなっている。本当に恥ずかしそうだ。良いと思ったから素直に言っただけなんだけど、率直過ぎた？
――――恥ずかしいです。でも、うれしいです。
えへへっと言う言葉が実に似合う恥じらいの笑み。彼女がこんな笑顔をしてくれれば、間違いなく抱きしめているところだ。
「初めて言われた？」
頷かれる。意外だ。こんなに可愛くて綺麗と言う二つの賞賛の言葉が似合う子が、初めて言われるなんて。もしかして彼氏はいない

のか？
「じゃあ、琉璃ちゃんって呼んで良いかな？」
――――琉璃、で、良いですよ。少し呼びにくそうです。
そうでもないんだが、そう呼んで欲しいのか？　俺的には呼び捨ての方が違和感がある。学校でも女子はさん付けかあだ名だし、呼び捨てなんてしたことがない。俺のことを覗き込んでくる。遊んで欲しさに命令を待つ忠犬のように尻尾を振っていそうな、そんな感じの目で。
「じゃあ、琉璃？」
――――どうして聞くんですか？
書かれる言葉と共に、おかしそうな不思議そうなあの表情で首を傾げられる。気恥ずかしさがある言い訳が浮かんでくるが、それを口に出せば俺はみっともないと言っているような気がして、飲み込んだ。
「いや、大したことじゃないんだけど。じゃあ琉璃で」
――――はいっ。それが自分の名前なんだと認識した嬉しさに笑むような笑み。そう呼ばれたかっただけなんだろうと、その笑みに笑ってしまった。

五枚目：言葉ナシノ笑ミ

「親父さんはまだ戻らないの？」
幾隻かの小型船舶が沖合いに見える。それでもまだ戻る様子は見られない。じわじわと全身に染み込んでくる暑さが汗を滲み出させる。暑い。
———あの船です。
そう書いてから、俺を見て、沖合いを指差した。その指先を辿ると入道雲の白さほどではない小波に隠れるように浮いている漁船があった。あれが琉璃の親父さんの船らしい。何漁なのか訊ねてみるとハマチの養殖で生簀に向かっていたそうだ。きびなごとかそう言うのじゃなくて、養殖業だったとは。と言うことは近くにいくつか見える白い浮きは生簀なのか。
「ん？　どうかした？」
人影の見えない漁船をレンズで捉える。夏の海なんだなと思わせる空と海のコントラストが感覚的な涼を感じさせてくれる。
———どうして、この町に来たんですか？
人差し指で俺の二の腕を突き、またあの何を見ているのか読めない不思議で綺麗な瞳で俺を覗き込んでくる。俺の顔の他に入道雲が映っていた。
どうしてこの町に、か。
「どうしてだろう？」
聞き返してみた。どうして俺はここに来たのか。夏場なら避暑地で過ごす、という方が絶対良い。わざわざ直射日光に晒され、日差しもなく日の光が痛いと思う堤防に呆然と座っているなんて、本当になんで俺はここに来たのだろうかと思い悩む。琉璃も俺の答えに困ったのか、首をさらに傾げて海に投げ出した足を髪が撫でた。
———何も考えてなかった、とか？
「かも。良く考えたら無計画だったから」

ただ家に居たくなかった。それだけでここに来た。霧島の方が遠いのに。
「でも、ここに来て良かったかも」
何も考えてなかったとは言え、何も得られなかったわけでもない。どうして？　と視線で訊ねてくる琉璃に、レンズを向けてみた。撮るつもりはないけど、やはりレンズに恥らう姿は舞い降りた天女か人魚のようだ。
――――恥ずかしい、です。
カメラを退けると、少しだけ不満そうに俺から視線を逸らして海を見た。親父さんを探すように、どこまでも遠くの海と空を映し出す横顔は綺麗だった。目の前にモデルがいるのに、許可が下りないのは実に惜しい。そんなに恥ずかしがることはないと思うんだけど、俺も撮られるよりも撮る側の人間だから、気持ちは分からないでもない。
「ごめん。もうしないよ。嫌がってる顔を撮るつもりはないから」
――――ごめんなさい。
申し訳無さそうに、クロッキーブックを俺に見せる。今まで俺と交わした言葉が一ページを埋め尽くしていた。耳に残る言葉ではなく、目に残る言葉が俺の中では解決していない瑠璃の言葉だった。紺碧の海に白波を立ててこちらに向かってくる漁船を二人で眺めながら、会話はなかった。
「ん？　戻るの？」
瑠璃が先に立ち上がる。視界の端を長い髪が涼やかに流れ、それを辿ると視界が真っ白に染まった。その中に見えた瑠璃は黒い影に覆われ、キラキラと朝露を纏う朝顔のように、俺に行こうと笑みを浮かべて咲いていた。この子は本当に人と言う枠に収まる美しさだけでは言葉が足りない。言葉にはしなかったが、その瞬間を切り取ることが出来れば、俺はどれほどの幸福と快感を味わえただろうと思いながら、すっかり熱を帯びたバッグを肩に掛けた。
「親父さんの船？」

堤防を戻っていると、背後を一隻の漁船がゆっくりとした速度で対岸側の漁港に接岸しようと通り過ぎた。操縦席に一人と、後部甲板に若めの男がなにやら作業をしている姿がチラッと見えた。歩きながら書くことはしないようで、同じように振り返りながら頷いた。そのまま続く会話はない。隣を先導するように少し前を歩く琉璃。出会って小一時間あまり。まだ瑠璃の声を聞いていない。返す言葉は全てクロッキーノートに走ったインク跡。ここまで口を閉ざして開こうとしないとなると、瑠璃は何かしらの障害か事故の後遺症なのではないかと言う疑問が固まりつつある。失語症とか精神的なものも少しは知っている。耳が聞こえないわけじゃない。俺の言葉をはっきりと認識して応えてくれた。

———どうかしましたか？

そんなことを聞いてくるような目。熟考していて呆然としていたようで、何でもないと腹の中から出てくる息を笑みに変えた。聞けるはずがない。赤の他人だ。聞いてしまえばせっかくの何かを壊しそうな気がして、その小さな背中と揺れる髪を見つめながらその背を追った。海を渡ればすぐそこにある漁港も、堤防を端まで歩いて、反対方向へ歩くと遠い。

「あっちぃな、ここは」

直射日光とバッグに籠る熱とアスファルトの反射熱のトリプルパンチはさすがにきつい。よくよく見れば腕が赤くなってる。顔も見えないが、そうなっているはず。今年初の日焼けが海水浴でも日光浴でもなく、ただの待ちぼうけになるとは、何か寂しいものがある。

「どうかした？」

平日にも拘らず、交通量が異常なほどに少ない。通る車の大半はフェリー乗り場でフェリーを待ち、後は川沿いの道を俺たちに背を向けて走り去る。過疎も良い所じゃないだろうかと、言葉も出てこない。そんな明るすぎる道を歩いていると、先ほどから瑠璃がちらちらと俺に振り返る。俺がついて来ているかの確認と言うよりも、俺が肩に掛けているカメラバッグに視線が行っている。

――持ちましょうか？
足どりが止まり、胸元でクロッキーブックを捲り、真新しいページに何かを書き、それを俺に見せた。俺が両肩に掛けているバッグを見てそう言ってくれたのだろう。汗だくな俺とは対照的に、琉璃は汗一つ掻いていない。暑さに慣れているのか。同じ地元なのに随分と体質は異なるんだな。
「お願いしたいところだけど、カメラについては自己責任が基本なんだ。だからごめん」
カメラマンを志す人間が自分のカメラも管理出来ないようじゃ、学校を辞めなさいと入学当初にカメラを放置した生徒を教員が叱っていたのを聞いていたから、カメラバッグだけは他人に任せるわけにはいかなかった。折角の善意を無碍にした心痛さはあるが、琉璃が事情を理解してくれたようで笑ってくれたのでまた俺たちは歩みを再開した。
「おう、琉璃。来てたのか」
漁港に入ると青い籠からはみ出したデカイ魚を数人で倉庫のような市場に運び入れている。波の動きで漁船が接岸壁で上下してる。見てるだけで酔いそうになる。漁船後部に書かれている渡海丸、それが琉璃の親父さんの船らしく、魚の籠を下ろしている男が琉璃を呼ぶと、琉璃が小走った。
「田舎なのに渡海（とかい）丸か。是如何にってか？」
下らん洒落を思いついて一人で失笑してると、琉璃が俺に振り返り、親父さんらしき血色の良い親父も俺を見る。どうして漁師ってものは強面なんだろうかと、その顔に思った。
「加納友広か？」
琉璃が親父さんにクロッキーブックを見せると親父さんと目が合った。
「はい、そうですけど？」
いきなりフルネームの呼び捨てか。悪い気はしないが、良くもないが黒く焼けた筋肉質に言われるとしっくり来るのは何故だ？

「そうか。もう来てたのか。てっきり夜だとばかり思ってよ。連絡くれたんだろ？　悪いな、迎えに行けなくてな」
そう言いながらも手は休めず、もう一人の乗員に水揚げをさっさとしろと叱咤してる。あの親父からよくあんな可愛い子が生まれたもんだと、二人を視界に入れて対比する。きっと母親の遺伝子が勝利したんだろうな。
「あ、いえ、連絡はまだしてません。着いたのが早かったので」
初めましてと、会釈をしてから近くによる。磯臭い潮の香りの中に、魚の生臭さも鼻を刺激してくる。おまけに暑さも相成っていい加減鼻がおかしくなりそうだ。
「なら良いが。琉璃、お前は宿にいろっつったろうが。連絡あったらどうすんだ。いちいち来るなって言ってんのによ」
娘にも容赦ないな。それが家族なんだろうけど、琉璃がなんか可哀想だ。
———堤防で会ったから、いなくてせーかいだもん。
隣の琉璃がそう書いて親父さんに見せた。それを見て親父さんが呆れなのか、結果オーライなのか微妙な息を漏らした。
「悪ぃな、兄ちゃん。俺ぁまだやることがあんでよ、宿まで琉璃に案内してもらってくれ」
「分かりました」
特に話すことはない。宿の主だったらどうせまた後で会う。そんなもんだろう。親父さんに促され俺の元に来る琉璃に案内を任せて来た道を戻る。一体何のために漁港に来たのかさっぱり分からなかったが、すぐに解けた。
「おー、琉璃ちゃん、今日も可愛いな。どれ、今日上がったきびなごだ。持っていきな」
「琉璃ちゃん、ちょうど良かった。カジキの切り身があるけど、持ってく？」
琉璃に気づいた漁港の人間が次々に琉璃に声を掛けていく。その一つ一つににっこりと笑みを携え、嬉しそうに渡される貝やら魚の

入った袋を受け取る。美人に似合わない魚の尻尾が袋から突き出している。女神がどんどん庶民に落ちぶれていくようにも見えたけど、琉璃は誰にでも同じ笑顔で、同じようにクロッキーブックに書いた、ありがとうございますの文字を見せながら頭を下げていた。言うなれば、漁港のアイドル琉璃ってか？

———こんなにもらっちゃいました。えへっ。

一度袋を地面に置いてから、そう書いて俺に見せてきた。

「すごいね。いつも貰えるの？」

はい。と謙虚になることもせずに、素直に頷いた。美人はやはり得。あの笑顔を見せられたらそうすることが義務のように作用している。そう見えて仕方なかった。愛されてるんだろうな、ここで琉璃は。だから嬉しそうに笑ってられる。居場所だから。羨ましい限りだった。

「持とうか？　重いんじゃない？」

両手に抱えたビニール袋。生臭さが潮風に乗ってどこかへ消えていく。琉璃は首を振って俺のバッグを見る。俺が重たそうなものを持っているのに、これ以上そんなことはさせられません。と、その目が語っていた。それほど重いわけじゃないけど、頑なな目に、先を促して隣を歩いた。

「さっき親父さんがいちいち来るなって言ってたけど、いつも漁港に行ってるの？」

親父さんは困ったようにしながらも、どこか嬉しそうに目を逸らしていた。漁業関係者の様子を見ている限り、琉璃はいつも顔を出しているのは間違ってはいないだろう。夏休みだし、琉璃も暇なのかも。俺の問いかけに頷いてから、笑った。さっきの人たちに向けた笑顔と同じだった。

「海が好きなの？」

額の汗を拭いながら、琉璃について行く。海の近くかと思っていたけど、どんどん川沿いに山のほうへ歩いていく。遠いのかも分からないから、車の通らない車道の先は見ないことにした。

不思議そうに琉璃が俺を見る。どうしてそう思ったのか、思ったのか？

「堤防にいたよね？　最初は絵を描くのかと思ってたけど、待ってたんじゃないの？　親父さんが戻ってくるの」

俺に向いていた瞳が、灰色に輝くアスファルトの脇に伸びる絹のような歩道の白線に下りて頷いた。恥ずかしいことじゃないと思うんけど。

「良いことだと思うよ。親父さんも嬉しそうだったし」

俺を見ることなく、白線の上をモデル歩きのようにハニカミながら、歩調が少しだけ早くなった。琉璃は恐らく女子高生だろう。その歳で父親が好きと言うことは珍しいわけじゃないのに、琉璃本人はそう思っているんだろうな。多感な時ってわけか。可愛らしいもんだ。

「おっ？　デカイな」

橋が視界に入ってきたと思っていたら、交差点の所にやたらとデカイ木が普通の街路樹のように聳え立っていた。すぐ傍には信号があるから、その幹の太さは十メートルほどに見える。首を大きく逸らさなければ全容の確認が出来ない。

———天然記念物の塩入橋の大楠です。千年以上の樹齢なんですよ。

俺が立ち止り、空を仰ぐように木を見ていると琉璃が袋を置いてペンを走らせた。天然記念物らしいが、こうも交差点のすぐ傍でしかも周囲には普通の住宅もある。天然記念物の扱いが少々ぞんざいじゃないかと思う。

「千年か。千年もここで生きるなんて凄いな」

本当に大きな楠。千年前なんて平安時代あたりのはず。そんな時代から今日までここに鎮座しているなんて、木の生命力には脱帽だ。

———立派ですよね。ずっとここで生きて、愛されてきたんです。

にこっと俺に琉璃が笑む。大したものはないと思っていたけど、そうじゃないみたいだ。こんな街の景観の中に存在感を匂わせてい

るやつがいる。
「疲れないのかな、千年もここで」
凄いなとは思う。でも動くことも出来ず、ここで千年の時を越えてきたなんて、俺が木なら到底無理で、枯れたはず。木にはなりたくないな。そんな下らない考えで気を見上げていると、琉璃がまたあの不思議な瞳を向けてくる。笑顔は可愛くて見慣れてきたけど、この表情だけは心の内を探られているようで、何か落ち着かない。
———不思議なことを言いますね？
不思議なことだろうか？　木は直立不動でそこにいるしかない。人だって立ちっぱなしだと疲れるのに、休むこともなくそこに立つ。愛されたからこそ永らえ、時を越えてきた。人々はそれで良いかもしれない。大切なものを守ってきたと言う誇りがあるだろうから。だが、木はどうなんだろう？　ここまで生きたいと思ったのか？
まぁ考えたところで所詮は木。そんな意識が湧くこともなくそこに立つ。
「何となくね。愛されるだけってのも結構重圧じゃないかなって」
俺とは違うよな。勝手に悲劇のヒロインの感情でいるのは間違いも甚だしい。俺は俺。木は木。それで良いんだ。俺は写真を撮りに来ただけ。
「さ、行こう。喉が乾いてきちゃった」
しばらく俺を見ていた琉璃が、頷いて袋を手にしてから宿のほうに案内してくれた。人通りもほとんどない道を三百メートルくらい歩いただろうか。視界に入っていた橋も既に背中。額で収まっていた汗も鼻の下にも掻いてる。スタンドを過ぎると小さな商店街らしき建物群が見えてきて、その少し前で琉璃が止まって振り返った。
「ここ？」
頷く瑠璃を見てから視線を上げた。民宿だから見た目は少し大きめの一軒家。それでも玄関の近くにある看板には竜宮荘と書かれていた。分かっていたはずなのに、どうしても今まで宿泊したホテルと無意識に比較しているせいで、落胆の想いは拭えなかった。普通の人の家にしか見えない。

「これもまぁ、経験だな」
琉璃が俺の言葉に振り返る。何でもないと手を翳してバッグを背負いなおして中に通された。玄関からして広い。実家の倍はあるだろうかと言う広さからは居間や客間のような畳が見える。壁には魚拓や大漁旗、漁船の写真などが飾られていて、漁師経営の民宿なのだと一目で判る。鼻腔を擽る田舎のばあちゃんの家とか言うもののような室内の独特の匂いもなぜか郷愁を覚える。実家自体が田舎なのに不思議な感覚だ。
――――お部屋はこっちです。
物珍しそうに室内を見ていた俺の手を軽く叩いて琉璃がクロッキーブックを見せる。場所によっては少し軋む音を奏でる年期が入ってこげ茶色の床板を踏みしめながら短い廊下を歩く。
階段の隣にある一階の部屋。この民宿自体がコの字形の建築でなっているから、俺の通された部屋は玄関脇の窓の奥の部屋だった。
「他にお客さんはいないの？」
玄関にあった靴は少ない。俺以外を考えると琉璃と親父さんのものだろう。室内は静かで他に人の気配がない。
――――残念ながら。
ノートを見せる琉璃は苦笑を浮かべた。経営としては漁業があるからギリギリでも何とかなっているかもしれないが、民宿のみの経営は閑古鳥らしい。そんな時に来た長期滞在予定の俺は良いお客なんだろうな。
――――夕食は六時で、朝食は七時ですけど、ご要望はありますか？
出会いが出会いだけに俺の中では琉璃は一女の子なんだけど、琉璃からすれば俺はお客様なんだな。荷物を置いて座椅子の背もたれを撓らせると琉璃が俺に意見を求める目で小首を傾げた。
「食事の時間は良いよ。入浴の時間とかはあるのかな？」
琉璃が左手の指を四本立てる。皺のある俺の手とは違って、柔らかそうで細い指。そんな所まで綺麗なものなのか。すげぇとしか思えない。それでも四時以降と言うことは理解した。まだ十二時を少

し過ぎたばかり。汗を流そうと思ってたんだけど、しばしの辛抱か。
――――お手洗いとお風呂はあっちにあります。
琉璃が玄関前のスペースの反対側を指す。曇りガラスの窓があって、壁には漁の道具らしいものが立てかけられている。どうやら一階はこの部屋とあとはキッチンと食事の間と風呂トイレと琉璃たちの生活スペースだけのようだ。
「分かった。ありがとう」
一人にしては広すぎるくらいの八畳間。篭る熱気を爺ちゃんの家にあった記憶のある、縦長の窓に取り付ける古いクーラーを作動させて払拭する。
――――お昼ご飯はどうしますか？
琉璃がテーブルの上に広げたクロッキーブックを俺に見せる。
「別に良いよ。適当に買いに行くから」
昼食まで頂くと、さすがに予算が嵩んでしまう。両親に貰った分は極力は使いたくない。
――――私の分もありますから、遠慮しないで下さい。
用意してきます。と琉璃が笑顔を残して部屋を出て行く。これは宿泊費用に加算されるのかどうかを考えながらも出るなら出るで楽なものだと、畳に体を横たえた。壁に取り付けるクーラーよりも作動音がうるさくて、蝉の音が窓の障害を抜けてかすかに響いてくる。日焼けした畳は黄色く、イ草の匂いもしない。天井の板の模様が人の顔に見えそうな気もする。
「人の家だよなぁ、やっぱ」
室内のインテリアこそ旅館のような感じでも、旅館ほどの綺麗さはない。何て言うか、金を出してまで泊まりに来たと言う実感だけがない。体を起こしてバッグからパソコンとカメラバッグを取り出してテーブルに並べる。コンセントを利用して良いのか分からないけど、パソコンのバッテリーも切れてるだろうから、電気代が必要なら払うつもりでプラグを指した。
ファイルを取り出して、授業中に配られた企画書を見る。まっさ

らだ。企画のテーマ、企画意図、何も書かれていない。何を撮りたくてカメラを構えるべきなんだろうか。琉璃を撮りたいと思った。でも仮に琉璃の許可が下りたとしても、俺は何を撮りたいのか。琉璃をモデルにするのか、琉璃を一つの道具としてフォトの中に加えるのか。対象の一つとして良いものであっても、それをどう活用するかという企画意図が沸かない。

「ロケハン行くかな」

暑さの中にじっといたからあまり動きたい気分じゃないんだけど、ドキュメンタリーフォトを撮ろうして、選択テーマは選んでいるからここへ来た理由になるものを絞らなければならない。やる気が考えるだけで失せた。

二十分くらいして琉璃が俺の部屋に来た。食事は食事をする居間で取るようで、俺はようやく冷めてきた体を廊下の蒸し暑さの中で涼を失った。

「そうめんか。一年ぶりかも」

二十畳くらいの広い居間は、膝下ほどの長テーブルがいくつか連なっていて、民宿らしいなと初体験のくせに実感した。何人が座ったのか知らない座布団に腰を下ろすと琉璃が麦茶を注いでくれた。それを一気に飲み干す。口内が乾いているようで気持ち悪さを残す湿感が、香ばしい麦茶の掴むことの出来ない喉越しと喉を通り抜ける際に香る香りが脳天まで涼やかにさせてくれた。

いただきますと手を合わせ、氷の浮かぶそうめんの皿からネギ、ショウガ、わさびを入れたつゆに絹糸麺を沈める。それを一気に吸い込むと清涼感としめられた麺の歯ごたえが薬味とつゆの衣を纏って喉越しがいい。

「美味しいね。久しぶりに食べると」

それほどそうめんは好きじゃない。でも空腹な上にこの暑さには程好く食指を誘った。

———足りますか？

テーブルにあるのはそうめんと卵焼き。短時間で出来るものとし

ては妥当なところ。ただこれが民宿の昼食かと問われると不当。そんな違和感がないわけじゃない。でも、これは恐らく家族の昼食。だから問題ない。

「十分だよ。美味しいし」

甘い卵焼き。好物の一つだ。塩の卵焼きは好きじゃない。塩辛い卵よりも甘い卵の方が口当たりもよく、めんつゆで塩味がある分甘味が良い。それでもどこか一線と言うか、距離と言うか落ち着かないのは会話が無いこと。俺が話しかけると琉璃の箸が止まる。わざわざノートに書いてくれるから、気が引けた。

「そう言えば、学校は南大隈？」

なら聞くのはイエスノー形式。これなら首を振るだけで分かるし、沈黙の中で向かい合って食べなくても言い。琉璃が首を左右に振った。耳横の髪が波打って揺れる。

「この辺に他に高校ってあったっけ？」

知ってるのは南大隈、鹿屋、串良商業、鹿屋女子、鹿屋工業、鹿屋農、高山くらいだ。他に高校ってあったか分からない。つい聞き返した言葉に琉璃が箸を置いてペンに持ち替えた。

「え？　行ってないの？」

そして見せられるノートに意外だと視界が開いた。

———学校には、行ってません。

六枚目：たゆたう

その一文を見せる琉璃は、悲しそうでも嘆きでもなかった。それが普通。そんな印象を受ける、表情の不変。一方の俺は罪悪感のような痛みを掘り起こしてしまった。ただ、ごめん、と言う俺の言葉にも琉璃は不思議そうにしながらも笑んだ。

「ご馳走様。美味しかったよ」

三回目の美味しいと言う言葉に琉璃が嬉しそうに笑った。先に部屋に戻り、一息つく。どうして高校に行っていないのか、なんて聞けなかった。衝動はあった。でも行きたくても行けないという事情は親父さんの仕事ぶりを見ていても感じられなかった。行きたくないから行く必要はない。琉璃の笑みにそう思ってしまった。

「いじめ、とかはないよな」

あれほどの美貌であれば、いじめがあるとしても男子が放ってはおかないだろう。不可解だった。でも仮にいじめにあってから不登校になり、行っていないとするならば、言葉を話せないことがいじめが原因でのことだと当てはまる。でも、そんな様子はまるで感じられない。ただ出会って初日と言うことで隠している可能性もないわけじゃない。だから俺もこれ以上は詮索を出来ない。お互いにお客ともてなし側の立場でしかないから。

ロケハンに行こうと思いながらも満腹で動く気もなく、食って早々横になる。昨日はまともに練られなかった分、ここに来てようやく安堵出来る空間に移動による疲労が襲ってきた。

目を閉じれば聞こえてくる小波とそこにたゆたう歌声。真っ青に染まる空の中に、波を避ける岩礁のように浮かぶ高く真白な積乱雲。砂浜に打ち寄せる波と、肩を寄せ合う流木の漂流。笑う貝の擦れる音色に、跳ねる魚の白飛沫、鮮やかに照りつける陽光の眩さは、俺

の視界を覆い尽くす。その中にいるのは、帰るはずだった架空のふるさとを失い、悠久の時の中に放り込まれてしまったロマンの闇。灯りを失ったその姿は、自らを灯すことで闇を討つ。俺はそこにレンズを差し向ける。全てが集う闇海の灯り。小さくも美しくS字を描く背中を風が髪を梳く。その後姿を見ていられるなら、俺はそれだけで生きて生きたいと願うように時を待った。

いつかの日に飛ぶことを止めた鳥がその翼を広げるように、その魂を燃焼させながらも、そこに帰る者の為に夜の長い時波を照らし続け、悲しみなどを知らない裸体に浴びる潮風にただ楽しそうに歌っていた。

「・・・・・・ああ、寝てたのか」

全ての消失。見えたのはマーブル模様の混乱を思わせる木目天井に、四角い照明。夢だったんだと気付くのに時間が掛かった。

――――目が覚めました？

母親の子を想う声。そんな声が聞こえた気がした。逃げ出した俺をも包み込む自愛。目覚めきらない瞳にそんな影が映った。

「あれ？」

明るかったはずの室内が不自然に明るかった。覚醒する体を両肘を使って起こすとタオルケットが足に滑った。

――――おはようございます。

目覚めには少々眩しい室内灯に照らされた白い紙に書かれた挨拶とオリジナルかのキャラクターの笑み。

「俺、結構寝てた？」

目の前に琉璃がいた。正座を崩し、腿にクロッキーブックを乗せて寝ていた俺の頭付近に。

――――夕食の時間でしたけど、気持ち良さそうに寝てました。

テーブルに置いていた携帯を開くと三件のメールと時計の針が八時を過ぎていた。昼寝のつもりが六時間近く寝てた。

「ごめん。起こしてくれて良かったのに」
俺の謝罪を琉璃が笑みを浮かべて首を振った。
「えっと、何かな？」
立ち上がろうとする俺に、琉璃が俺の頭に手を乗せ撫でてきた。急なことで気恥ずかしさと困惑が入り混じって、体が硬直した。何も応えない代わりに撫でられる。戸惑いに固まる中で徐々に感じる頭部への温もり。撫でられる場所だけが温かい。人からのこんな温もりの譲与は久しい。素直に枯渇していた砂地に降る雨のように安らぎをもたらした。
———寝ぐせ、ついてました。
五分くらいだったか、それくらい経ってから琉璃がノートにそう書いてご飯食べませんか？　と立ち上がった。いきなり人の頭を撫でるなんてと思っていたが、そう言うわけか。何かを勝手に期待していた分、琉璃が笑んで俺を誘う顔が、俺の内心を見透かしおかしそうに笑っているように見えて、ただただ羞恥を覚えてしまった。そんなわけないんだよな。馬鹿だ。
「おう、起きたか。随分と疲れてたのか？」
昼食を食べた居間に琉璃の後をついていくと、親父さんが野球中継を見ながら一人酒をしていた。その近くには二人分の食事が手をつけられることなく保存の効くものだけがそこに置かれていた。
「すみません。夕食のことでご迷惑を」
お客だから家族と違って、もてなしの料理を出す。現に琉璃がどこかへ部屋を出てから戻ってきた時に持ってきた汁物や刺身の盛り合わせんなどは市販品とは違う新鮮味を出していた。起こしてくれれば良いのに、わざわざタオルケットまでかけてくれて、酷く申し訳ない気分で満ちた。
「気にするこたぁねぇ。俺は先に食ったが、琉璃がまだだ。謝んなら琉璃に言ってやれ」
昼間と同じ座布団に座り、琉璃と対面する。俺の部屋よりも少しだけ室温が高い。きっと俺が起きてくるまではクーラーを入れてな

かったんじゃないかと、俺のためにわざわざそうしてくれたのが何となく感じられた。
「ごめんね。待っててくれたんだ？」
琉璃はそれでも笑った。その笑みが救いだったからそれ以上は何も言わずに、新鮮なきびなごの刺身やさっぱりした豚骨や鯛、海老の入った酒寿司、桜島大根や薩摩鶏を入れた薩摩汁をじっくりと味わいながら同じ地元なのに知らなかった郷土料理を堪能させてもらった。
「そういや、兄ちゃんは何しにこんなとこに来たんだ？」
野球がＣＭに入ると親父さんが俺に首を向けてくる。
「写真を撮りに来たんです。専門の課題で」
ほぉ、と感心した声の次にどんな写真をだ？　と予想の範疇の問いが返ってくる。
「はっきりとは決めていないんで、明日からでも探しに行こうかと」
琉璃を見る。琉璃が俺の視線に気づいてかすかに赤面して、薩摩汁の入ったおわんで顔を隠すように食事に視線を落としていた。まだ気にしてた。やっぱり受け入れてもらえないかな。他に撮るものが浮かばないんだけど。
「なら、琉璃はどうだ？」
親父さんの意外な言葉に反応したのは、琉璃が先だった。俺よりも何倍も早い首振りで柔らかそうな髪が照明を弾いた艶を滑らせた。その髪とは裏腹に隣で酒を煽る親父さんを見る目は恥ずかしさと怒りのようなものを匂わせていた。そこまではっきりと拒否の反応を示されると、間接的とはいえなかなかにショックだ。
「何だよ？　嫌なのか？　お前の写真は少ないからなぁ。撮ってもらえるなら撮ってもらっとけ」
普段から写真に撮られることは恥ずかしいから嫌いなのか。勿体ないと思う。何か嫌な理由でもあるのか。写真映えすると思うんだけど。
———変なこと言わないでよ。

いつもの可愛らしい文字ではなく、少しだけ荒々しい字。親父さんの前では俺が見た天女のような優雅さは皆無でギャップがある。それでも持ち前の良さからその様子すら微笑ましさを覚えてしまうのはしょうがない。

「ったく、お前は気にしすぎだ。もっと好きにせんか」

親父さんに琉璃が初めて笑顔を崩し、じっとりと恨めしそうに見ている。でも親父さんは琉璃が何を気にしていると指摘しているのか、トロトロに煮込まれ芋焼酎の柔らかくほっこりする風味と生姜の香りが鼻腔を抜ける豚骨を歯を立てることなく飲み込みながら思った。写真に対する何か懸念があるのか。

「別に強要するつもりはないですから」

琉璃が俺に振り向いて、そうですよね？　と同意を求めるように見てくるから、それを受け止めるしかなかった。そこまで嫌なら俺も心が弱い。折れるしかないだろ。あの笑顔が消えることがないなら、それが一番だ。親父さんはどこか不服そうにしていたけど、その後は野球に集中したのか俺も琉璃も夕食を時折挟む談笑の他は静かに終えた。

「いってぇ・・・・・・」

食後しばしの休憩を挟み、実家よりも大きな風呂に入った。普通の家屋にある風呂で全身を伸ばせる大きさの風呂があるとは、少し感激したけど、すぐに地獄の釜だと思い知った。浴槽には浸からずに冷水シャワーのみ。お湯なんてぬるま湯でも想像以上に日焼けをしていた全身に触れる度に激痛が走った。風呂から上がってもバスタオルが触れることも痛かった。

「半日もいなかったってのに、日差し強いんだな」

玄関横にあった自動販売機でジュースを買って、廊下の窓を開けて冷め切ることのない夜空の下で余計な熱を冷ます。

「静かなもんだ」

車の走るエンジン音がない。聞こえてくるのは姿のない虫の求愛行動の調べ。熱帯夜ではないが、まだまだ照り返しで溜まった熱が

放射されて廊下の板も冷たくない。手にある缶ジュースだけが水滴を増やし、俺の手を冷やす。親父さんは明日も漁があるとかで野球中継が終わると居間の襖の向こうにある自宅スペースに消えた。結局今日はロケハンも何も出来ないままだったと見上げる夜空には、揺らぐ大気に幾星が煌めいていた。

「まだ起きてたんだ？」

静かな夜の中に、軋む足音。蚊が飛んでいるかもしれないのに、廊下の窓を開けて足を投げ出していても蚊が寄ってくる気配がない。小さい蛾やカナブンは民宿の看板の明かりに集っていて近づき難いけど。

「それは？」

琉璃が可愛らしい柄のプリントされたシャツ姿で、ラフな歩みで俺に一本の何かを差し出してきた。つい廊下の明かりにかすかな陰影をつける胸元に視線がいったのをごまかして受け取る。日焼け用のローションで遠慮なく使わせてもらった。普通買わないようなものも女の子にしてみれば当然のケアなんだな。肌に染み込む冷たさが爽快感を生み、心地良い。

初めは不自然でしかなかった琉璃の胸元に抱えるクロッキーブック。出会ってから半日近くだが、それでも見慣れた感がもうあった。

――――痛そうですね？

「死ぬかと思ったよ。毎年毎年赤くなるだけだから、なかなか焼けなくて」

日焼けをしようにも黒くならずに火傷の赤で染まって、冬頃には白く戻る。ここ数年はまともに日焼けもなかったせいも相成って見事に露出していた部分は赤く染まった。

――――顔も赤いですよ？

少しおかしそうに笑う。やっぱりはっきり分かるか。風呂の鏡を見て何となくそんな感じがしたけど、乾燥してくるとはっきり出るらしく、琉璃はだるまさんみたいと俺を笑った。

「あのさ、ちょっと聞きたいんだけど、この辺りで何か写真に撮る

と良さそうなものってないかな？」
観光地だと言うものの実感がない。何も観光ものじゃなくても、珍しいものでも何でも良い。その中で何かしらの被写体を見つけられさえすれば十分だ。まだ一日。時間はまだまだある。
――諏訪神社があります。珍しい神社なんです。オスワサアって言ったりもします。若い人はあんまり言わないですけど。
その若い人が言ってるじゃんと言う突っ込みは飲み込んだ。
神社で珍しいと言うのは珍しいものなんだろうな。京都の伏見神社の鳥居回廊に圧倒的な存在感と圧迫感と神聖感を感じたけど、そんな感じか？
「明日、案内してくれないかな？　地図でも良いんだけど」
夜も更けてきた。大阪とは違って夜になればなるほど静かになる。恐ろしいくらいに窓を開けても漂う静けさには言葉を忘れそうになる。琉璃が頷いてくれたから明日の予定は一応決定し、琉璃も寝るとおやすみなさいとノートに一筆してから、俺もそれに応えて背中を見送った。一階の明かりが俺の部屋だけになると、部屋に戻る。クーラーの利いた室内の静けさに、テレビをつけるがチャンネルが大阪よりも少なく、いつも見ていたはずの番組もやってなく、適当に付けっぱなしにして敷いた布団に転がってパソコンの電源を入れた。カードリーダーにカメラのメモリーカードを取り出して読み込ませる。今日撮影した分のデータを転送して展開する。デジカメの画面では小さい写真も鮮明にプレビューされ、チェックしながら不要なものを削除する。肩肘ついて今まで撮った写真を見直す。数時間前まで寝ていたから眠気はない。淡々とした室内の静けさ。今日撮影した大半を削除した後だと言うのに、もう一度見直すとまだまだ俺の手が削除へとクリックすることを止めなかった。他人の手が俺に繋がっているようで、その写真を削除することへの躊躇いもあるのに、削除することへの反対の気持ちもなく、次々にデータがゴミ箱の中に消えた。
「この写真だけか・・・・・・」

琉璃と出会うきっかけの一枚。中央部に赤い灯台が聳え、片方は堤防のみ。片方は海と岬の一部が写る単調な写真。それでも削除してきた手と脳がこの写真だけはプレビュー画面に残すことを許した。

「ぼやけてるよなぁ」

何気なく撮影したから当然。灯台から少し離れた堤防に、レンズに背を向け海を見ている琉璃。油彩ペイントで編集すれば良い絵になりそうだけど、写真としてはいまいちパッとするもののない風景写真だ。俺を見下ろしていた不思議そうで美しい顔。それに見合う姫宮琉璃という名。言葉を話さない代わりにそれを感じさせない笑顔。さっきの格好から分かったスタイルの良さ。気遣いも女子高生くらいの年代だろうに、よく出来てる性格。どれをとっても非がないと言うのを実感した。こんな子がいるものなのか。そんな思いからレンズを向けたかった。でも、琉璃は撮られることに対して拒否を示す。その仕草の方がどうしてか素じゃないのかと思ってしまった。

「良い子で可愛い子なんだけど、何だろうなぁ」

一人になって感じること。琉璃と言う女の子が見せる表情。それに俺は惹かれた。間違いなく。でも、それと同時に人懐っこさの中にある一線をそれで隠しているような気がした。ロケーションフォトに関しては人も一対象物となるからまだ良い。でも、俺が撮ろうとしているのはドキュメンタリーフォト。それは対象を幾つもとして撮影するものじゃない。だからこそ見つけた被写体なんだけど、いきなりの壁だから写真を見るだけで息が漏れる。ポートレートと似た部分があるから、モデルが硬いならカメラマンがコミュニケーションをとり、緊張を解きほぐすことも技術の一つ。でも相手は素人。ポージングや表情の演技を求めるモデルとは異なるわけだから、コミュニケーションしかない。カメラアングルも構図も俺が何とかする。でも開いてくれないのはいたいな。

「まだ一日。先はある」

言い聞かせながら充電している携帯を見る。一件はスパム。残り

二件は愛紀と母さんからだった。内容は似たようなもの。どう過ごしているのか。共通しないのは、母さんは迷惑を掛けてないかと問題はないかと言う心配。愛紀はそっちは楽しい？　や友達が近くに住んでるんだよとか楽観の伝達。返信する気もなくてそのまま閉じた。逃げ場のない現代。ここで返信してしまえば俺は本当にダメになる。逃げ出してきたのに、振り返るなんて。

布団に入ってからも、どうすれば俺はカメラに収めることが出来るのかという考えにさらに目が覚めた。一番の疑問である、琉璃の声を聞きたいと言う思いの下で俺はカメラを向けたいのかもしれない。声は人を騙し、人を癒す。それがあるかないかだけでも表情に隠されたありのままというものを見える気がした。あの写真の後姿は言葉がない。俺を見下ろしたあの表情にも言葉がない。俺をお客として世話をしてくれた時も言葉がない。琉璃は本当に良い子だと思った。でもそこには当たり前にあるはずの言葉がなかった。でも、俺はどうしてか琉璃の声を知っているような感覚がある。だからこそ、違和感が消えない。あの写真を見ていて思うのは、歌。そうだ。琉璃を見ていて思うのは歌だ。言葉を話さずクロッキーブックで会話をする。一言だって俺は声を聞いていない。なのに既視感のように琉璃と接しているだけでその歌が聞こえている気がする。夜の穏やかな波に静かに吸い込まれていくような歌が聞こえていた気がする。実際はそんなことなんかないことだって分かってる。夢想でもない。でも俺はそう思ったんだ。ただ美しさと笑顔に惹かれたわけじゃない。その歌声を聞いた気がしたからあの写真を削除出来なかった。残っていると思ったから。確かに感じた何かを完璧な写真ではなくとも収めたと言う感覚だけで保存した。

七枚目：オスワサァ

翌朝、と言うのか微妙な時間帯に目が覚めた。どこかから聞こえた乾いた拍手のような音が眠気を払った。室内に携帯の明かりが眩しく俺の目を射抜いてぼやけた。デジタル時計が画面隅で示した時間は四時過ぎ。夏でもまだ室内は暗い。へんな時間に寝たのが影響したか二度目も出来ず、背伸びを数回してから顔を洗いに部屋を出た。

「何だ、もう起きたのか？　まだ早いだろ？」

親父さんが階段から下りてきて鉢合わせした。

「あ、いえ、変則な時間に起きたので。もう仕事ですか？」

ラフな俺とは違って、親父さんは静かな玄関に腰掛けてウェーダーの裾をブーツの中に仕舞っていた。夜も明けてない頃から仕事なのか。漁師も大変そうだ。

「様子見にな。なんなら来るか？　朝飯はまだだ。することもないだろ？」

親父さんに誘われた。確かに起きたところですることはない。琉璃は当然寝てるだろうし、日も昇ってない。

「邪魔にならない程度に撮影とかしても良いですか？」

「おう。好きなだけ撮ればいい。行くならさっさと着替えて来い」

急かされて急ぎ足で洗面所で顔を洗った。実家に居た時よりも鏡に映る俺の顔は、緊張を解いて穏やかだと思った。余計な干渉がないから気楽。そんな気分と民宿の独特の家庭の雰囲気が意外と性に合ったかも。

「いつもこんな時間なんですか？」

軽トラの助手席に座る。乗用車と違って軽トラの背もたれは硬くて垂直で座り心地は良いものじゃなかった。ジーパンにTシャツの飾り気の欠片もない格好にカメラを腿に乗せて、親父さんに漁港に連れて行ってもらう。昨日は結構歩いた距離も車だと一分弱。何か

車に対して寂しさを覚えた。
「俺は生簀に行くが、兄ちゃんも来るか？」
港に残されても大したものがない。だから船に乗せてもらった。今朝は親父さん一人なのか、昨日乗っていた一人はいなかったからか、係留ロープを解けといきなり仕事をさせられて、ガソリンの匂いのするエンジンからの煙に懐かしい匂いを感じながら、まだ暗い海に離岸した。
「暗いな。これじゃ大した物は撮れないな」
遠くの東の空が、淡い赤みを帯びてきてはいる。でも、まだまだ光量が足りない。試しにフラッシュを焚いて撮影してみてけど、いい写真じゃなかった。
「結構揺れるんですね？」
堤防を抜けると、急に波で漁船が揺れ始める。錦江湾でも小船にとっては揺れる波があるのか？
「天気悪くなってっからな。まだまだ優しいもんよ」
操舵室で親父さんは暗闇の海を何てことのない表情で見ながら出力を上げた。正直速度を上げられると揺れをまともに繁栄して揺すられているように体が揺れるから次第に気持ちが悪くなってくる。爽快感のある潮風も潮臭さで清涼感のある山風を求めてしまった。
「船酔いしてきたぞ。気持ち悪ぃ」
まず来たのは頭痛と胸焼け。吐き出す息量が大きくなる。そして吸い込む息に混ざる潮風が心地悪い。
「大丈夫かぁ？　こんなもんで酔ってたらやっていけんぞ」
漁師で生きていくつもりはない。上下左右に不安定に揺れる船上では、脳が揺れて頭痛から伴う吐き気が深呼吸を呼ぶ。
「高い所を見とけ。海は見るな」
俺を気にしてくれたのか、速度が落ちる。操舵室の壁に寄りかかって座りながら空を見上げた。十分そこいらだってのに、俺は船に弱いらしい。フェリーでは酔うことなんかなかったのに。
「兄ちゃん、着いたぞ。大丈夫か？」

俺を気遣うんじゃなくて、生簀に着いたから速度が落ちた。ただそれだけ。余計な期待は心に失望が宿る。酔いも覚めないし。

「結構大きいですね」

生簀に接岸して親父さんが船から下りた。俺もそれに続いて発泡スチロールの上に並んだ木に行こうとして、想像以上の揺れに止めた。

「こいつらは温帯性広域回遊魚だ。運動量が足りねぇとまずくなるんだ」

揺れる生簀の端の木を親父さんはトントンと歩いていく。明るくなりつつある生簀の全長は四方二十五メートルくらいはある。深さは暗くてよく見えない。それでも俺はカメラを構えてみた。親父さんが四方を歩いて行く時に、俺と対称に立った時に赤みと言うか、茜色のような空に親父さんが影になって海に浮いていた。格好良かった。そう思った。

「静かなもんだよな」

親父さんはハマチの様子を見ているのかゆっくりとした足取りで生簀の周りを歩いている。時々海面に何かを入れて調べてるのは、水温とかかな？　揺れも多少は収まったおかげで酔いも完全じゃないけど覚めてきた。オレンジに染まる朝雲と水色の空を映す海。熱気はまだ眠ってるおかげで清涼感を感じられるようになってきた。俺を吸い込もうと姿を反射しない海面も暗さはまだ晴れないけど。フロートが波に揺られて海では聞くことのないような、古木戸のくたびれた音が耳に残る。

「親父さん、餌やりは良いんですか？」

「ペレットだけだな。生餌は後だ」

そう言いながら船に戻ってくる。もしかして俺に見せるためだったのか？　なんてことを考えた所で親父さんには親父さんの仕事があるんだろうな。俺を他所に船尾に置いていた箱を生簀に持っていってから撒いてた。置かれた箱を開けてみると、金魚の餌のような独特の匂いがする固形物が入ってた。養殖なんだからきっとビタミ

ン剤とかそう言うものだろうな。
「さて、戻るか。琉璃も起きた頃だろ」
小一時間ほど親父さんの作業を時々写真に収めた。ハマチはモジャコという稚仔魚として呼ばれ、九州だとワカナゴ→ヤズ→ハマチ→メジロ→ブリ→オオウオと出世していくことや、天然ものをブリ、養殖ものをハマチと区別してたりとか餌は多い時で一日に百万円分の餌を使うくらいに食欲旺盛な魚、生餌のアジやきびなごが多いから、鹿児島のハマチは日本一だと最後の方はただの仕事自慢だったけど、漁師としての風格を感じられた。
「そういえば、琉璃・・・・・・娘さんは学校に行ってないんですか？」
帰りは確実に俺を気遣っての穏やかな船速で港に戻ってくれた。おかげで酔いもそれほどなく波を掻き分けて白波を立てる船尾を、朝陽の目覚めの毛布を被った空とのコントラストをカメラに収めた。
「琉璃に聞いたのか？」
昨日出会ったのに、親父さんに娘のことを言うのはどうかと自己質疑があったが、琉璃が自分から教えてくれたことだから、と口に出した。
「あいつはよぉ、ちーとばかし変な所があって、馴染めねぇんだよ」
いつもニコニコとしている気がするから、人気者だと思う。親父さんの言ってることの意味が理解出来なかった。
「喋らんだろ？　スケッチブックに書くばっかで」
そう言うことか。てっきり性格的なものか何かかと思った。
「何かの後遺症とか病気じゃないんですか？」
父親相手に直接言うのは気が引けたが、この人ならそういうことなら受け止めてくれそうな気がした。
「いや、あいつは普通の子だ。どこにでもいるな。ただ、普通でもないだけだ」
支離滅裂。どっちだよ、と突っ込みたくなるが首を傾げるだけで親父さんの言葉を、待った。少しでも知りたいと思ったから。

「兄ちゃんよ。あいつは一人でいることが多いんだ。だから、ここにいる間だけでもあいつの友達になってやってくれねぇか？」
「でも、琉璃・・・・・・娘さんは、みんなに好かれてますよね？
昨日も港で楽しそうにしてましたけど」
琉璃は学校に行ってないから一人でいることが多いだけで、一人でいることを好んでるわけじゃないような気がするんだけど。
「笑ってたろ？」
俺の言葉を無視しているようで聞いているような目。入り江を抜けてから景色が空と海だけになる。暗かった錦江湾内が黄色とオレンジの混ぜ合わせたように黄金に引かれ始めて色づく。顔をかすかに雲から覗かせた太陽の陽が錦江湾を二分にするかのように鎮座する桜島の頂上付近に光をもたらした。鹿児島の目覚め。そんな気がして桜島も納めた。
「楽しそうにニコニコしてましたよ」
「ああ、誰にも嫌われることのねぇ可愛い奴だ。でもな、同じくらいに距離を縮めようとしねぇんだ」
距離か。分からないでもない。人当たりがよく、面倒見も良い。性格は容姿と違わずの美人だと思う。でも、俺が思っていたことに対して親父さんも同様に考えてたんだ。
「気に入ったろ？」
「え？　何がですか？」
いきなり親父さんの声色が幾分か上がった。船が赤い灯台の堤防の脇をすり抜けて港に入っていく。
「とぼけるなって。あいつにしちゃ珍しく、自分から率先してたからな」
俺のことを楽しそうに見る声。今の今までの娘を思う真剣な目の色はなかった。
「だからよ、あいつにももっと違うものを見せてやってくれ。俺じゃあ無理だからよ」
親父さんは途端に声色を戻した。

「奥さんは？」
「里美か？　あいつは十九年前に死んだ。病でな。男手一つじゃ分からんくてな。琉璃には大したことはしてやれてぇねぇんだ」
奥さんがいないと思ったら、亡くなってたのか。琉璃の為に漁師と民宿を経営するなんて凄いな。どれだけ自分の時間を割いているのか。ウチの両親と似た部分があるのかも。世話になりっぱなしの俺には言えることがない。自分で聞いておきながら後悔しか出てこなくて、すみませんとしか言えなかった。
「昔のことだ。兄ちゃんが気にするもんじゃねぇ。年も近いだろ？　無理にとは言わねぇが、あいつと友達になってやってくれ。なんなら友達じゃなくても彼氏でも良い。あいつにはとにかく違う世界を見せてやってくれさえすりゃいいんだ」
奥さんが亡くなった年に俺は生を受けた。ん？　でも待てよ。俺が生まれた時に奥さんが亡くなったと言うことは・・・・・琉璃は俺よりも年下だよな？　と言うか、何気に親父さんの言ってることは随分と無茶と言うか、けしかけようとしてるようにも聞こえるんだけど、良いのか、それで？
「あの・・・・・・」
「さて、接岸だ。ロープの用意をしといてくれ」
俺が問おうとした瞬間に親父さんの言葉が被せられて、そのまま船の仕事を手伝わされて、気づいた時には朝食を終え、親父さんはまた仕事に出かけてしまった後だった。
「誰にも嫌われることのない子か。確かにそうだよな」
誰からも好かれる女の子。その笑顔に寄ってくる人間は癒される。俺もそうだ。レンズを向けて見せる恥じらいさえも可愛いと思った。一目惚れだと言えば、あながち間違いじゃない。惚れ始めてる。その認識が在るからこそ、俺は写真として収めようとした。迷ってるとは言え、それでも一応は志望生だ。出来ることはカメラを持つことだけ。
室内の布団は天気が良いからと裏庭に干されて室内は何もない。

朝から蝉時雨が降り注いで熱気が篭り始めた。琉璃は掃除があるからと昨日の約束はもうしばらく待つ。撮影前の機材チェックと掃除で時間を潰しながらも、親父さんの言葉を記憶の中の琉璃に投影する。ぴったり当て嵌まる琉璃と言う人物像が、いささか可哀想にも思えるからおかしい。

「嫌われない人間っていないよな」

どんな人間でも必ず嫌いに思われている部分がある。それと同時に人は誰でも他人の何かを嫌いに思うか卑屈になるものがある。ない人間はいない。欲がある以上それは確実。

「一日そこいらじゃ無理か」

掃除機の音がかすかに廊下から響いてくる。夏休みの子供たちの声が網戸を突き破って響いたと思ったら、消えていった。昨日出会った女の子が、すぐに素を見せてくれたりはしないことは理解してる。でも親父さんに言われた琉璃の友達になってほしいと言う頼みは、本気だったと思う。学校に行っていない理由、言葉を話さない理由、友達になる理由。全てが理由付けで俺に与えられた。

「俺は理由無しじゃ何も出来ないのか？」

ブロアでレンズ表面とカメラ内部の埃を吹き飛ばし、保護フィルターのレンズをレンズペンを使って中心から外側に向かって皮脂汚れを拭き取る。それでも思うのは、掃除することでさえそれには理由があること。俺がここに来たこと自体が理由付けの元にある。理由のないままで俺は何も動けてない。自分に失望してしまう。情けなさ過ぎて、それでも理由がないと俺は動けなくて、その無限ループに自嘲した。

「時間出来た？」

静かに開けられた廊下側の戸。時間が出来たからと、外に出る格好に着替えた琉璃が笑んだ。カメラを手にして一緒に出る。

「鍵は掛けなくて良いの？」

今日も琉璃の手にはクロッキーブック。問いかけに返ってくる言葉はペンの走った跡。

――おとなりさんが見ていてくれるんです。
田舎だからのお隣さんとの目。冷めない近所付き合いが残ってるらしい。大して関心はないけど、そこまで開放的になっても不思議さがないのは田舎町ならではに思えた。
「今日も空が青いね」
蒸し暑さがどこにいても襲ってくる。それを運んでくる夏空は絵画でも見たことがないくらいに青くて白い。
――わたアメみたい。
本当に。美味しそうな綿菓子が幾つも浮かんでる。潮の匂いも感じないと爽やかな夏を感じられるから、暑さもまた乙に思える。
「この先？　そう言えばここって開いてるの？」
昨日見た商店街を琉璃と歩く。閑散としていて人の気配がない。開いてる店もあるけど、活気がない。人のいなくなった商店街に迷い込んだ気分。
――もともと人が少ないので。
苦笑して俺と同じように店先に視線を向ける。蝉はうるさいのに、喧騒がないから静かだ。世界に俺と琉璃だけみたいな。照りつける光が商店街の先を白く埋め尽くして、幻想世界にいるような錯覚があって、レンズを構えた。俺が構えると同時に琉璃が俺の隣で歩みを止める。少しだけ絞りを開いて光量を多く取り込んでシャッターを切った。プレビューしてみると琉璃が覗き込むように少しだけ背伸びをしてきたから、画面を傾ける。
――ここじゃないみたい。
「設定変えればそう見えるしね。この方が幻想的で良くない？」
商店街の家並みが実際とはまるで違う綺麗な淡い光に包まれている。先は光に覆われて何も見えない。眩しくて遠すぎる世界のような。琉璃が笑ったからこれはこれで良いかもしれない。
「ん？　何だあれ？」
会話のない静かな二人道。その先にあったのは神社だ。琉璃の言うお勧めらしい諏訪神社。商店街を抜けると小さな田んぼが両脇を

瑞々しい稲を光が零れる水田で育み、視界が少しだけ開けた。
――びっくりしました？
楽しそうに俺に笑む。想像してた神社とは随分と違った。想像の中にはなかった現実。鳥居回廊とは違う凄さがある。
「何で鳥居が二つ？」
並立してた。鳥居が俺たちのように隣同士に並んでる。初めて見た。
――行ってみましょう。
俺の二歩ほど前で首を傾げて誘ってくる。さらりと聞いた事もない綺麗な音を奏でて垂れる髪に惹かれるように俺は琉璃に並んだ。
「すげぇ。こんな鳥居あるんだ・・・・・」
縦に連なる鳥居は何度か見たし、珍しいものじゃない。でも横に並ぶのはどっちを潜ればいいんだ？
「え？　琉璃？」
並立鳥居を前にどっちから入ろうか悩んでる俺を見かねたように、琉璃が俺の腕を軽く掴んで誘う。写真を撮ることも忘れ、俺は琉璃と左の鳥居を潜った。
「中は狭いね」
――でも、宝殿も鳥居も珍しいんですよ。
鳥居の迫力とは裏腹に、神社自体は狭くて小さい。開放感から急な圧迫感に振り返る。鳥居のすぐ横にある手水舎から流れる水が清涼音が神社外に流れていた用水路の水音とハーモニーを奏でて、幾分か涼しく思えた。
――それに隠れた人気スポットなんです。全国にここしかないから、その不思議さに惹かれてしまうんです。
不思議さに惹かれてか。日本人が好きそうな感じだな。俺も否定出来ないのは、きっと初めの不思議な表情からだったからなんだろうし。琉璃が手水舎で手を洗う横で、俺は鳥居を全体像と接近像と撮影してから同じように手を洗った。水が少しぬるくてちょっとがっかりした。

「ご利益は縁結び？」
俺たち以外に一組のカップルが車で来てた。小さな社務所の看板のある窓際で販売されてるお守りは縁結びが大半だった。きっとこの並立鳥居にあやかろうってことなんだろう。琉璃が頷いて笑った。この鳥居は夫婦鳥居ってことだろうな。
「人間って何でも単純に捉えるよなぁ」
あやかることが大好きで、流されやすい日本人の体質。幸せそうに笑い合って写真を撮ってるカップルを見てると、正直ピエロに見えてしまった。俺は踊らされないぞと小さく誓いながら、琉璃と一緒に参拝した。この縁も無駄じゃないことを感謝と祈願して。
――――加納さんは？
琉璃が先に参拝を終えて、俺が顔を上げたと同時にクロッキーブックを見せてきた。
「俺は、どうだろ？　そんな時もあるし、そうじゃないこともあるよ」
流行ってるものを見ると興味は湧く。でも、それが必要かと吟味するとそうじゃないことが多い。その時に判断するのは、気持ち次第。何だかんだ思いながらも俺は結局、観客の一人でしかない。主役になれないタイプだな。カメラマン志望だって言うのに、その傍観ぶりには自分でも飽き飽きする。今じゃその志望も一つの夢でしかないかもしれないけど。
「琉璃はそうじゃないっぽいね。中心にいる主演って感じ」
俺の言葉に琉璃は、期待が外れたように笑った。照れなんかなくて、ただの愛想。そう見えた。褒めたつもりなんだけど、失敗したかな？
――――みんな、主役です。脇役もお客さんもいません。
観客のいない舞台で演じる一人劇。それとは違うだろうけど、琉璃の言ってる事は。でも生活においては間違いじゃないんだろうけど、賛同はしかねた。
「人それぞれなんだろうね。俺は琉璃は凄いと思うよ」

俺の言葉に黒目を瞬かせて、しばし時が往く。やがて琉璃は俺に背を向けて神社の階段にしゃがみこんだ。首を少し傾けるとやたらと書き込んでいる姿が映る。小さくて丸い背中。思わず後から抱きしめたくなるような体勢が悩ましさを生む。逃げるように境内から外との境界を発生させる鳥居の後姿を撮影した。ちょうどカップルが俺たちが入ってきた鳥居の横の鳥居を潜った時で、観光用写真が撮れた。

――私はすごくなんかないです。人はみんな主役です。人付き合いの上手な人もいれば、人を楽しませる人、人を喜ばせる人、みんな一人一人の人です。でも、私はそうじゃないです。みんなには入れません。私は一人じゃないとダメなんです。

長い文章。ちょっとだけ待った。今までの当たり障りのない返しとは違って、少しだけ距離が縮まったように勝手に思える琉璃の素顔。周りを持ち上げる代わりに自分を卑下する。素の言葉なのに、俺のイメージとのギャップに信憑性を感じられなかった。自分が持って生まれたものを生かすことこそが特権であり、魅力なのに。人のことは言えないけどさ。

「そうかな？　琉璃はみんなに愛されてると思うけど？」

十分なくらい、俺には眩しいくらいに琉璃は可愛がられてた。それを自ら否定するようなことは、自分の価値を捨てるだけじゃない。囲んでくれる人を引き離すことになる。それはしちゃいけないだろ。これも俺が言えた口じゃないけど。でも、俺が分かるからこんな子にそうなって欲しくないと思うんだ。

――人であるなら、喜べるかもしれません。

それは冗談のようで、そうは見せない表情にそっか、とつい流れに同調するように言ってしまった。

「でも、人だろうと動物だろうと、表現する力と感情を見せる力は持ってる。だから、同じじゃないかな？　琉璃の笑顔は実際に周りを明るくしてるじゃん」

逃げてきた俺にも見せてくれる笑顔は、俺の気持ちと欺瞞を緩衝

してくれた。それは認めるしかない、事実。
――――この町の人が皆さん優しくて、良い人たちなんです。
自分のことだけじゃなくて、ちゃんと理解してるのか。その上でしっかりとその気持ちを受け取って、同じだけ返そうと頑張って笑顔でいる。そんな感じなんだろう。与えてくれるから返す。それは公正であって、対等でいようとする努力。甘えるだけじゃない辺り、琉璃は俺とは違うんだな。
「琉璃には敵わないな」
ちゃんと人のことを見てる。人に癒しを与えながらもその戻ってくる笑みにある感情を読み取ってる。人のことをよく見てる子なんだな。そこは違うな、俺とはやっぱり。
瞬間、琉璃は驚いたような目で俺を見る。どうして俺をそんな目で見るのかが分からない。大そうなことを言った覚えはないんだけど。
「どうかした？　・・・・・・あぁ」
バロメーターのように首筋から顔がほんのりと赤くなっていく。その表情は驚きと同時に、写真に撮らせて欲しいと頼んだ時のような照れた可愛い顔。それを見て、数秒前の過去を回想して至った。思い返さなければ良かったと、後悔が浮かんできて急に恥ずかしさが俺たちをポンっと包んだ。
この町の人は優しくて良い人ばかり。でも、俺はそんな町の人間よりも琉璃が優しくて良い。つまりは、どんなに町の人間が良くても・・・・・・。
――――琉璃には、誰も敵わない。
「そう言う意味で言ったわけじゃないんだ」
我ながら言葉足らずの恥ずかしい告白かよ。琉璃が勘違いしてもしょうがないじゃないか。全く、こんな神社の中で口走るなら、もっと言葉があっただろうに。恥ずかしくて、お互いに顔を逸らせた。

――そろそろ、出ますか？
「そうだね。さっきのことはそう言う意味じゃないから気にしないで」
再び赤らんだ琉璃の顔が俺の横を通り過ぎる。神聖で静かな境内に香る優しい匂いと軽やかでしなやかな足音が俺を誘う天音の歌声のように。
「面白い神社だよなぁ」
鳥居を潜って外から見る。背後には小さな山があって社自体は本当に小民家みたいだ。
――この鳥居は左の鳥居から入って、右から出ると結ばれるんですよ。
琉璃が見せる文字を見て振り返る。少しだけ勢いが付くくらいに。
今俺たちはどっちから出たっけ？　とも考えながら。

八枚目．涙

振り返った先にある鳥居を見て、瞬間的に嬉しいと思ってしまった。右の鳥居から出ていた。そんな気もない琉璃の笑顔が、今だけは何となく嬉しかった。全国でも唯一の並立鳥居だろう。そこで願いを叶えてくれそうな、幸せそうに寄り添う鳥居を見上げると、そうなっても良いな、なんて言葉には出来ない思いをかすかに抱いた。

――――少し離れた所には、西郷さんの宿泊跡とかもあるんですよ。

「西郷隆盛？　そうなんだ。意外と観光名所ってあるんだ」

のどかで平和な田舎。それでもそう言う観光名所があるのは驚き。珍しいものが多いのに、観光客が少ないのは勿体ないな。

――――行ってみますか？

「いや、良いよ。観光写真ばかりをとってもしょうがないからね」

そう。俺は風景写真を撮りにきたわけじゃない。撮りたいのはずっと隣で歩調を揃えてゆっくりと歩く君だけだ。そう言ってしまいそうになるけど、恥ずかしがられて空気が乱れる。

「海に行く？」

商店街を抜けて琉璃がどうしようかと交差点で悩んでいる。俺としては鳥居だけで十分面白いものが見られたから満足してる。悩みつつも視線が海へ向いてることが多い。やっぱり親父さんか海かが気になるんだろう。

「行こう」

――――はいっ。

悩んでいるなら、代わりに決断してあげよう。俺のことには気を使ってもらう必要はない。だから、ここは年上として、少しだけ引っ張ってやりたくなった。途端に一番の笑顔。あどけない純真な笑みには本当に敵わない。あの意味で。

「夏休みなんだよなぁ」

颯爽とこの暑い中を男の子の小さな自転車が背中を追い越してい

く。その自転車をまた小さな女の子が自転車で追いかけていく。会話を風にそよがせながら、自由にその足は進んでいた。
「子供ってほんと元気だな」
徒歩よりも早い自転車。少しだけ風を背中から感じて、平穏も感じた。
———仲良さそうでした。
琉璃も楽しそうに角を曲がって行った子供たちに微笑んでいた。夏休みの静かで暑い日ざしが目の奥に染みた。
———釣り人さんが今日は少ないですね。
道路を横断してから、堤防に上がる。日影のない真白に見えるコンクリートの一面を歩幅を合わせて笑い合いながら歩く。気分が良い。
「平日だし、そんなもんじゃないの？」
両側に揺れる波は静かでかすかな波音が取り巻く。釣り人も三人ほどが散らばってさおを垂らしている。足元のバケツには小鯵が数匹と名前の知らない赤い小魚が泳いでた。
「ここ、好きだよね？」
赤い灯台の隣。堤防の先端。対岸の漁港はすぐそこなのに、そこにいくには遠回りをしなければ海に阻まれる。琉璃のことだ。漁港にいると仕事の邪魔になるから、一番近くでいられるここが好きなんだろうな。
———海は大好きです。お父さんも大好きです。ずっと大好きです。
照れ隠しをすることもなく、大好きなものをそこに文字として残した。幸せな笑み。微笑み。本当なんだろうな。少し親父さんに嫉妬するのと同時に、羨望もあった。琉璃に対して。家族に対して。その笑顔に対して。
「ここからじゃ、親父さんの姿は見えないね」
生簀のあった入り江は、山裾で隠れて見えない。開門岳も今日は霞んで見えない。こんなに良い天気なのに、見えないものが多い。

見えるものは少ない。琉璃はいったいどこを見ているのか、視線を辿って顔を上げた。
———海はどこまでも繋がってます。
そう返ってくる。どこまでも繋がってるから、ここにいても親父さんがいることは分かる。ってことか？　そんなに大好きってのも、琉璃だからこそ気持ち悪さを感じることがない。眩しすぎて上辺で頷くしかない。
「琉璃はさ、友達と遊びにいったりしないの？」
俺に脳裏に焼きついたあの表情が向けられる。分からない答えじゃない。でも、家族にべったりな年頃でもないだろう。もう少しその思いを別に向けても良いと思う。
「えっと、何かな？」
白い手が隣に座る俺のジーンズの上に乗せられる。温もりまでは伝わってこない。何をその瞳は思うのか、俺の視線を外すことを許さない。
———今、遊んでます。
堤防から投げ出した足を揺らしながら、腿に置いたノートにそう書いた。
「それは、俺を友達と？」
にこ。それだけで十分な笑みが笑う。俺としては民宿の娘と客という壁を感じてたんだけど、そうじゃないのか。いつの間にか友達と格上げされてた。
「そっか。でもちょっと退屈じゃない？」
遊んでると言うよりも、黄昏てるような気分。神社を出てからもカメラを手に取ってない。ロケハンにしても大した写真の一枚も撮れてない。やる気もなくなってきたかもしれない。焦燥もあるのに。
———楽しくないですか？　私は楽しいですよ。
琉璃がクロッキーブックを俺と琉璃の間に置いてから立ち上がる。出会った時のように俺は琉璃を見上げる。一陣の風が琉璃の髪を包み込む。あの時と違うのは、琉璃が全身に潮風を満たすように両手

を大きく広げ、大きく吸い込んでいた。だから無意識だった。俺のことを気にすることもなく、大好きな海を見つめるその姿に向かって余計なものを視界から除外した。その一つだけで良い。その一つしかいらない。海も、山も、空も、建物も、灯台も全てが邪魔だった。

「あ、ごめん。つい・・・・・・」

たった一つのシャッター音が、琉璃の笑顔を奪った。聖なるものを犯した気分と同時についに収めることの出来た喜びが内心では湧いてた。

―――恥ずかしいです。私なんかを撮っても面白くありません。

恥ずかしそうな弱い叱咤。愛しさしか湧かない。漠然ではあった。この娘を自分のものにしたいと言う衝動。発生したものはもう消えない。

「確かに面白くないかもね」

だから琉璃の言葉に頷いた。プレビュー画面に表示される一枚の写真。謳歌。そう名付けようか。それとも美姫。どっちかだろうな。

「俺も面白いものを撮りたいわけじゃない」

謙遜で言ったことなんだろう。けど、その謙遜は必要はない。俺が求めるものじゃないから。琉璃の表情は傷ついたのが良く分かるくらいに笑顔がなくなった。やっと素顔だとはっきり分かる顔。そうだろうなと笑った。笑顔の似合う日差しも、漂う小波も、ボンボンボンと振動を感じさせる漁船の音とくせになる匂いも、一気に忘れていたものが俺の世界に舞い戻った。誤解した物言いでも、琉璃の素顔が見れた分だけ悪くはない。

「俺が撮りたいのは、琉璃、君だ。面白いものじゃない。楽しいものじゃない。悲しいものでもない。撮りたいのは前にも言った通り、琉璃だよ」

驚きで時間が止まった。湧いてくる恥ずかしさは告白をした後も同じ。暑さだけじゃない熱に汗がフワッと滲む。同時に琉璃の顔が固まりながら染まる。夏に降った淡雪が恋をしたように赤く染まる。

「やっぱりダメかな？　色々教えてもらったけど、確信したのは琉璃を撮りたいってことだけなんだ」
自分で言ってて恥ずかしいのは承知。肌に感じる日光の痛みが暑さで暑いのかどうかを惑わせる。
「笑顔じゃなくても良い。親父さんにも言われたんだ。琉璃の写真がないって。残して欲しいみたいだったよ」
家族を想う琉璃になら、今の言葉は切り札だろう。卑怯かもしれない。親父さんを餌にして俺の欲求を満たそうとする。それでも釣りたい魚は人魚。罪を認識しても、人は追ってしまう。俺は竿をレンズに持ち替えて。
しばらくの沈黙に期待と確信の目を向ける。友達なのに、その権限を利用している俺は最低かもな。それでも撮りたいんだ。琉璃を。
「出来れば、色々な場所で、琉璃の感じるものを見たい。それを収め――・・・・・・」
――――ごめん、なさい。
言葉に詰まった。たった一行の文字列。その一行に全てが詰まっていた。
「あ、えっと、いや、ごめん」
真白に照り付けられる堤防が湿った。困惑と戸惑いに言葉がまともに喉を遡らない。
「そこまで嫌だなんて思ってなくて、その、ごめん」
スッ、サワっと雫が幾つもこぼれた。灰色の堤防が黒く染まっては蒸発し、色を取り戻す。何て柔らかい涙なんだ。心が痛む。声のない涙。晴天に降る雨のように、琉璃が泣いた。静かに。小波に掻き消されてしまう涙で、顔を少女のようにくしゃくしゃにしながら。まさかそこまで嫌だとは思いもしなかった。泣き叫ぶ方がいくらもマシだった。泣いているのに声がない。どうしてそこまでして声を出さない。嗚咽がないから琉璃にどうすればいいのかが分からなかった。真白に染まる世界の波が俺を吹き飛ばしたようだった。

九枚目．親父さん

「あの、琉璃は・・・・・・？」
「ぐっすり寝てる。目は腫れてるけどな」
背中越しに襖が静かに閉じられた。遮断された壁。薄くて勢いをつけなくても破れるくらいの壁なのに、遠い。
「すみませんでした」
色もなく飛び交うテレビからの声。酷い罪悪感が親父さんの前では加速する。
「謝ることじゃぁ、ねぇな」
並ぶのは夕食。昨日に引き続いて今日もお客としては十分すぎるご馳走。このまま滞在中はこんな食事なんだろうか。それは飽きてくるんだけど。今はそんなことを気にしてる場合じゃなかった。
「兄ちゃんよ、この二日でようやるもんだな」
「すみません」
親父さんの言葉に箸が進まない。
「だから、謝るな。むしろ俺はびっくりしてんだよ」
十品目ほど並ぶ俺の食事とは違って、親父さんは芋焼酎の匂いを漂わせて何かの味酬干だけ。足りるのかその体を見ていて思うんだけど。
「兄ちゃんよ、天吹（てんぶく）って知ってるか？」
「尺八みたいな楽器、ですか？」
鹿児島にしかない笛の種類。知ってるのはそれくらい。音色を聞いたこともないし、どんなものなのかも見たことはない。何でか知ってた。
「薩摩国にだけ継承された、奏者が己自身で作る分しかない伝統のものだ。全国探しても鹿児島にしかない。でも、それじゃねぇんだ」
この暑さでもお湯割で焼酎を煽り、声を漏らす。
「ここにはな、言い伝えっつうのか、漁師の間に知られてる話があ

る」
　それは知らないな。漁師じゃないし、楽器のほうすらもどこで知ったのかも覚えてないくらいに記憶にほとんどない。県民でも知らないだろうし。
「海の守り神、みたいなもんだ。北の海に比べりゃ穏やかなもんだが、それでも荒れる。これからの時期は特にだ」
「台風は風物詩ですからね」
　対面して夕食を摂るには琉璃とは違って緊張する。娘を泣かせたと言う責も罰と感じているから。
「荒れる海にいる女神が、天吹だ。天吹は船の転覆から俺たち漁師を守ってくれる。この辺りにある神社は漁師にとっちゃ、天吹を祭ってるのも同じでな」
「天吹に転覆ですか。シャレみたいですね」
「愛嬌だ。天から吹く女神の願いを化身である人魚が受け取って助けてくれるってな。だから俺たち漁師は漁の前に祈ってから出かけるもんだ」
　もしかしたら、目覚めた時に聞こえた音は、その時の拍子だったのか？
「この町には、人魚がいるって思ったら、どうだ？」
　それは俺に対して何を答えさせようと言う質問なんだろう。愛嬌で作られた伝説を信じて漁に出る。神に祈ってから漁に出ると言うのは理解出来ないわけじゃない。人魚がいる、か。信仰心はないってのに、その言葉に琉璃の顔が浮かんでしまった。
「安心して漁に出れますね。いるんであれば、願うと思いますよ」
　良い写真が撮れるなら、俺も祈るかもしれない。
「人魚は所詮は人とはまがうものだ。薬や食ってたなんて話もあるくらいだからな」
　漁師がそんなことを言っていいのか？　崇める神への冒涜も同じじゃないか。それに幻想の生物だ。そう言う話は現代じゃ現実味の欠片もない。

「だからこそ、人も人魚も壁があるもんだ。人はそれを犯すように、人魚もまた同じことをする」
話が良く分からない。所詮は人と動物は一線を越えて同等になることはないってことか？
「実は俺もな、一度あるんだよ」
「何がですか？」
「天吹だ。里美を亡くした年の八月だったな。台風の時に海に落ちちまったんだ」
親父さんが襖の向こうに視線を向ける。奥さんの仏壇か何かを追っているのか、琉璃のことを気に掛けているのか、よく分からない憔悴したような顔で。
「信じなくても良いが、実際に俺は高波に落ちた。でも、ここにいる。これは天吹って思えねぇか？　その時の俺は、まだ一人だったんだ。誰の助けもねぇのに、俺は生きてるんだ」
その場を知らないから何とも言えない。台風で時化る海を直で見たこともないし、自力で助かったかもしれない。どうしてか、俺は疑いから掛かってしまう。
「琉璃は可愛い娘だ。里美が死んでからあいつの為に生きてきた。好かれることは嫌なわけがねぇ。でもな、同時にやっぱ悲しいもんがある」
今朝も聞いた覚えがある。酔いであやふやだけど、友達になって欲しいと頼まれた時の話のループ。
「親としてはな、笑顔はつまらん」
「親の言うことなんですか？　それって」
笑顔でいることは悪いことじゃない。笑顔でいられない方が家族としてはつまらないと思う。だから俺の家庭は空気が悪かった。目が覚めて携帯を見る度に愛紀のメールは必ず入ってくる。他愛ない内容だってのに、俺のことを気にしているのが隠れてるのが良く分かって、家に帰る気は全く湧いてこなかった。鬱陶しさばかりだった。

「逆だ。兄ちゃんは分かってねぇな。まぁ、若いもんにゃ親心ってのは分からんもんだろうな。俺もそうだったしよ」
乾いた笑いで笑われる。その笑いとは裏腹に、胸に小さな棘の痛みが俺を些細に追い込んだ。ここに居ることは逃避。課題の消費のためと言う嘘ではない嘘を混ぜて、俺は家族から逃げてここにいる。それを親父さんの笑いは髣髴とさせ、俺は同じように笑うことすら出来なかった。
「琉璃は家でも笑ってる。俺はな、あいつの泣き顔も怒り顔も膨れ顔も何も見たことがねぇ。十七年間、一度もだ。笑うことしかしねぇんだよ。俺の前ではな」
それはないだろうと否定しようにも、俺もあの泣き顔と不思議そうな顔も垣間見せただけで、それが素かどうかは判断出来ない。笑顔がよく似合う子。その印象が大半。
「琉璃が泣いたってことは、それだけ兄ちゃんに心を開いたってこった。俺の十七年を二日で超えられちまったか」
親父さんは魚を湯飲みに静めて泳がせた。
「なぁに、謝ることはない。琉璃にそれだけ言葉が届くなんざ、この町の人間じゃ出来ることじゃねぇ」
つい雰囲気で頭を下げそうになるのを、親父さんが先手を打った。返事に困る俺へのフォローのようにテレビから地元ニュースが流れ始めた。大阪にいる時よりも静かな内容。親父さんが俺を見た。酒に酔いたくても酔えないような目で。刺身に伸ばした手が彷徨った。
「琉璃のことを頼む。あいつは友達を作れねぇ。兄ちゃんにも客として知らない人間だからこそ、ああ接したはずだ。でも、兄ちゃんは泣かせた。あいつにはもっと知って欲しい。焦がれる海から離してやって欲しい」
親父さんの言葉に、口が開いたままだと気付けなかった。海が大好きだと、親父さんが大好きだと、数時間前に聞いたばかりなのに、その対象の親父さんはそれを引き離して欲しいと俺に頼む。俺は何をすれば良いんだか、分からない。

「琉璃は、今日、親父さんと海が大好きだと言ってました。だから琉璃はいつもあそこで待ってるんですよね？」
酒に浸した魚をそのまま口に運ぶ。見てるだけでも酔いそうな匂いが仄かに漂う。天気予報が聞こえてくると親父さんは俺の話を聞きながらも視線は俺を見ていなかった。
「だからだ。俺はあいつには海から離れて欲しいと思ってんだ」
「好きなものなのにですか？」
「そうだ。もう失うのは御免だ。だから琉璃を海から離してくれ。俺には琉璃の仮面を剥いでやることが出来ん。あいつは遠すぎる」
暮れるものに酒を呼ぶ。聞きたいけど、聞くなと視線を合わせてもくれない。何があったのか、事情を知らないと行動が空回りするばかりなんだけどな。人のことをどうこうする前に俺自身のことをどうこうしないといけないってのに。
「台風か。厄介だな」
天気予報から聞こえてくるのは台風が発生したと言うこと。まだ規模は小さい。それでも親父さんは俺に頼んだ時と同じように真剣にテレビを見ていた。でも何でかな。親父さんは琉璃のことが大好きだと思ってるはずなのに、悔しそうと言うか悲しそうにしか見えない。
「一つだけ。琉璃は本当の娘さん、ですか？」
どんな今までよりも、その瞬間的な動作は威圧的だった。
「知ってどうするつもりだ、兄ちゃんよ」
「どうするわけ、じゃないですけど、奥さんがなくなってから琉璃は生まれたんじゃないんですか？」
他に親父さんの奥さんらしい人物の欠片はない。そこら辺は家庭の事情があるんだろうけど、頼まれたことを成すにはもう少し情報がないと、今のままだと俺は琉璃に嫌われただろう。あの後、一言も口を聞いてくれないし、顔も合わせてもらえなかった。それが一番きつい。知ってる人間が親父さんを除いて一人しかいない。どうすれば良いのか分からないっての。

俺は出来た人間じゃない。ただ写真を撮りに来ただけだ。解決しないといけない問題もある。
「・・・・・・あいつは、俺の娘だ」
それが答えか。
「琉璃は親父さんの娘・・・・・・」
親父さんは嘘のつけない良い人だとすぐに分かった。空白の企画書を見てると、親父さんも琉璃も真白に映る。俺の頭も真白だ。嘘をつくことはもう慣れた。だから他人がつく嘘は何となく分かる。だから親父さんの言葉は嘘。でも真実。嘘が嘘じゃなくなるのは、嘘の中に真実を隠すこと。そんな話をいつ聞いたのか、覚えてる。だから親父さんは嘘をついている。下手な嘘を。
「仲が悪いわけじゃないし、意味分かんねぇよ」
いつの間にか敷かれていた布団。皺一つない真白なもの。少しだけ良い匂いがした。携帯に残る愛紀からのメール。何してるの？　良い写真撮れた？　お母さん気にしてるよ？　台風来そうだよとか気の抜ける内容。
「天吹。女神の願いを受けて助けるのは人魚。女神は願いそのものって感じだけどな」
それか帰りを待つ家族か何か。
「人魚、ねぇ」
立ち上げたＰＣに琉璃の一枚だけの写真を転送して、見る。羽ばたくように両手を広げ、笑ってる顔。やっと撮れたと思ったはずなのに、感激も満足もない。まだ二日目だってのに、いきなり重い。何で親父さんも琉璃も俺をすぐに受け入れたんだか。引き離して欲しい。ずっと大好き。相反する二つの意見をどうしろってんだよ。
「人の願いと人魚の願いってか？　んなわけねぇか」
愛紀にメールを送る。台風来たら帰れないかもな、とだけ。嫌で逃げ出してきたはずの家なのに、そんな気楽に俺を気遣うメールが疲れを呼んだ。

「台風、来そうですか？」
朝食時、今日は朝陽の暑さで目が覚めた。
「兄ちゃんの帰る頃に当たるかもなぁ」
予約は一週間。まだ動きが遅いから予想進路も大きい円でしかない。
「ま、そん時は延泊すりゃいい。それくらいはサービスだ」
食卓の間は俺と親父さんだけ。まだ琉璃の顔を見てない。それでも朝食は琉璃が支度したそうだ。良かったと言う安堵が生まれた。もしかしたらただのお客に対するサービスかもしれないけど。
「それで、あの琉璃は？」
「心配するな。照れてるだけだ。素直じゃない娘だからな」
あなたもですよ、とは言えなかった。笑顔を取り戻すまでは顔を合わせてくれなさそうだから、今日はどうしたものか。
「兄ちゃん、今日暇か？　暇なら俺の仕事を手伝わねぇか？」
見透かされたタイミングで言われる。
「琉璃もすぐには戻らん。することなくなるだろ？　今日は俺を手伝え」
許可を俺に求めることから命令に変わった。
「良いですよ。あまり役に立てませんけど」
琉璃が会いたくないと態度で示されてる以上、どうしようもない。レンズを向けたところでまた泣かれるのは心が痛い。あの泣き顔はもう見たくない。心の底からそう思った。琉璃の本性だとしても、やっぱり俺が求めるものは笑顔の琉璃でしかない。
「勝手だな、俺」
笑顔じゃなくてもいいとか良いながら、否定してる。やっぱり俺は嘘で固められた人間だ。
「今日は何をすれば？」
少し波が高い気がする。親父さんの操舵技術には感謝したいところ。でも、それでも揺れる。速度が速ければ揺れは減る。でも、今度はその速度に酔う。小さい船はどうしても慣れない。

「餌を撒いてもらおうか。それだ」
妙な機械の傍に、生臭い赤身や断末魔の表情のままの断頭が混じってる。叫びが聞こえてくる。食物連鎖にあっても、美味そうとは思えない。
「親父さん、これは？」
「投餌機だ。本当は手撒きが良いんだけどな、数が数だけに手間と時間が掛かる。そこのタンクに入れてスイッチを入れれば勝手に撒く」
それは、俺がやらなくてもいい仕事じゃないのか？　むしろ一人で出来そうな気が素人にも分かるんだけど。二十キロほどの餌をタンクに詰め込んで、生簀の隣に横付けした漁船から、親父さんの指示に従ってスイッチを入れる。発電機みたいな懐かしさのあるエンジン音が聞こえたと思ったら、急に何かが押し出される窮屈な音が聞こえたと思った瞬間だった。
「すげぇっ、噴水みたいだな」
伸びた管の先からタンクに詰めた餌が放物線を描いて生簀に喧騒をもたらす。餌とそれに群がる魚の臭いが立ち込めるのに、その放物線は格好良く見えた。面白い。餌が空を飛び、獲物が波を這う。カメラを向ける手が軽く笑ってた。
「兄ちゃん、こっちに撒いてくれ」
生簀の周りを歩きながら親父さんが車をバックさせるように手招く。管を親父さんの方に向ける。配給に群がる魚が親父さんの元へ移動する。魚使いにでもなった感じで良い気がした。
「兄ちゃん、どうだ？」
しばらく雑用を手伝っていると、親父さんが休憩と麦茶を注いでくれた。その問いかけの指す内容が良く分からない。
「琉璃だ。ちったぁ撮れたりしたか？」
そういうことか。
「いえ、実は全く。やっぱり写真は嫌いみたいで」
ここに来たときよりも船が揺れる。台風が発生した影響なのかは

分からないけど、安定しない足元ほど落ち着かないものはないかもしれない。
「あの馬鹿は……。すまねぇな、兄ちゃん。せっかくいい機会だと思ったんだけどよ」
「人それぞれですから」
それに一枚だけデータの中に収められたあの写真がある。決して笑顔じゃないけど、瑠璃のかけがえのない一枚だと、親父さんには見せないようにプレビューして、もう一回見た。
「なんでぇ、そいつは？」
「あ、いえ。ちょっと調整してただけですよ」
どうしてだろう。この写真は親父さんには見せられない。そう思った。いや、少し違う。見せたくなかったんだ。芸術として撮影した、瑠璃には無断というあってはならない撮影をしてしまったが、その罪悪感から来るものじゃなく、もっと別の、うまく言葉に出来ない感情から、親父さんにはこの写真のことを口にすることは出来なかった。
「あいつもな、写真が嫌いだったんだ」
生簀に目をやりながら親父さんが不意にそう言った。僕にはそれがどう言うことなのかすぐには思い当たらなかった。
「別にあいつと重ねるつもりじゃねぇんだけどよ。やっぱ今となっちゃ、写真もねぇってのはたまに辛いもんがあんだよ」
「……奥さんのこと、ですか？」
ああ、と短い返事が波の間に消えていく。今日も日差しが暑い日だと、親父さんの視線を追った波にたゆたう銀の光に額から汗が流れた。
「たまに思い出すとな、ついアルバムを開いちまうんだ。でもな、あいつとの写真なんざ、ほとんどねぇんだ」
奥さんを思い出しても、その形がアルバムの中に残っていない。経験がないこととは言え、写真を学んでいる以上理解出来ないことじゃない。

「だからよ、こいつぁ俺の我が儘なんだろうけどよ、瑠璃とは一枚でも良いんだ。形の想いを残してぇんだ」
何も言い返す言葉がなかった。親父さんは小さく息を吐きながら水筒から麦茶を注ぐと一気にのどに流し込んだ。黒く日焼けした太い首から出るのど仏が数回動いた。
「人間よぉ、思い出があれば良い奴もいんだろうけどよ、俺ぁやっぱ振り返る形が欲しいんだ」
「残せる思い出、ですか」
搾り出した言葉。写真をそんな気持ちで撮影したことがあっただろうか？　聞かれてもいないのに、自問が俺の中で消えなかった。そうして俺は逃げているんだな、と親父さんの我が儘だと言う言葉が、俺を逃避の道へ加速させて突きつけてきたように思ってしまった。
「まぁ兄ちゃんに言ってもしょーがねぇのは分かってるけどよ」
力のない、豪快の欠片もない親父さんの笑いは船に寄せる小波よりも小さかった。
「お二人で撮ってみませんか？」
「ん？　俺と兄ちゃんでか？」
ほとんど無意識のまま、上面だけを装って出てくる嘘のように俺が聞いた言葉を、親父さんはボケで返してきた。いや、ボケだよな？
「瑠璃と親父さんの二人で、ですよ」
苦笑すると親父さんは、おぉ、と納得したような思い出したような、とにかくさっきのはボケじゃなかったんだと苦笑しか出ない答えをしてくれた。
「俺と瑠璃がか？　何言ってんだよ、んなもん無理に決まってんだろ」
既に決められた、出された答えのように親父さんは気持ちよく一刀した。俺にはそれが甚だ理解出来なかった。
「無理かどうかなんて……」
「無理だ」

遮られた。なかなかに真剣な表情と低い声で。穏やかな波がひときわ大きく船体を揺らせた。俺の心に受けた一瞬の衝撃のように。

「いや、あの……」

「俺があいつといられはしねぇんだよ。俺もあいつにゃ幸せにんれるんならなってもらいてぇ。それは何だ、あれだ。親心っつーもんだ。でもな、俺からあいつにゃ届きはしねぇんだ」

覆しようのない絶対的な答え。その印象が絶対だった。あれだけ俺には瑠璃を頼むと言いつつ、自分では傍観者のように関わろうとしない。見守りはしているものの、親父さんのその態度の不振さには首を傾げるしか出来ない。

十枚目．伝承（前書き）

長らくの更新で、正直ストーリーを覚えていなくて、続編を書いている最中に、意外と作品は進んでいるのに、さらに無駄な話を折り込みそうになりました（笑

ちゃんと、プロットを見て、ようやく中盤を越えるようにしておきましたので、これからはラストへ向けて少しずつ、更新していきます。

十枚目．伝承

「じゃ戻るぞ」
「はい」
そのやり取りをしてから十数分。陸続きを波を掻き分けていた漁船が、人工物を捉えた。
「琉璃……」
やはりいた。赤い灯台の端で、一人でクロッキーブックを抱きながら、この熱射の中で白い肌を隠すことなく髪を靡かせて見ていた。親父さんは琉璃のことを見ることなく、係留場に船を寄せるために舵を切っていた。俺はそこに琉璃がいることに安堵しながらも、燻るものも同時に胸の中で渦巻いていた。
「兄ちゃんよ、あとはしばらくすることもねぇ。あいつんとこ行ってやってくれ」
暫く感じていたエンジンの振動が消え、体が妙な浮揚感を感じながら船を下りる。親父さんは漁師の仕事があるようだが、俺には関わることは出来ない。素直に従った。
暑さでおかしくなりそうな真白のアスファルトを歩いていく。対面に琉璃も歩いてきていた。俺とは違って、汗の一つも見せない涼やかな表情で。
———おかえりなさい。
予め用意してたのか。傍に来ると広げるクロッキーブックには可愛い絵と一緒にあった。ちょっと抱きしめたくなるくらいの笑顔だ。
「ずっとあそこに？」
肯く琉璃の顔は、ほんのりの赤らんでいた。正直、親父さんとも琉璃とも関係性は浅い。だから気になることも聞けないもどかしさが親父さんを見ても、琉璃を見ても消えない。ただ、今だけはそれを考えることも暑さに億劫だった。
———どうしますか？

長くて五分。俺と琉璃は日照りが増すばかりの道路の脇で佇んだ。どうしようかと模索していた俺に、琉璃がクロッキーを見せる。
「どうしようか？」
同じように俺は言葉で返した。正直、何かをしようにも何も浮かばない。
――――少し、歩きませんか？
暑さの中に走るペンの音が、心地良いリズムだった。髪を耳に掛けるその仕草にさえ、色気を感じる。暑さにやられ始めているかもしれない。
「それは良いけど、どこに？」
琉璃は笑うだけで、何も書きはしなかった。一歩ずつ、大地を歩くという感覚を確かめるように琉璃は歩く。無意識に一歩を踏み出さない。歩けるという喜びを噛み締める遅い歩み。隣に並ぶ。ただ、追いかけることよりも、その歩幅に合わせることは難しかった。意識して右足を出し、左足で追い越す。歩くという動作を意識しなければ、琉璃を背中にした。少しだけその歩みの遅さに、暑さが気持ちをかき乱す。押さえ込む。これは俺が感じているだけで、琉璃はやはり楽しげに歩く。邪魔など出来なかった。
「暑くない？」
開口一番は少々文句だったかもしれない。
――――平気です。
琉璃は首を振った。さんさんと煌めく太陽。宝石箱の中に光を当てたような海。綺麗な青とはじゃなく、銀色に輝いている。なのに綺麗だと思えた。双方からの光を集める砂浜。暑かった。眩しくて目が上手く開かない。
「すごいね、琉璃は。俺はちょっとヘロヘロ」
爽やかな暑さは嫌いじゃない。でも、港町の南大隈。湿気がすごいのなんのって。シャツにべったりする自分の汗が気持ち悪い。カメラケースも持っているせいで、肩が特にイラつくくらいにあっつい。

――少し、休憩していきましょう。
俺の手が、引かれた。琉璃は何も言わない。今のは俺の想像。
「琉璃……？」
暑さの中に熱さを感じる。苦く甘いこの世界の全ての時間を懸命に生きているようなまっすぐな少女が、笑顔を見せて、俺の前で今を生きている。眩しくて、前が見えない。ギュッと握るわけじゃなくて、人差し指から薬指の三本をちょんと、気恥ずかしさの中で掴んでくる。
――こっちです。
それしか考えないようにしてるのか、瑠璃が赤い。俺も赤いはず。いや、だって、いきなり手を握られたんだ。こんな田舎で、美少女に。どれだけ人懐っこいんだ、この娘は？　とか、おいおい、俺に気があるんじゃないのか？　とか、告白しても大丈夫じゃない？　とか、抱きしめても良いか？　とか、邪な気持ちが湧かないはずがない。でも、それ以上に、この瞬間を、誰にも見られたくないのに、誰かに写真にしてもらいたいと思った。
「え？　ど、どうしたの？」
若干声のトーンが高いのが分かった。自分の声は自分の思っているものとはまるで異なる。ビデオに写る自分の声を聞いてびっくりしたことは忘れない。たぶん、今の言葉はそれ以上に片に力が入っているかもしれない。追いつけない足取りじゃない。ゆっくりなんだ、琉璃の歩き方って。なのに置いていかれそうに、俺たちの腕は浮いてる。
「あ、あの、琉璃？」
聞きたいことがどっと増えた。どこへ行くのか、この手は何か、説明を求めたい。胸がドキドキしてる。熱い。顔が異常に。
でも、琉璃は振り返ってはくれない。隣に並べばそれだけなんだけど、目を合わせた瞬間に、俺はどうすれば良いのかを考えると、琉璃の揺れる長い後ろ髪姿を見ているほうが良い。すぐに抱きしめて、俺の腕と胸の中に収めてしまえば、どれほど俺は快楽を得られ

るだろう。性的な意味はともかく、抱きしめてしまえば、二度と離せないと思う背中に、正常な認識を保つことは難しかった。

———到着、です。

伸ばした腕は、何を掴めるだろう。形のあるものの中に、全てがあるわけじゃない。でも、その全てを欲して伸ばす腕は、あっけなく空気すらも掴めなく終わってしまう。

「……ここ？」

綺麗なものは汚すのではなく、まずは残すことを創める。学科の講義で習った。汚すこともまた美ではあるが、まずはそれを残すことが始まりなのだ、と。美しいからこそ、羨望と嫉妬を集める。それは美という神の芸術品。崇めるからこその願いであり、羨むからこその努力が形成する。その中で、傍観することは、悲しいのだ。講師の言っていたことはよく分からない。でも、そっと、さも当然のように離れた手は、思わず掴み直そうとする独占欲というものを駆り立てる。

そこは、オスワサァこと、諏訪神社のすぐ傍。背中には田んぼ。エメラルドに輝く柔らかい緑の稲。雲に飛び乗ればふわふわと浮きそうだと、一度は思うように、その稲に飛び込めば、ふよっとした絨毯のような心地良さがあるんじゃないかと思える。———実際にやれば泥んこなのは分かるけど。

「琉璃？」

何故ここなのか。海へ行くのかと思っていた。いや、海から戻ってきたからこそ、陸地を欲する。水は海、陸は山。対極を求めることで、欠落していた何かを埋め合わせる。琉璃がここへ連れてきた意味を探るが、暑さの中で正常な認識など期待するだけ無駄だった。

———ここが涼しいですよ。

クロッキーに記された文字を追う中で、琉璃は神社横に流れる水路を指し、おもむろに靴を脱ぐ。

「え？　いいの？」

衣を剥いだ白い足。頭の先から足の先まで本当に綺麗だ。出来る

ことならその地上の人間の印を剥ぎ取り、ありのままの姿を収めてみたい。男心をくすぐる裸足だったが、無理だという壁を思い出すだけで、カメラを肩にかけたまま、肯く琉璃に続いてみた。
「おぉ」
流れは想像以上に急。小さい水路のようななだらかな流れではなく、足を入れた瞬間に、流れに足が自然と傾斜を増す。さほどの冷たさはないけれど、流れが一つの涼を感じさせる代役を担うように心地良かった。
「良いね、これは」
琉璃が笑う。俺も意味もなく笑ってしまう。背中は暑いのに、足先からは冷たさを増す。そこに琉璃の笑顔があれば、これは立派な風物詩になりえる。そう思ったらカメラを手に抱えていた。
———あの。
不意に琉璃の表情が曇る。分かっている。嫌がるものを撮影することは作品ならない。少なくとも今の俺にとっては。
「大丈夫。自分の足だから」
レンズを水面に向ける。琉璃の足が隣に座る以上、同じ向きでそこにはあって、自分の足を撮るフリをしながら、俺はこっそりと俺と琉璃の足を撮影した。———寄り添い。そう題付けることが似合うような、足だけの写真。
「自分の足を撮るのって変な感じかも」
琉璃はカメラを覗き込むことをせず、俺の言葉にただ、笑顔を浮かべていた。
「それより、どうしようか？」
涼を求め、辿り着いた。じゃあ次は？　ということになる。
———神社に、行ってみますか？
この辺りには娯楽というものがないのだろうか。いや、琉璃が必然的にそれを避け、敢えて人のいない場を求めているのだろうか。ここに来て、琉璃に案内される場所で、目立つ人影がないことに気づいた。町の人たちとの関係は極めて普通。もしくはそれ以上に琉

璃は愛されている。本人も満足げにしている。でも、親父さんはそれに不満を持っている。俺に琉璃を海から引き離してくれと頼んだくらいだ。

踏み込んでいい領域なのか、迷う。

「うーん。一回宿に戻ろうかな。カメラの電池とカードを取り替えないといけないし」

結局俺は、琉璃の誘いを断った。事実としてカメラの画素数が多いほどに電池残量の減りは早く、メモリーも消費する。朝から撮り溜めた親父さんの写真も整理したい気分だった。

「琉璃はどうするの？」

俺が誘いを断っても、琉璃は何も感情を示さない。引き際が潔いと言えばそうだが、無愛想と言う言葉もまた、当てはまりそうなほどに表洋は静かだった。

――少し、お買い物をしていきます。お昼とお夕飯の材料です。

相変わらずの可愛らしい字。女性としての美しさの中に持つ、子供の心。文字は心を写すと聞いたことがある。科学的根拠があるかは分からないが、綺麗な字を書く人は、やはりそれに似合う器量を持っている。俺は俺でそんな器量がない。だから字も汚い。琉璃は愛される器量でもあるんだろう。不快にならない文字がそれを表現している。

「手伝おうか？」

琉璃は首を振って、微笑んだ。

「じゃあ、また後で」

――はい。お気をつけて。

特に会話することもなく、いや、会話と言う時点で成立しているコミュニケーションなのかは分からない。それでも、琉璃は俺が靴を履き、立ち上がるのを待ってから自分の支度を整える。

人気のまばらな商店街で琉璃と別れ、先に宿に戻る。

さほどの距離じゃないのに、着いた頃には額の汗が三度ほど噴いては拭った。

「ほんとに鍵、掛けてないんだな」
誰もいない竜宮荘。鍵は開けられたままで、自分の荷物が少し心配になった。けれどそんな心配は意味もなく、整頓された室内の隅に置かれたまま。
「静かなもんだな」
他に宿泊客の様子はない。家主もその娘もいない。俺の心の悪しき性分が沸き立てば、幾らでも今のうちに金目のものを探せる。しかし、今の俺にはそんなことをするだけの思いはない。閉ざされた襖の向こう、親父さんと琉璃の居住区を除くこともできるのに、琉璃のことで何か分かることがあるかもしれないのに、その襖は進入を拒むように妙な重圧を放っている様な気がして、あけることは出来なかった。いや、したくなかったんだと思う。綺麗なものをまだ残していない。だからこそ、汚してはならない。知ることで汚れてしまうものが世界だ。教わることで知ることと、知る為に単独で探ることで知ると言うものは異なる。俺が考えたものは後者。さすがに出来るわけがなかった。
「親父さんと琉璃……何かあるんだろうな、きっと」
確執とは異なる壁。一見の仲のいい親子にしか見えないのに、親父さんは何が不満で、琉璃は何を隠しているのか。そこへ踏み込む勇気と言うものだろうか、それがいまひとつ湧いてこなかった。
「ん？　愛紀？」
ジーンズのポケットからの振動。最近はマナーモードの振動で着信があったと携帯を取るが、携帯には何の反応もないと言う、脳の勘違いをする若者が多いらしい。今のは間違いなく愛紀からだったけれど。
「どうした？　まだ学校だろ？」
午前の授業をしている辺りのはず。こんな時間に着信とは何事だ？
《お、お兄ぃ？　今日ね、寝坊したの。だから休み》
呑気な声が返ってくる。サボりかよと何かあったのかと考えた俺が馬鹿だった。

「で、何の用だ？」
《うん。あのね、昨日みっきーから聞いたんだけどさ》
この際、みっきーとやらが誰なのかは良いだろう。どうせ友達か何かだろうし。
《そっちにね、伝説があるんだって》
「伝説？」
愛紀にしては珍しくそんな話を持ってくる。
《うん。みっきーがそっちに住んでるからさ、教えてくれたの》
もったいぶるような言い回し。何となく俺が知った伝説のことだろうと、先に応えた。
「天吹だろ？　そんなことはとっくに調べたって」
親父さんの話に聞いた、もとい、気化されただけだけれど、兄としては少々見栄を張ってみたくなったりするものだ。
《天吹？　何それ？》
あれ。予想外の反応が返ってきた。
「違うのか？」
《違うんじゃない？　それは知らないけど、みっきーから聞いたのはね、人魚の伝説だよ》
人魚？
《何かね、諏訪神社……だったかな？　そんな感じの神社に絵があるんだって。すっごく綺麗な絵だよってみっきーが言ってたよ》
人魚の絵、か。色々な地方にある人魚伝説の一つが諏訪神社にもあるのか。一つ情報になったな。
《で、どぉ？》
「何が？」
いきなり聞かれても困るんだけど。
《だからぁ、宿題の足しになりそう？》
「ああ、そう言うことか。まぁ、調べてみないことには何ともな」
夫婦鳥居だけじゃなかったわけか。親父さんの天吹とも関係性がありそうな気がしないでもないし、後で聞いてみるかな。

《そ。うん、じゃあ、それだけだから》
「は？　いちいちそんなことで電話してきたのか？」
てっきり母さんか父さんに様子を聞いてみろとか言われたのかと思った。
《え？　うん。だって写真撮るんでしょ？》
そんな当たり前みたいに言われると、若干プレッシャーがある。
《いい写真を撮るには、やっぱり良いものが良いんでしょ？》
それは確かに一理あるが、必ずしもそうとは言わない。悲惨なものを伝える為の写真、後世へ歴史を紡ぐ写真、なんでもないものを芸術に変える写真。写真と一言に言っても対象は別段何でもいい。そこに伝えるものがあるのなら、それが写真になる。美を追求するのであれば、美しいもの、醜いものを撮ることで美になる。愛紀にしてみれば、俺がそんな写真を撮ると思っているようだ。生憎、そんな写真撮りたくても、対象が拒否を示している以上、残された時間的に企画を変更しないといけない選択が迫っている。
「まぁ、参考の一つにさせてもらうかな」
《じゃあ、順調なの？》
何だその問いは。俺がダメだと思ってるのか、愛紀は。
「まぁまぁってところだな」
返ってくるのは、ふーん。自分から聞いておきながらのその反応は不快にさせるな。
《まぁ順調なら良っか》
「何が？」
《ううん。なんでもない。頑張ってね、お兄ぃ》
よく分からないが、通話を切ろうとしているようで、俺も引きとめるつもりはなかった。
「ああ。お前もちゃんと課外参加しろよ」
《一日だけだもん。どこにも行けなくて引きこもってるだけですよぉだ》
何でそこでむくれるんだか分からないが、やっぱり心配で気にか

けていたらしい。それが親の指示かはともかく、情報をわざわざ聞いてくれたであろう愛紀には、感謝だ。何か土産でも買っていってやるかな。
「金が余れば小遣いにしてやるよ。じゃあな」
《ほんと？　約束だからねっ。あ、それと台風出来てるから、帰り気をつけてね》
「大丈夫だ。台風くらい慣れてる」
それで通話を終わらせる。台風が来れば恐らく延泊を余儀なくされる。親父さんには快諾を受けたが、金銭の問題を考えればそれまでに終わらせたい課題だ。壁に当たっている琉璃の写真を諦めたくはないけど、代替としての企画の用意は必要かもしれない。
「人魚、か」
その言葉の結びつく先、思い浮かぶのは琉璃の笑みだった。
「竜宮とか関係ないか」
浦島太郎じゃあるまいし、ましてや人魚姫でもない。それでも、浮かぶ琉璃の笑顔が頭を離れない。
「ヤバイな。本気になりかけてるぞ、俺」
年下には興味がないと思っていた———だけども、どうやら惹かれ始めているらしい。どうしても琉璃の写真を撮りたい。その思いが愛紀の教えてくれた伝説と勝手に結びついてしまった。
誰もいない室内。自分の部屋に戻り電池とメモリーカードを交換して、外出の支度をする。入れ替わりになると気にされるだろうからと、カバンに入っていた紙に外出する趣旨を記し、居間のテーブルへおく。民宿の居間は、ごく普通の家庭。家財道具に飾られた小物。雑誌や魚拓の中に、ふと目に止まったものがあった。
「なんだ、ちゃんとあるんじゃん」
テレビ台の中にある太い冊子。アルバムだと一目のものが二冊ほど。
「ここにあるってことは、良いよな？」
自己弁護しつつ、琉璃や親父さんが戻ってこないか窓の外を見る。

――――人っ子一人いない。他人の家の過去を写したものは完全なるプライバシーだと理解しているけれど、体は正直な反応を見せた。罪悪感を感じる玉と体が別離する。首を振って今一度様子を確認してから手を伸ばし、一冊を持つ。それなりの重さは写真があることの証。

「古いな、これ」

サイズが一回り小さい写真が整頓されて並ぶ。笑顔ばかりが並ぶ写真。親父さんの豪快で、どこか子供らしい笑顔は見たことがない。

「親父さんってこんな風に笑うんだな」

少しおかしかった。十年以上は昔のことなのは分かる。皺が少なく、褐色も威勢を放っている。漁師仲間との写真が多い。いつも酒か野球観戦の親父さんを見ている俺には、その輝きが嘘のようにも見える。

「……へぇ。やっぱ綺麗だったんだ」

そんな写真の中に時折挟まれている二人きりの写真がある。姫宮夫妻なのだと、これまた一目瞭然だった。亡くなった奥さんはやはり美人だ。琉璃に良く似ている。瓜二つのような美人。よく親父さんがこんな綺麗な人を射止められたもんだと疑問もあるけど、照れた笑みの若かりし親父さんと、満面の笑みの奥さんは、間違いなく幸せだったんだろう。見ていく写真からは当時の笑い声が絶えない様子が赤裸々に語られてくる。

捲るページは、その繰り返し。ただ、写る人間は時を重ねているだけ。今より十分若い頃ではあるんだけれど。

「あれ？」

肌に小さな虫が止まった時のわずかな違和感。不快とまではいかずとも、どこかむず痒さのある感触。それに似たものが首筋を走り、思わず掻く。

「何か、変じゃないか？」

写真の親父さんは大人になっていく。俺の疑問はその隣にいる奥さんだ。

大したことじゃない。女性の美しさはいつになっても追い求めるもの。それを残す為にケアを行ったり、時には写真にすら残す。でも、そんなことじゃない。
「若い……ってより、琉璃？」
奥さんは俺の記憶にある姫宮琉璃という少女に酷似していく。ただ、少しだけ大人びているだけで、その笑顔は琉璃そのものもに見える。親子だからと考えてしまえばそれだけだが、それにしては良く似ている。母親が似ているのか、娘が似ているのかといえば、明らかに後者だ。これは鶏と卵のどちらが先か。そんな問題じゃないんだ。
「どれだけ強い遺伝子なんだ？」
それで片がつくことじゃないけれど、そう思う他はないことだった。
《おぉ、陸揚げは明日以降の様子次第だろ。網はその前でな》
車が止まる音がした。網戸から届く親父さんの声に、慌ててアルバムを戻す。と、同時に玄関が開いて車が走り去った。
「お？　兄ちゃん、戻ってたのか」
「あ、はい。お疲れ様です」
薄れていた罪悪感が強く心臓を叩く。
「琉璃とは一緒じゃねぇのか？」
「買い物に行くそうです。夕食の材料がどうとかで」
元に戻ってるよな？　そんな疑問でテレビ台を見る。微妙にアルバムの位置が変わってるけど、まぁ気づかれる様子もなく、親父さんが洗面所の方に背を向ける。テーブルにおいていた髪を取ったにポケットの中に丸め込んだ。
「おお、そうだ、兄ちゃん」
「はい？」
フェイントかよ。出て行ったと思ったら顔だけ出す親父さんに、嫌な脈動が一回心臓に悪い流れを起こす。
「いい写真、撮れたか？」

指し示すものは愛娘に対することだろう。
「い、いえ。どうも嫌われているようで、なかなか」
「ったくぅ、あの馬鹿が。綺麗に撮ってもらえりゃ文句もねぇだろうによ」
独り言を呟く親父さんが今度こそ足音を遠ざける。意味もなく――十分に意味のある深いため息が自然と漏れた。
「……危なかったぁ」
立ち上がってカメラを肩にかける。昼食の時間まではもう少しある。今のうちに神社に例の話を聞きに行ってみよう。今は少しだけ親父さんと会話を持つことがしんどい。つい口を滑らせて聞いてしまう可能性がないわけじゃないから。
「お？　また出んのか？」
「少し神社の方へ行ってきます」
「そうか。ま、好きにすりゃいいだろ。昼はどうする？」
「おにぎりか何か簡単なものをおいておいてもらえれば」
親父さんが肯いて見送ってくれる。靴を履く背中に妙な威圧感。
「まぁ、よろしく頼むわ」
「え？　あぁ、はい。やれるだけはやってみます」
一瞬、言葉の意味が分からなかった。振り返った瞬間の親父さんを見て、それをようやく思い出し、確証のない誓いを伝える。頑張れとエールのつもりなんだろうけれど、親父さんに背中を叩かれた。ひりひりする痛みに背中を押されて、俺は夏の日差しに真白に染まる世界へ舞い戻っていく。振り返って見える玄関は、やけに暗くて、親父さんの表情は分からないほどだった。それが何故か親父さんの思う何かと、アルバムの違和感を写しているように感じてしまう俺は、自分自身のことも相成ってどうもネガティブな方へ思考が回転しているんだろうな。手でひさしを作りながら、神社へ向かって歩き始める。
決して遠い距離ではないのに、暑さに果てしなく遠く感じる道のり。人気はなく、車も通らない。撮影してみるが、液晶に映る画像

は、題すら付けられないひなびたものだ。
「いつ見ても、不思議と言うか、変と言うか、迫力があるな」
散々撮影した並立鳥居。日差しに朱が一層濃く写りこんでくる。つい三十分ほど前に足を浸からせたせせらぎも、今はただ流れるだけ。色々と田舎暮らしが見直されている昨今、多くの興味は衰退した農業への転身。それは悪いことではない。実りを待つ水田の美しさにはついカメラが向いてしまう。彼岸花の時期にはコントラストが映えることだろうと期待はある。それでも、田舎暮らしを喜んでいるのは、観光客か数日滞在者程度だろう。その土地で暮らしていくことは、都会から来た人間には慣れるまでがきつい。何を求めて田舎へ行くのか。本当の田舎暮らしを望む者は少ないだろう。
誰もいない神社を前に、そんなつまらないことを考えている俺は、自分自身でも哀れだった。
「おや、君は確か……」
鳥居を潜ると少々圧迫感のある狭い神社の威圧感が漂う。その中に一人の男性がいた。しかも俺のことを覚えているよう。
「琉璃ちゃんと一緒に来なかったかい？」
「ええ。今竜宮荘に滞在してまして」
やはり琉璃の名前が出てくる。人の良さそうなおじさん。社務所と書かれている窓の向こうでお守りを並べているのは娘さんだろう。目と鼻が何となく似ている。
竜宮荘と名前を出すだけで、神主らしき人は肯く。
「琉璃ちゃんは、よくここへお参りに来てくれてね」
聞いてもいないことまで話し出す。それだけ琉璃は馴染んでいる。漁港にしろ、ここにしろ琉璃は顔が広い。誰も嫌悪するような顔はしない。ただ、親父さんを除いて。それが妙な感覚だった。
「あの、お伺いしたいことがあって来たんですけど」
垂れ目がちに俺を見る。怒ることがあるのだろうか。そんな疑問すら湧く人だった。
「何かな？」

「知り合いに聞いた話なんですけど。あ、すみません。僕はこういう者です」
自己紹介が遅れていた。財布から学生証を取り出し、見せる。
「写真家を目指しているのかい？」
「……はい、一応」
即答には躊躇いがあった。正直、どうしたいのかはっきりとしたビジョンはない。
「もしかしたら、天吹関係か、人魚絵巻のことかな？」
「え？　あ……はい。でも、どうして、ですか？」
聞く前に答えを見せられる。
「写真家を目指して、ウチに聞きたいことがある。想像はつくものだよ」
短絡思考だったようで、考えなど容易に見透かされていた。
「構わないよ。来なさい」
しかも、交渉もなしに受諾された。あまりのとんとん拍子に、境内を歩く神主さんの背中を追うことを一瞬忘れてしまった。
社殿――と言っても、一つしかない社殿に通される。外観も小さいけれど、内観も比例している。神殿が中央にあって、後は大して物はない。
「これが人魚絵巻と呼ばれるものだ。全部で六枚しかないんだがね」
指差す方、神殿ではなく、壁にかけられている木に描かれた古い絵。右壁に三枚、左壁に三枚。歴史の教科書に出てくるような絵画絵巻に似ている。
「随分古そうですね……」
綺麗と言うほどではなく、保存状態も完全ではない。それでも、何が描かれているのかは読み取れる。時計回りに物語りは移ろうようだ。
「かれこれ四、五百年はここに収められてきたものでね、天吹伝説の元になっている物語絵巻なんだ。少し、話は長くなるが、聞いてみるかい？」

「はい、宜しければ。あ、これは撮影しても良いんでしょうか？」
ぴんと来るものはないけれど、とりあえずってやつだ。
「フラッシュは劣化に繋がるから、焚かなければ構わないよ」
元よりその必要性はなかった。差し込む光量で事足りた。ピントを合わせ、絞りを絞る。古ぼけた絵が目の前で何かを訴えてくるように写りこむ。
「この町は、かつては民家がわずかに点在するほどの小さな漁村だね、そこに暮らす一人の女がいた」
話を聞く態度としては、いささか自分自身に失礼な気がしたけど、神主さんは俺が撮影を続ける最中にも話しを続ける。聞こうとカメラを下ろすけど、撮影を続けてくれと肯かれ、カメラを構えなおした。
「その女は名前をフクと呼ばれていてね、夫と仲睦まじく暮らしていたそうだ。フクが夫との子を身ごもった頃、夫は生活のために漁に出かけてね、その日は朝から雨と風が強い日だったそうだ」
良くある昔話の典型か。聞き耳を立てながら絵巻を見る。一枚目の絵に描かれている光景が、海へ出る小さな漁船と後姿の女性。構図は分かりやすい。天気が悪いのを灰色が表している。
「夫はフクと子の為に、フクが反対するのを押し切って漁に出た。昔の船だ。今とは違って分かるだろう？」
「そうですね……」
二枚目の絵。船が波に乗っている。葛飾北斎の富嶽三十六景の波のような絵に、漁船が飲まれている。昔の船なら、間違いなく沈むだろう。神主さんの言葉に理解する。
「帰らぬ夫を心配するフクは、悩みに苦しみ、子が生まれてしまうんだ。恐らく精神的ショックで早産だったんだろう。子供は無事に生まれたが、早産に子供は小さかった。フクは夫の無事と我が子の成長を案じて、神に祈り、子供に天と名づけた」
三枚目の絵。フクという女性だろう。子供を抱きかかえている。今の絵画のように鮮明ではないけれど、何となく分かる。子供が希

望のように沈んだ色使いが明るくなった。
「フクは子を産んだ翌日、夫の帰りを信じて荒れ狂う海を見に行った。その時、高波が押し寄せ、フクは天を波にさらわれてしまうんだ。フクは村人に救われたが、天は気づいた時には波の中へ飲み込まれた」
一つの不幸が更なる不幸を招く。夫は帰らず、生まれたての我が子すら、海に連れ去られる、か。解説を聞きながら見る絵は、波の絵の中に怪物らしき姿があった。それだけ当時が現実だか架空だかは分からないけれど、悲惨な出来事だったんだろう。四枚目の絵はおどろおどろしいものだった。
「フクは悲しみに暮れた。ところが、赤子を流された海が、一瞬にして穏やかさを取り戻した。風雨が嘘のように。そして、村人が岩場に打ち上げられている夫を見つけた。夫は不思議と傷一つなく気絶していただけで済んだそうだ」
「え？　そんなことってあるんですか……？」
具体的時系列は不明だけど、無傷で生きてるなんてあり得ないだろ。
「まぁ、昔話だ。語られる過程で話は変わることも有るものだ」
そういわれると二の句はないんだけど。五枚目の絵は夫の絵だった。何か白いもので体を巻かれている。
「この白いものは何ですか？」
「その話には続きがあってね、夫の体を包んでいたものは、フクが天を抱きかかえる際に使っていた帯だったんだ」
「帯？」
着物に使うあれだろうか？
「昔は今みたいに赤ちゃんを抱く際には、布を使って母親と子を結んでいたんだよ」
それなら何となく分かる。
「じゃあ、どうしてそれが夫の体を？」
「それが六枚目の絵だ」

六枚目の絵。そこには海があるだけ。魚のような尾があり得ない方向に曲がってる。昔の人の絵の描き方なんだろうけど、ちょっと奇怪だ。

「その尾ひれは人魚だとされているものだよ」

「人魚？」

これが人魚の尾ひれ？

「そう。夫は海の中で我が子が人魚になって自分を助けてくれたと話したらしい。神への祈りと夫の無事を祈願して名づけられたフクの子供、天がその願いを叶えて、夫を助けた。フクと夫は天が人魚だったから、自分たちを救ってくれたんだと、村人たちに話し、それからは今の伝説に繋がっていてね。漁師の間では、未だに天とフクの物語が、天吹として根付いているんだ」

最後が曖昧な所は、昔話のめでたしめでたしなこじつけと同じだ。

「じゃあ、その天はどうなったんですか？」

「それは、今でもこの海で漁師たちの守り神となって生きているらしいね」

神主さんが笑う。自分たちが一番に信仰すべきじゃないのかと思う疑問を初めから分かっていると、笑いには出ていた。だから言うことはしなかった。

「この神社の祭神は海の神様でね、いつからか、天吹伝説から生まれた人魚が神様として祀られていると思っている町の人も多いんだよ。それに、天はフクと夫を再会させてくれた。だから、この神社には縁結びまでご利益がついたとされているんだ」

物凄い適当な後付。そんな大まかなことで良いのだろうか。いや、良いんだろうな。こんな現実的な世界だからこそ。想像力の強く生きていた昔のことなど、移ろう世事によりめでたい作品になったんだ。

「君は……」

「はい？」

全ての写真に加え、祭壇の写真も撮らせてもらった。得るものは

ないわけじゃない。かと言って、俺の中でくすぶる何かに迫る核心的なものはなかった。
「人魚になってしまった天と言う子供をどう思うかな？」
「え？」
唐突な問いかけに、考えることすら浮かばない。
「フクと夫はその後、幸せに暮らしたそうだ。じゃあ、生後二日で人魚とされた、いや、人魚になった天はどう思うだろうか？　親の愛を受けられず、親の言葉に返すこともなく、波に飲み込まれ、父を助けて、人々に崇められた。それは幸せなことだと思うかい？」
何なんだ？　この人の言葉は。
「神主さんは、どう思うんですか？」
浮かばない考えに、そう返した。
「私はね、娘が同じ思いをするようなことがあれば、恐らく身を挺してでも娘を助けようとするだろうね。娘が助けに来るなら、老い先短い私の方が守るべきだろう？　子を持つ親としては、子に助けられる以上に、子を助けたくなるものだよ」
神主さんの視線の先、社務所で巫女姿で仕事をしている女性、はやり娘さんだった、を遠くから見つめていた。
「それでも、これは昔話で、伝承だ。そう、思いを受け止める存在があるからこそ、漁師は万全を喫して海に出て、家族はその帰りを待つことが出来る。天吹の伝説と言うものは、何かしらの犠牲を糧に生きる人々の、日常の尊さを謳うものなのかもしれないと私は思っているだよ」
日常の尊さ、か。あまり実感有るものじゃなかった。
「君も、大切な誰かをその腕に抱える日が来る。その時に、抱きしめるか、放すかの選択が来るだろう」
「そう、なんですかね……？」
俺が結婚することなんて、写真家を目指すビジョンよりも芽生えていない。するつもりもないと思うほうがしっくりくる。
「ああ、来るだろうね。その時、たとえ道を間違えてしまっても、

傍には助けてくれるものがある」
「それが、天吹、ですか？」
何となく言ってみた。
「天吹はその事柄を理解することだと私は思っている。だからこそ、それとは、天が人魚になり人を助けたように、失うことで知る大切なものへの思いだとは思わないかね？」
神主さんの言葉は、今の俺にははっきりとしたものを見出すことに至るものじゃなかった。俺の受け入れが未熟だから、そうなることは分かっても、その真意を掴めない。ただ、その場限りに肯くだけだった。
「幸せかどうかは、関係ないんでしょうか？」
その人が良ければ、犠牲になろうと、それでいいと思うことはあるのか？
「人を救うことで幸せを感じる人がいる。人を守ることで幸せをかんじる人がいる。人を思うことで幸せを感じる人もいる。人は臆病だ。だから心を隠してしまう生き物なんだよ。その答えは、誰にも分からない」
曖昧な答えが返ってきた。
「一番の幸せは、我侭だよ」
「わがまま？」
神主さんが横を通り過ぎ、視線を辿り、外の光が目を焼きにきた。
「そう。人間は業の深い生き物だ。その時に相手の幸せを背負う我侭もまた、幸せと言うものだ。さて、お迎えじゃないかい？」
「え？　……ん？」
遠い空の下。青い大気に包まれた白い日差しの先、隔壁のように立つ夫婦鳥居の右鳥居の下で、ただ、一筋の光を求める視線と交差した。
「琉璃……？」
たった一人で、こっちを見ている。何も持たず、日傘も何も差さず、ただ、そこに立ち、俺を見ていた。煩い蝉時雨も静かで、ただ、

見つめてくる視線の絶対的な静けさに、駆け出さないといけないような孤独感が足をくすぐっていった。琉璃を一人にしてはいけない。何もないのに、神主さんの話に、何かしら影響を受けてしまったのか、焦燥を覚えた。

「こんにちは、琉璃ちゃん」

それでも、神主さんの言葉が俺を現実へと引き戻す。社殿を降りると、琉璃が歩み寄り一礼する。

十枚目．伝承（後書き）

報告です。

少々厄介なウィルスにやられていたため、現在はＨＤＤの入れ替え作業を残すところになり、もうしばらく作業がかかりますので、予定していた三世界戦争の更新は２１日あたりを目処に変更します。

さらにですが、新たに仕事が入りまして、そちらを優先させねばならないため、今後の更新順序に若干の偏りがあるかもしれませんことを、先にお詫びいたします。

十一枚目．琉璃の言葉（前書き）

時間がなく、少量の更新です。

十一枚目．琉璃の言葉

「お友達をお迎えかな？」
神主さんが俺に振り返る。琉璃の視線も俺に届いた。行く場所なんて教えてなかったんだけど、よく分かったなぁ。なんて呑気なことを考えていて、すぐにそれが違うのだと気づいた。
「……」
神主さんに一礼してからも、琉璃はそこから立ち入ろうとはしない。ただ、静観するようにこちらを見ている。琉璃の背中の水田と商店街の背景に、直射日光が白く景色を染め上げて、琉璃がまるで、神主さんに導かれやってきた、この世のひとではないような幻想性すら感じてしまう。
「どうしたんだ、琉璃？」
しかし、それはあくまで一瞬の幻想であり、現実とは無情にもその一瞬の積み重ねを切り取ることも無く、ただ誰一人として気づかぬ茫漠とした時の流れとして過ぎていき、冷めてしまう。神社の境内に入ってはいるものの、この社殿へは歩み寄ろうとせずに、立ち止まり、俺を見る。俺はそれに恐らく耐えかねたのだろう。社殿を下り、琉璃へと歩み寄る。
「お友達との時間だね。では、私は仕事に戻ることにしよう」
それじゃあ、と神主さんが俺たちに笑みを残して社務所の方へ歩いていく。ふと、その背中に思うことがあった。いや、思ってもおかしくないのではないかと言う仮定でしかないけれど。
男と女。俺と琉璃。何故、神主さんはお友達と言うことを強調したのか。
地元の人間ではない、俺。一見すれば、ただの自己満足でしかないが、琉璃の人懐っこさには、友達以上に思われてもおかしくないのではないか？　しかし、神主さんはそうは一言も口にすることなく、姿を消した。

――ここに、いらしたんですね？
もう見慣れてきたクロッキーブック。そこには、左上から丁寧に埋められた琉璃の言葉が、消えることなくそこにはある。人の言葉は消えていく。でも、琉璃の言葉はそこに書き綴られ、その言葉の隣、上には、どんな会話をしたのか、全てを思い出させてくれる言の葉が残っていた。
「少し、気になることがあって」
急いできたわけでもなければ、俺をあちこち探していた様子も無い。でも、どうしてだろうか？　琉璃が俺を見る目が、いつもと何か違う。そう感じた。いや、俺がここでの生活の中ではじめて見る琉璃の表情だった。
琉璃がクロッキーブックにペンを走らせる。俺はそれを静かに待つ。その手にあるカメラを、今すぐにでもそのクロッキーに集中している、愛らしい姿を一枚でも良い、シャッターを切り、一枚に納めてみたい衝動がある。
――何がですか？
珍しいという印象が湧いた。琉璃にしてみれば、恐らくはここのことは知っているはず。そして俺がここにいるということは、天吹伝説も知っているはず。それを知っていて聞いてくるというのは、少々不思議でもあった。
「天吹のことをね。ここの伝説って人魚姫に似てるのかもなぁって、ここの絵を見て思ったよ」
物語は違えど、誰かを思い、その人のために、海から生まれた命を海へ返す。それが俺が聞いた伝説の解釈。フクは我が子を夫との犠牲に失い、平穏に暮らす。それが正直なところ、いいものだとは思えなかった。何かを犠牲にして幸せになる。たぶん、俺にはそれが嫌なんだろうな。だから、琉璃にも近づけない。俺がここへ何をしに来たのか。それがいやでも脳裏を離れることがないから。
でも、分かってもいる。カメラを構えることが、俺の全てになるというのに、それをしたくても、嫌われても良いという踏ん切りが

湧かない。
良いものを撮る。ただそれだけの為にやってきて、見つけたのに、実行することが躊躇う。それはもう、うそはつけないということだろう。まだ半分の日付も経っていない。でも、気持ちにだけは偽りが利かない。嫌われてもいいならカメラを構えれば良い。そうしないのは、俺のことを好きでいて欲しいから。嫌われたくないから、見栄を張ってでも、笑みを見せて欲しい。
欲が先に来るから目的をその延長で収めたい。
でも、それは俺の主観でしかない。カメラを構えようとして、その手から力が抜けてしまう。俺がカメラを持つ手を下ろすと同時に、琉璃がクロッキーブックを持ち上げ、俺に掲げる。
———天吹は、嘘なんです。そんなものは、どこにもない、作り話です。
それは文字による、消えることの無い、明確な否定だった。
俺はてっきり、琉璃は誰よりもそう言う話を信じているような気がしていた。正直な話、琉璃が親父さんをいつもああやって見守る姿に、はっきりと人魚がいれば、きっと———。なんて淡い幻想を抱いてもいた。でも、それを琉璃自らが否定したことで、真白に染まっていて風景に色が湧き、現実がそこに顕現したように、映りこんだ。
「それはまぁ……。でも、どうして、そう、思ったの？」
琉璃が俺の言葉を聞いて、再びペンを走らせる。俺はその文字を先に追うことはせずに、社殿を振り返る。誰もいない境内。神主さんの姿もどこかへ消えた。静かではないのに静かで、ここが本当に聖域であるのだと、小さく狭い神社でもその役割を、今更になって肌に感じていた。
———それが伝説だから、です。
また明確な答えだった。どう返すべきか悩み、と息だけが漏れた。伝説だから、か。確かに伝説は言い伝えられる中で変化はするし、色も重ねられる。それを継ぐ者が必ずしも純粋ではないからだ。人

は見栄を張る。それこそ、俺もだ。世界が琉璃のような人間だけなら、さも美しい星になるのかもしれない。けれど、同時に俺みたいな人間が生まれること、神は仕向ける。だからこそ、伝説に証拠は残らず、確証も消えていく。真実はやがて忘れられ、嘘に塗り固められていくんだ。

「じゃあ、琉璃はどう思うの？」

それは俺が聞かれた問いだった。神主さんは我侭だと答えた。俺には答えは出せなかったけれど、聞いてみたかった。

琉璃がページを捲り、新しいまっさらなページに再び書き記す。今までもきっとそうして琉璃の言葉は紡がれ、これからもそうなっていくのだろう。それは俺の言葉とは違って、クロッキーブックがある限り、琉璃の言葉はいつまでも残る。それを見てみたい。きっと琉璃という子をもっと理解できるから。自然とそんな気持ちも湧いた。

――人のお話です。あの絵も、それを表しているだけの、昔話です。

あぁ、なんだろうか、この気持ちは。琉璃がそうやって現実を直視させることは、俺にとって衝撃になっていく。君だけは変わらないで欲しい。幻想の中にいて欲しい。そんな我侭が、琉璃の返事を見るたびに、二歩も歩けば触れられる琉璃との距離が、遠のいていってしまうように感じる。

そうして、琉璃がまたペンを走らせる。その姿は俺の視界にありながら、どうしてか、俺には捉えられなかった。

――信じますか？

琉璃が見せるその文字。俺はショックだったのか、衝撃的だったのか、琉璃がそっとブックをずらして俺を覗き込む、その怒っているような、不機嫌な、真摯を確かめてくるような表情に、思わず息を呑んでしまう。記された文字は、放つ言葉、聞く言葉に宿る言霊よりも力がある。それは、琉璃が何も言わないかもしれない。

「いや、現実的には……う」

だが、俺の答えは不満を得た。琉璃がもう一度、はっきりと俺にそれを認識させるように突き出してきた。突然のことで困惑するしかなかった。瑠璃がどうしてそこまでして否定するのか。そして、それを俺に求めるのか。本当に分からない。写真を構えることなんて出来るはずのない状況だった。

「……たぶん、信じはしない、と思う」

年下の女の子に言い寄られて言いよどんでしまう俺。情けないというよりも、琉璃のそのギャップについていけていなかった。

――はい。私も、同じです。

俺が搾り出した、それでも間違いのない現実の答えに、琉璃は静かに俺に肯いた。けれど、琉璃に笑顔は無かった。

その後は少々気まずい空気が続いた。それを追求していいのか、悪いのか、琉璃が先を歩き、俺はその小さな背中を追う。会話は無いのは当然としても、話しかけることも浮かんでは来ない。

分からないことを抱えているのはストレスなのだろう。解き明かしたい。そう琉璃の背中に思っても、口には出せない。

「琉璃」

それでも俺は、口を開いてしまう。先ほどまでの表情はどこへやら、琉璃は俺に振り返り髪を揺らす。疑問符を持つ表情が俺を見る。

「あ、えっと……」

あまりにも普通の表情に、目を逸らしてしまう。

「あの、さ」

――はい？

琉璃がそう言うように、足を止め、小首を傾げる。

「琉璃は……」

琉璃を見て、口が開く。でも、言葉が詰まってしまい、その先を紡げなかった。

「あ、いや。やっぱりいい……ごめん」

――？

また俺を覗き込むその瞳の深い色に、なんでもないとごまかしの

笑いを琉璃に浮かべ、琉璃がまた背中を見せると、俺は下唇を噛んでしまった。

――君は、そうじゃないんだろう？

その一言すら、俺は聞けないのか。情けなさと、何故琉璃がそれを言ってしまうのか。俺の中で何かが崩れそうだった。

十一枚目．琉璃の言葉（後書き）

次回は６日に辺りにｓｏｌａを更新します。

十二枚目．白と青と喪失と（前書き）

長らくぶりの更新です。一応予定通りに更新をしているので、今後ともよろしくお願いします。

十二枚目．白と青と喪失と

「そういえば、どうかしたの？」

触れない話題を飲み込み、理由を聞いてみる。海は青いという印象を払拭する輝く銀の光の反射に、頬が意味もなく暑い。忘れていた夏の熱気が、海沿いの潮風を突き抜けて照らしてくる。相変わらず車の通らない通りと、海をたゆたう漁船が遠くへと消えていく。

――何がですか？

「いや、なんて言うか、どうして俺を？」

うぬぼれにならなければ良いが。何て下らないことを一瞬でも考えてしまう。瑠璃の先ほどのことが忘れられないからかもしれない。

――お昼、まだですよね？

さらさらり、とでも表現が似合うようなペンの動き。優雅で可憐に見えるその姿とは裏腹に、どうやらうぬぼれだったのだと、その言葉に少しがっかりしたものを感じた。

「それなら親父さんに言ってあったんだけど……？」

親父さんには言っていたはずだ。琉璃の手には買い物袋はない。つまり、先ほど俺と別れてから買い物に行き、一旦は家に帰ったはずだ。わざわざ俺を探しに来たということは、どう考えても親父さんに話を聞いたはずだ。でも、琉璃は俺に昼ごはんのことを聞いてくる。それが少しだけ引っかかった。

――お客様、ですから。

その文字には至極当然のことが記されていた。だからこそ、俺は少しばかり心に響く、わずかな痛みがあった。そして、それは俺のここへ来た目的まで明確に思い出させる。恋人とは言わない。友達でも良い。親父さんにはそんなことを頼まれた。だからこそ、俺はまだ幾日も経ってはいなくとも、少しは距離を縮めた気がした。

でも、それは気がしただけで、琉璃はそうは見せてくれなかったらしい。手を伸ばせば感嘆に胸の中に納まる距離にいながら、遠い

な。琉璃の当たり前の返事に、その文字を眺めるだけだった。
「いや、親父さんに聞いたならそれで良いんだ。あんまりお腹が減ってるわけじゃないし。この暑さじゃ、ね？」
民宿には民宿の価格にあわせた食事があるのだろう。琉璃はただ、俺にそれを伝えたくてここまで来た。どこか気持ちが落胆する中で。きっと親父さんにも琉璃は同じことを言ったはず。そう思うと親父さんの呆れの吐息が聞こえる気がした。
――冷たいもの、ありますよ？
優しさか、接客か。どちらも当てはまるんだろうな。神主さんがお友達と強調したことで、そうだと自分自身が納得する。けれど、当人ではそれが当てはまらない。なんだろうか、この、燻るもどかしさは。
「それは夜にお願いするよ。もう少し、一人で見て回りたいんだ」
琉璃は人と話す時、話し手を直視すると思う。ここへ来てそれが何となく分かった。だからこそ俺は、少しだけ琉璃と目を見て話すことが恥ずかしい。気軽じゃいられない。琉璃との会話は顔を合わせなければ分からない。琉璃がまたペンを走らせる。その間だけ、俺は琉璃の視線から逃れ、何故かほっとしてしまう。
――分かりました。お父さんにも、言っておきます。
「ありがとう。わざわざごめんね、暑いのに」
小さな笑みで、首を振る。琉璃の髪が踊るように揺れ、沈黙がやってくる。今だけはどうしてもその表情をカメラに収める気にはならない。
「じゃあ、また後で」
肯く琉璃を追い越す。一瞬の芳香が胸の奥深くにまで達し、「あぁ、ごめん。写真が撮影できるおススメのポイントがあったら教えて欲しい」なんて、良いわけじゃないけど言い訳がましい言葉とともに振り返りたい衝動があった。横を通り過ぎるだけで香る、甘く柔らかい香りは、それだけで俺を突き動かすのかもしれない。
ついてくる足音は無かった。俺の履き古しのつまらない音だけが、

付きまとう。
「本当に難しいな……」
どんなきっかけがあれば、琉璃のあの笑顔の写真を撮影できるだろうか。一度泣かせてしまったことがある種のトラウマのように、同時に甦る。夏の青さに消えていく真珠の涙。出てくるのは暑さに余計に苛立つ俺のため息だけだった。

橋を越え、汗だくの額を拭い、上着を揺らせて風を送る。照り返すアスファルトが俺を嘲笑するように陽炎を呼び、足取りを重くさせる。涼しいところへ。ただそれが目的ではないのに、そこを求めるように歩いた。
「一人じゃないとダメって言ってたっけ」
当てもなく彷徨い、夏休みの小学生か中学生が数人で堤防から竿を垂らしているのを眺めた。レンズで捉えても、それはあまり意味を持たず、シャッターは切らなかった。
琉璃が俺とであったときに言ったこと。みんなの中には入れない。一人じゃないといけない。そんなことを言っていた。それに学校にも通っていない。何度も考えたことが、また甦る。聞いてしまえば結果が見えるだろう。その代わり、俺が琉璃と親父さんとの空気を汚してしまう。難しいな。親父さんに頼まれたとは言え、俺は琉璃を海から遠ざけるような真似が出来ないでいる。その理由が分からないから、言えないんだ。
「あー、もぉ、あっちぃ～」
まとわりつく、じゃない。べたべたとどこかしこも舐められるような暑さの不快感に、いい加減うんざりする。昨日の日焼けがまた一層濃くなっていく。近くの自販機でスポーツドリンクを買った。一気に喉元を通り過ぎる冷たい爽快感に、体内が急激に落ち着く。冷たさが胃にたどり着くまでを感じさせるが、喉の渇きだけは満たされなかった。
「人魚、ね」

俺は勝手に琉璃にそれを重ねている。それはもう、自覚するしかない。だってそうじゃないか。琉璃のあの可憐な美しさと清らかな心。人ではないだろう？　じゃあ、俺は人魚に恋をしているのか？

人じゃない、人魚に。そんなことを考えると、余計に喉が渇く。今買ったジュースが、すぐに空になる。軽くなるペットボトルを思いっきり投げたら気持ちも少しは軽くなるだろうか。……ポイ捨てしただけだな、それじゃ。そんなことを考える余裕があるのに、何故カメラを構えられないのか。

別にトラウマは無い。ただ、周囲の夢や希望、技術に圧倒されて、尻込んだだけ。それだけで写真を撮ることに自信がなくなるか？

――――なくなるんだよ。

貪欲にカメラを構え、被写体を切り取る友人。その目的がどうであれ、それぞれが目指す先に強がることも無く、純粋じゃなくても、それを目指す楽しさに勉強している。この夏休みに入ってからもきっと、そうやって写真を撮影し続けているはずだ。それが楽しく、愉快で、気持ちが良いと知っているから。

「違うテーマにする、か……」

まだ二日。まだ日にちはある。そう考えれば余地は出てくる。でも、今の俺はそれも湧いてこない。夏休みの宿題など最終日に急いでやりそうな子供たちにピントを合わせ、その楽しそうな姿を、遠巻きに撮影した。

眩しさに銀色に輝く海。堤防の脇の階段から砂浜におり、自分の影を撮影する。何をテーマにしているのかは分からない。ただ、写真を撮影しておけば、最悪、夏とでもテーマを決めれば一応作品にはなるだろう。暑さの中で、俺は答えの出ないことに悩むより、とりあえずの気持ちでカメラを構えることにした。それに意味がないと分かっていながら。

子供は元気だ。こんなにも何もない地方の海町なのに、この茹だるような暑さなのに、数十メートルは離れている俺のところまでその威勢の良い明るい声が届いてくる。蝉時雨にも左右されないその

声は、レンズを向けるうちに不思議とアングルを考えてきてしまう。もっと近くで、上から子供たちの溢れる声を切り取って、下から暑さなんてなんのその元気の汗を映し出す。子供の目線から子供の感じる、俺が少しずつ忘れていく、子供にしか見えない世界を撮影してみたい。そんな衝動を覚えさせ、俺を歩かせた。

近づく為に歩く砂浜。靴を履いていても、その靴の中にまで熱気が沸き立つ。額の汗は止まらず、足取りが涼を求めて汐を目指し、頭に描く目的地へのルートがずれていく。チャポンチャポンと決して綺麗というわけではなく、岩が出ていたりする砂浜。海水浴客の姿は無い。遊泳禁止の看板が出ている以上、釣りをする子供の姿が離れた堤防にあるだけ。靴を脱ぎ、波間に足を浸す。引き波に掬われる砂がこそばゆく、決して冷たくはないにしろ、靴に篭っていた熱気は取り払われた。

「泳ぐのも、悪くないよな、今日は」

カメラを自分の足に向けてシャッターを切る。輝く水面に揺れる足。男の足だから、見栄えはしない。

「あの時、撮影してれば、これ以上だったのかもな」

琉璃に誘われた諏訪神社脇の水路。あの時の琉璃の足だけでも綺麗だった。撮影していたデータの中にある、ちょっとだけ写った琉璃の足。まるで俺のものとは異なる白さと美しさ。それだけしか写っていないのに、それだけに俺はやはり、良いと思ってしまう。今撮影した子供たちの躍動など比べるだけ無駄、と思うほどに、脳裏を消えない。

「よっしゃ、泳いでいこうぜっ」

つりをしていた子供たちが暑さに負けてきたのか、堤防の階段を駆け下り、俺のいる砂浜に来た。小学校中学年ほどか、三人の少年が釣り道具を置くなりすぐに上着を脱ぎ捨て、スリッパも履き飛ばし、海へと駆けていく。

「あ……」

楽しそうに浅瀬を子供たちが駆け回ったり、泳いだりしている。

でも、現実に俺は気づいていた。この砂浜は遊泳禁止。堤防の隣はカーフェリーが運航している港だ。俺は涼を捨てて子供たちの方へ向かう。

「おーい、君たち、ここは泳いじゃダメなんだぞー」

俺の声に子供が俺を見る。さっきまでの元気な笑顔ではなく、奇異と言うか、誰？　と俺を見る。

「ここは遊泳禁止だ。危ないぞ」

近くまで来ると、子供の視線が、俺を迷惑そうに見る。だが、危険なことがあっては大変だろう。他に人気が無い。子供が子供を助けるのは難しい。

「平気平気。俺たちいつもここで遊んでるし、浅い所だけだし」

「そうそう。兄ちゃん、この辺の人じゃないんでしょ？　地元の俺らの方が詳しいんだって」

そうかもしれないけれど、そう笑いながら言うと、どうも俺が馬鹿に思える。確かにそうだ。俺は昨日ここへ来た。この子達はきっとここで生まれ育ち、この環境を熟知しているだろう。俺には退屈な場所も、子供にはそれを遊び道具にしてしまう発想と力がある。

「そうかもしれないけど、深みには行ったら危ないからな」

俺の声に、だいじょーぶ、と子供たちはまた泳ぎだす。

「やれやれだな」

普通に流されると呆れるばかりだ。でも、子供のことも分かってしまう。いや、恐らく人間にとって、それはいくつになっても変わることの無い、してからの行動だ。後悔するなら後にする。それが日本人の本能のようなものだろう。俺もそうだ。友達同士で楽しい時間を過ごしているのを大人に邪魔されても聞く耳なんて持たない。まだ俺も大人にはなれていないのだろう。

「しばらくここにいるか……」

目的は無いが、何となくの気持ちでここにいることにした。気まぐれに強くなる波や風は、本当に気まぐれに強く寄せたと思えば優しく集まる。

子供たちがその中ではしゃいでいる姿に、混ざりたいと思う気持ちがある。
「あっちぃ」
茹だる暑さを助長する蝉と照り返し。写真を撮影する気なんて起きない。気力を剥奪され、残されるのは白い倦怠感。網膜を焼く海の反射光。何故か焦燥を覚える入道雲と、夏の子供たち。撮影をしろと内心の自分が呼びかけるが、疲労ではない気持ちがその動作さえも億劫にさせてくる。生憎日陰なんてものはなく、カメラとカメラバックを肩にかけたまま足を海水に浸す。それほど鮮度の感じられない透明な水の中を、地に引き込むように砂が波にさらわれていく。どうして一人だとこれほど夏だと感じさせる全てがあるというのに、灰色の風が吹きぬけるような孤独を覚えてしまうんだろうか。
「ん？」
ポケットが振動した。出ている表示は愛紀。表示される時刻は、そろそろ課外が終わる頃だった。
《あ、お兄ぃ？》
「どうした？」
最初のその声色が、明らかに涼やかで快適な場所にいるのだと分かるほどに声は明るい。裏腹に俺はやる気のない声が出た。
《お兄ぃ？　どうかした？　声低くない？》
「暑いんだ」
《外？　撮影中だった？》
「海にな」
途端に、不満げな声が返ってくる。暑さに茹だっている俺の気だるさを知る気はないらしく、ただ、海という言葉だけに反応していた。
《ずるっ。妹が必死で勉強してるのに、お兄様は海でバカンスなんて》
不平不満があるのは分かる。愛紀が辿っている道は、俺も辿っていた道だ。でも、それは高校生として、進学校に進学した以上、当

然のこと。まだ愛紀は慣れていないのか。いや、単純に面倒なだけだろう。
「で、何か用か？」
《もぉ、ずるいんだからぁ。帰ってきたら連れてってよ》
話を変えようにも、そのつもりは無いと主張するように聞き流された。耳は愛紀の声に傾け、この暑さの中で不満を聞くのはしんどい。だから視線は子供たちのはしゃぐ姿に向けた。
「用がないなら切るぞ？」
《別に用ってわけじゃないけどさぁ、帰り、大丈夫？》
しばらく話に強制的につき合わされ、やっと本題に入ったらすぐ帰りのことだ。そう簡単に帰る気にはならないって言うのに。
《昨日ね、天気予報で言ってたけど、お兄ぃが帰ってくる日ね、来ちゃうみたいだよ？》
台風のことらしい。俺に電話するのはそんなことしかないのかと思う。それくらい自分でどうとでもする。心配なのは分かるが、今の状態の中じゃ、ありがた迷惑だ。
「大丈夫って言ってるだろ？　子供じゃないんだ。自分で決めるよ」
あぁ、言って気づく。俺は子供なんだろうか。それとも大人なんだろうか、と。打ち寄せる波に足を着け、腰を下ろす。でん部から伝わる熱は、収まるところを知らないように、汗を吹かせる。
見つめる先の子供たちは、いつの間にか先ほどよりも遠くを泳いでいて、三人が互いの泳力を競うように潜ったり、クロールをしていた。気持ちが良さそうだった。誰かの心配なんてまるで気にしないその様子は。
《でも、お金足りなくなるんじゃないの？》
「気にしすぎだ。こっちで使うものなんてジュースくらいだ。まだまだ懐は温かいぞ」
そんな俺にお小遣い頂戴、なんて冗談のようでそうでもないような声が返ってきて、話題がどんどん脱線しているようにしか思えなかった。

《そういえばさ、人魚のこと、何かあったの？》
そういえば愛紀はサボったんだったな、課外。朝聞いていたのにすっかり忘れていた。
「ああ。神主さんに絵を見せてもらったよ。思っていた以上に綺麗な絵だったな」
《私も見てみたぁい。写真、撮った？》
「帰ったらな」
携帯で撮影しておけばメールで送ったかもしれないけど、一眼レフだけだ。ネットも民宿の部屋には繋がってなかったから、お預けだな。
《それで、写真はどう？》
「写真？　だから撮影したぞ？」
そうじゃないよぉ、とふにゃっとした声が耳にこそばゆい。
《課題だよ、お兄ちゃんの学校の》
「……あぁ。まぁまぁだな」
テーマはある。だが、被写体との接し方に戸惑いが出てきた。ただでさえ難しい撮影がより難しくなる。
《せっかく情報教えてあげたのに？》
「参考の一つにする、しか言ってないぞ？」
さっき撮影した子供たち。ばしゃばしゃと水をかいて声を上げている。だが、やはり敵わないのだ。あの時、勘違いの言葉だったこと。
———琉璃にはかなわない。
その通りだった。
まさしく誰も、琉璃には敵わないんだ。俺の中では。
《ほんとに大丈夫？　お兄ぃ、帰ってきてから、本当は悩んでない？》
愛紀の言葉は、それが二度目。そこまで分かりやすいのか、あの日の俺も今日の俺も。
「なかなか思うとおりの写真にならないだけだ。よくあることなん

だよ」
俺の中では、だが。愛紀の言葉を話半分に聞きながら、暑さの中で踊る少年たちの夏に眼を向ける。爽快と言うわけではなく、ありふれた夏休みの、ありふれた光景。ただ、それが俺には少しだけ新鮮で、少しだけ遠くに見える。
「……ん？」
《そうかなぁ？　お兄ぃ、帰ってきた時より疲れてるみたいな声してるよ？》
愛紀の声が遠くになった。俺の意識が耳から遠くの音を狙う。人は目で見た情報に依存するが、それは本能の大半が勘違いしているだけ。だからこそ、携帯を当てる耳の逆から聞こえる声の不調和に違和感が強くなり、視界がそれを補正する。
「……」
目を凝らす。いつの間にか子供たちが随分と遠くにいる。それでも他の海水浴場と違って近くに入る。でも、その様子がおかしいというよりも、やけに大きく水を掻き、飛沫が上がっている。
《お兄ぃ？　聞いてる？》
「……まさかっ」
そう思った瞬間、携帯を放り捨て、立ち上がる。高くなる視界から見えるその光景の意味。
「マジかよっ、ちょっ、誰かいないのかっ！？」
泳ぎ方が違う水の白い飛沫。耳を澄ませば聞こえる、おいっ！動くなっ！　落ち着けっ！　の声に事態の異変を認識した。辺りには人影が見える様子が無い。ここに俺がいるだけだ。どうすれば良い？　俺が助けなければいけないのか？　誰か他に助けに出てくれるようなヒーローみたいな奴がいないのか？　そんなことを考えようとしても、頭の回転はついては来なかった。
「くそっ！」
《お兄ぃ？　ちょっと、お兄ぃ？》
考えるよりも早く体が動いていた。肩にかけていたカメラとバッ

グを放り投げ、羽織っていたシャツだけを脱ぎ捨て、そのまま海に飛び込んだ。投げ出した携帯から聞こえる愛紀の声は、砂地に埋もれた。

踏み込む海の中は、陸上には無い抵抗が俺の体をより重たくさせる。暑さに満ちていた体にしみこむ生ぬるい海水が無尽蔵で湧き出てくる手足となり、全身に纏わりつき、火照った体温を解きほぐす涼となる一方で、抵抗を重たくさせ、前へ進ませることを咎めるように体がうまく動かない。

着衣水泳のせいだろう。中学だったか高校だったかで泳いだ記憶が過ぎる。だが、具体的にやったことなど忘れた。ただ、きちんとした泳法をしなければ、己自身が危険だったはず、とだけ思い出してしまった。クロールで泳いでも体が重くなるにつれ、足を上げることが辛くなる。思っていた以上に浅瀬がすぐに無くなり、俺でもやっと足が届く程度の深さが進むにつれて深みを増す。沈む体をもがかせ、蟻地獄に落ちまいと奮闘する虫けらのように、俺は泳いだ。

「うをっ……」

だが、そのあがきが、ふいに安定を失い、恐怖に変わった。さほど深みじゃないと思い、息継ぎで海底に足をつけて、飛び上がろうとしたら、その足がストンと力を抜いた影響で沈んだ。深い。想像以上に急激な深さが全身を恐怖に落とし込め、這い上がるように海面を目指す。煌めく海面の様子など観賞する余裕はなかった。

「はっ！　……！」

他の海水浴場だったら、まだ足が着くか、深くはあっても大人なら顔が出ているはずの距離で、全身が海底に引き込まれる。少しパニックになった。全身を包み込む水の恐怖に、感じたことの無いべたつく力が這い上がらせる。無我夢中になりつつ、足を動かすと靴の片方が脱げる感触に、少し足が軽くなり、子供たちの所に頬を膨らませ、顔だけでも沈まないように浮かんでは沈みを繰り返した。

「大丈夫、かっ！」

「亮二がっ！　っ……おぼれた……っ」

立ち泳ぎをしながら友人を支えようとする少年が俺に助けを求める。だが、その子ですら、あっぷあっぷと顔が海面に消えては浮かんでくる。もう一人も少年のそばで落ち着け、と声をかけているがやはり同様に顔が海面下に沈んでは浮かび上がる。

「君た、ちは……先に、陸にっ」

かく言う俺も、そのときには人のことは言えたもんじゃなかった。想像していた以上に深度があり、近くに来ると、体を立て直そうと泳ぎを止めたら、体が海に引き込まれた。足の着かない恐怖がとっさに俺を追い込む。空気を。ただそれだけを求めて、もがいた。

「亮二を、たすけ、て……お願、い、だよっ」

「早、くっ！」

二人が俺のそばに来ると、そう大声を出す。重い体で生まれて初めて泳ぐ立ち泳ぎに全身の筋肉に痛みを感じながら、先に戻れと俺も大声を出していた。

「大丈夫、かっ？」

そして誰よりも海面を激しく叩く少年。俺の顔にまで飛沫がかかり、呼吸が苦しさを増す。返事は無く、ただ、苦しそうにもがき続けるだけだった。体に手を伸ばすと、重い抵抗だけだった中に、更なる重量が俺の体にしがみつくように伸びてきた。

「お、くっ……」

自分だけでも助かりたい。そう本能が動くように少年が俺の体を強く抱きしめてきて、その重さが俺の中にある不安を直撃した。急激に重みを増す全身が海底へと引き込む。見えていた青空が、揺らめく世界の中に消え、全身が圧迫され、鼻が痛くなり、口まで柔らかい世界に押さえられ、急激に死を思わせる苦痛が走る。体を激しく動かし、波の間に浮かぶ。

「げほっ、えほっ……」

何も考えてなどいなかった。ただ生きることに執着し、紙一重に存在する死から逃れる為に、泳ぐだけだった。一瞬でも涼を感じたことが、馬鹿馬鹿しいような、誰かを支えて泳ぐという行為に後悔

した。何度も体が沈み、少年がそのたびに暴れ、力任せに少年を持ち上げ息をさせ、すぐに沈んでくる少年と入れ替わるように俺が水面に顔を出し、陸を目指して足を動かす。
「おち、つけっ！　うご、く、なっ」
動かれると体の自由が無くなり、すぐに視界が涙で溢れたように見えなくなり、息が出来なくなる。必死なのは分かった。けれど、俺だって必死だった。少年が暴れてその腕が俺の鼻や頭を遠慮なく叩きつけ、苦しさと痛みは地獄かと思うほどだった。
顔に大気が触れるたびに、亮二と叫ぶ少年の声が聞こえる。どこに陸があるのか分からない。けれど、足が着く場所まで。ただそれだけを考えて泳ぐ。自分がどこにいて、どんな状態なのか客観視など出来ない。生きることの苦しみだけを味わい、足に力を注ぐ。
「……はっ！」
不安定な水中を蹴り飛ばすように足を踏み込んだとき、やっと安心できる固さを感じた。足が届いた。それだけで、感じていた苦しみが消えていくのが分かった。どこかへ落ちていくような恐怖が、砂の柔らかさがあるだけで、助かる、と言う希望に変わる。
「大丈夫だっ！　もう足が着くっ」
少年を抱きしめる度に、沈んでいた体が、砂に支えられ、顔だけは何とか海面から出た。苦しさから逃れる為に呼吸をしても、咳が止まらず、息も激しく上がっていた。
足が着いてからは早かった。階段のように砂が厚みを増し、俺たち二人でも普通に顔が出た。少年はその瞬間にお礼状に激しく咳き込み、俺に強くしがみついた。それでももう、体が飲み込まれることが無かった。
「亮二っ！」
「亮二っ！」
ばしゃばしゃと先に陸に上がった少年二人が俺たちのところに水を掻き分け泳いでくる。
「早く、陸に」

「う、うんっ」
「亮二っ、大丈夫かっ？」
上半身が余裕で空気に触れると、俺は二人とともに少年を浜辺に上げた。その瞬間、俺は全身の重たさに倒れこんだ。少年もどさっと倒れ、相変わらず激しく咳き込み、二人が必死に声をかけていた。
「誰か、大人を……呼んで、来るんだ……」
それが先決だった。俺も海水は飲んだが、呼吸困難には何とかならなかった。でも、少年は咳き込む度に少しの海水を吐き出していた。俺にはもうどうすることも出来ないし、動ける体力と気力が無かった。すぐに走り出す二人を見て、少年に近づく。
「大丈夫か？」
苦しそうに咳をしながらも、呼吸はしていた。俺と同じように息切れしながらも。
「生きてる……」
それだけで酷く安心した。それが俺なのか、それとも少年のことなのか———双方のことだろう。マラソンしても感じたこの無いような息切れ。溢れている空気が、これほどまでに生きている心地を感じさせるなんて、思いもしなかった。
「大丈夫かぁっ？」
そしてすぐに男の声が聞こえた。助けを呼びに言った少年が横になる俺の視界に、天地逆に見えた。
「おい、二人ともっ！　大丈夫かっ！」
男が砂浜をけりながら掛けてきて、目の前で止まった時、男の足から砂が頭にばさっと当たったが、今はそんなことを気にする場合じゃなかった。
「俺は、平気です。この子を」
平気だと言いながら体は動かないし、息切れも治まらない。説得力なんてないが、俺の方が落ち着くのは早かった。男は少年に声をかけ、大事じゃないと分かったのか、少年を抱きかかえる。
「兄ちゃん、おめぇも海水飲んだだろ？　診療所へ行くぞっ」

そう言うが、立ち上がる気力が無い。それに俺は本当に大丈夫だった。しばらくすれば元に戻る。そう声に出たかは分からないが、男がすぐ戻るからな、と言い残して少年たちとともに階段を上がって、堤防の向こうに姿を消した。

「はぁ……はぁ」

気だるさではない、無気力のような力のなさに、全身が干される干物のように太陽と夏の熱気に包まれる。汗なのか、海水なのかが顔に垂れてくるが、拭う元気も無かった。ただ、生きているという実感と、安直な行動だったと若干の後悔に、呼吸が収まるのを待つだけだった。

《お兄ぃ？　ねぇってばっ！　どうしたのっ？　お兄ぃ》

誰もいなくなった海岸で、声が聞こえた気がした。

「あ、き……」

顔を傾けると、頬に砂の熱を感じ、視線の先、手の届かない場所に、俺の携帯が突き刺さっていた。小波に掻き消えないようにな愛紀の声が、より俺が今何をして、無事に地上に戻ることが出来たのかを知ることが出来た。

「はぁ、はぁ……」

何を考えたら良いのか、何も考えが浮かばなかった。

空の青さが目に沁みて、雲の白さが遠かった。愛紀に答えてやりたかった。でも、感じたことのない疲労に、それすら出来なくて、しばらく愛紀の声が聞こえていたけど、やがて通話を切ったのか、その声が耳に届かなくなった。

「靴……無くしたな……」

背中に感じる砂の暑さ。頭から足の先にまで及ぶ夏が包み込む中で、片方の足が砂浜にめり込み、足の指に潮風がこそばゆさをもたらし、靴下までなくなっていたことに今更気づいてしまった。

何かを得る為に、俺は何かをなくさないといけないのかな。と、思わずにはいられないほどに、またなくしてしまった。それでも、助かる命を助けられた充実感に心は静かに空を見つめさせた。

砂浜に戻ってくるいくつかの足音が背中からわずかな振動になって感じるまで、大の字から動くことが出来なかった。

十二枚目．白と青と喪失と（後書き）

閲覧ありがとうございました。

次回更新予定作品は、「ｓｏｌａ」です。

更新予定日は、ＧＷ頃になると思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2091e/

波の間に間にうたごえを

2010年10月12日14時05分発行